めぐねえが好きです！

アテナ（紀野感無）

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学校が嫌いだ。別に、勉強が、って意味じゃない。

人が、嫌いだ。

なんで、わざわざ虐められに行かなきゃいけない。

中学校の頃に、事故で両親が他界して。あまり親戚もおらず、知り合いとしての交流のあった佐倉さんのところに、正確には当時は大学生で一人暮らししている佐倉慈さんのところに、学校が近いという理由で引き取られた。

慈さんは、とても優しかった。

だからこそ、イジメにあってる、なんてことは言えなくて。

段々と心も荒んでって。作り笑いも、それに並行して上手くなった。

慈さんが赴任したという私立の高校に行くも、僕は結局変わらなかった。

でも、慈さんだけは、好きで、好きで、好きだ。

あの人に心配をかけたくなくて、ずっと学校には、行っていた。

心を、殺して。

～～～～～～～

はい、作者です。めぐねえ生存ルートを書いてる方がなかなかないな……って思った結果、なら書けばいいんじゃね？っていう結構安直

に執筆。
先程のシリアスなのは一応、念のため。はい、念のため。
他の作品を書いている時の息抜きに書き進めようかな、って思ってるので更新は割と遅めかも。
それでもいいという方は、楽しんでもらえたら幸いです。
ぬしは豆腐メンタルです。実際に他の作品でボロカスに言われたりして心折れた。
予定としては卒業までは書くつもりです。
さて、ここで主人公達…とは言ってもオリ主&由紀ちゃん&めぐねえについて補足。
オリ主→由紀ちゃんほどではないが壊れてます。由紀ちゃんとりーさんやくるみの中間?みたいな感じ。惨劇が起こったことも認識してはいるが、壊れてる、って感じです。
由紀ちゃん→言わずもがな、壊れてます。めぐねえが生存してるからとは言っても結局みんな生きてるものだと、何も起こってないと錯覚している。原作等ではめぐねえのアレコレがあって壊れたが、ここではその過程をすっ飛ばします。いや、めぐねえがいなくなった時のことも関係してるけどね。
めぐねえ→生存してます。はい。むしろめぐねえが生きてる学園生活部を描きたかっただけ。一応、性格等は本来のめぐねえよりは由紀ちゃんの妄想のめぐねえに近い感じで書いていきます。なぜなら、タグにもあるように、シリアスよりかはゾンビなんていなかったんや、ってくらいほのぼのする感じで書いて行くからなっ！
そんな感じで書いていきますので、楽しんでもらえたら幸いです
（2回目）

目次

プロローグ ―― 1
1話　また由紀姉が変なことを言いだしそうです。 ―― 11
2話　学園生活部によるレッツ肝試し！ ―― 23
3話　やっぱ肝試しは怖い ―― 31
4話　世界が死んだ日 ―― 42
5話　地下の地獄の始まりと終わり ―― 65
6話　由紀姉は遠足をご所望です ―― 89
7話　いざ遠足！ ―― 98
8話　生存者発見 ―― 118
9話　生存者との邂逅 ―― 128
10話　弱音 ―― 145
11話　胡桃さんへのリベンジ ―― 160
12話　たまには息抜き ―― 169

プロローグ

今日も、いつも通りの、いやな一日が来る。

「……」

学校は、嫌いだ、来る意味がない。

別に勉強が嫌いなわけじゃない。むしろ勉強するのは好きな部類に入る。自分の知らないことがどんどん出てくる。未知の世界が、広がっている。

でも、人付き合いとかいうものがあるからだ。

勉強はできても、付き合いが悪いというだけで、あっという間にクラスの中では孤立する。

小学校、中学校共に、ただ単に用事等でクラスでの集まりなどを断らなければならなかったのだが、それが原因でイジメにあった。

それは、去年入学した高校――――私立巡ヶ丘学院高等学校でも同じことだった。

両親ともに他界しており、兄弟もいない。

ある人が引き取ってくれて、その人は高校の先生をしているためなのか、いつも帰りが遅かった。

だから、その人の分の家事…洗濯は下着類をのぞくけど、それは僕が担当の仕事だった。

そして、生活費を負担させたくなくて、中学からはアルバイトもした。

しなくてもいいよ、とは言われたが、それは何となく嫌だった。

でも、それが原因でイジメられた、なんてのは言えるわけもなく、心配をかけたくないからイジメにあっていた事すら言えなくて。中学校を卒業し、わざわざ引き取ってくれた人――――佐倉慈（さくらめぐみ）さん、高校では通称めぐねえ、らしい――――には、ずっと気丈に振舞って、それで同じ中学の人が誰もいかないような高校……要は当時に慈さん

の所属している同じ高校、しかも私立にわざわざ来たというのに同じことになって。
同じ高校にいるからなのか、慈さんには感づかれやすくなっていて。

決定的だったのは、高校で明らかなイジメ現場と呼べるものに慈さんに目撃されてしまったことだった。

それを見られたときは、どんな顔を僕はしていたんだろうか。

～～～～～

「ｚｚｚｚｚ…」

ジリリリリリリ!!

「んぁ…」「ん～……」
もう、何十回と聞いた目覚ましが鳴り響いた。
時計を見ると8時を示していた。
「……ほら、由紀姉。起きろ」
「……もう…ちょっと…」
「とっとと起きないと朝飯なくなるぞ」
「…じゃあ……持ってきて……」
「(怒)」
ボカっ
「あぅ…」
このとき、隣で寝ているやつ…丈槍由紀、俺の中での通称由紀姉の頭を叩いた俺は悪くない。
「ゆきちゃん、零(レイ)君。起きてる?もう朝ごはん出来てるわよ」

「めぐねえ、ちょっと待って。このアホを叩き起こす」
「ほ、ほどほどにね……」
俺たちが寝ていた社会科準備室の扉越しに慈さん――――めぐねえの声が聞こえてくる。
あ、自己紹介遅れました。俺は丈槍零（たけやレイ）。隣で寝てるやつの弟でございます。
いや、うそです。血がつながっているわけではなく偶々、名字が同じ、というわけであって。俺のほうが年下ということだから、この人に勝手に弟認定されただけです。
先輩なんだけど、先輩呼びするのも阿保らしいので先ほどのように。弟認定されたってことはオーケーですよね？
…本当は名前呼びをしてくれって言われただけなんです。
「って…早く起きて！何で『あぅ…』まで言っておいて寝てんの！」
無理やり布団を剥ぐと、観念したのかのっそりと動き出した。
「制服、ここに置いとくから」
「はーい……」
ロッカーから勝手に制服を取り出し、そばに置く。
どうやらまだ寝ぼけているらしい。なので、背後からソーーット近づいて……。
「隙あり！」
「ひゃっ⁉？つ、冷たいよ⁉？」
「そりゃ、冷水ですから」
少し着崩れしているパジャマの背中にできていた空間に冷水をぶち込んでやった。
手は突っ込んでないよ。流石にそれをすると犯罪になる。
「うー、ひどいよ！」
「じゃあ早く着替えて。でないと由紀姉のぶんも俺が食べるよ？」
「わかった！わかったからたべないでよ！」
さっきまでの眠気は何処へやら。急に生き生きとしだした由紀姉を放っておき、俺は生徒会室という名の部室へ向かう。

「どうもー、おはようございます」
「おう、おはよー」「おはよう。レイ君。また由紀ちゃん？」
「はい、りーさん。ご明察通り。今日はご飯を持って来いとか言ってきたので冷水を背中からぶち込んでやりました」
「ほ、ほどほどにね…」
生徒会室という名の学園生活部の部室に来ると、そこには部長である若狭悠里（わかさゆうり）さん。こげ茶の髪をストレートに伸ばしていて左耳の周りだけ髪留めで止めていて左耳が露出している。今はつけていないがよく学校の制服の上からカーディガンをよく着ている。
あと胸がとても大き……いえ、何でもありません。
そしてもう1人が何故かシャベルを愛用している恵飛須沢（えびすざわ）くるみさん。濃紺の髪を赤いリボンでツインテールにしている。膝当てとか指だけでてる手袋とか付けてて、運動系の部活のような格好をしてる。あとは八重歯が特徴かな。
2人とも俺の先輩。だけど、先輩は堅苦しいから付けなくていいとのお達しを受けて、悠里先輩はりーさん。くるみ先輩は、くるみさんと呼ばせてもらってる。
あ、ちなみに俺こと丈槍零はというと、黒の髪で耳のあたりまで伸ばしてます。はい、説明終わり。
主人公で、もっと特徴があるならもっと説明できたが、いかんせん俺は普通の、どこにでもいるようなやつだ。説明しろと言われても何もできません。
あ、一つだけあった。
佐倉慈さんこと、めぐねえが好きです。
先生としてじゃなく、異性として。
このことは多分由紀姉とめぐねえ以外のみんなに知られてる。
めぐねえには誰でもわかるようなアプローチを一度仕掛けたと思ってるんだけど……本人の天然故か『先生として頼ってもらえてる！』って変換されているみたいです。かなしい。
「あれ？めぐねえはどうしたんですか？」
「もう少しでくると思うわ。あ、ご飯出来てるから食べておいてね」

「はい。…今日は乾パンですか。いや美味しいからいいんですが…。ていうか、これは出来てるとは言わないのでは……」
りーさんに言われて、机の上に出されてる乾パンの入っている箱から適当にとって食べる。
「おはよー」
「「おはよう」」
「あら、みんな揃ったわね」
乾パンをかじりながら読みかけの小説を読んでると、由紀姉が入ってきた。
それと同時にめぐねえも入ってきた。
「それじゃあ、今日は……」
「由紀ちゃんは授業ですね。私やくるみ、零君はどこかのお手伝いに行きましょうか」
「めぐねえ、由紀姉を頼むから躾けてください。もうそろそろ俺だとどうにもなりませぬ」
「し、躾けって……」
そんな下らない話で笑いあって、由紀姉がものすごい勢いで朝ごはんを平らげたあと、めぐねえが引率で教室へ連れて行った。
「…ほんっとに、由紀姉はいつも楽しそうですね。羨ましい」
「そうねえ。元気なのはいいことよ」
「あたしからすりゃ、レイもなかなかだけどなぁ。毎回何かあってもめぐねえ見て瞬時に回復してテンションが明らかに上がってるし。はやくめぐねえに告っちまえよ。でないと取り返しのつかないことになるかもしれないんだぜ？」
「…ああ、そういえば、くるみさんも似たようなことを経験してたんでしたっけ？…あ！す、すいません。軽率でした…」
「い、いやいいよ。気にしてないから」
くるみさんの言葉に何気なく返したが、数瞬後に地雷を踏み抜いたことに気づいて慌てて謝る。気にしてない、とは言われたが、完全にやせ我慢で、少し苦い顔になっていた。
「…今日の朝の見回りは俺が行きます」

「えっ⁉？いや、いいよ。今日はあたしの番だ」
「いいですから、えーと……あったあった」
くるみさんの制止を聞き流して折りたたみ式のナイフと少し厚いタオルを手に取り、タオルを左腕にグルグル巻きにする。
「今のくるみさんだと万が一がありますから。そんで、その状況にしたのは俺です。なら、俺が行くべきだと思います」
「いや、それでもな……」
「わかったわ。じゃあ、お願いするわね」
「ちょっ、りーさん⁉？」
「はい、できる限り生活圏を広げれるように頑張ります」
「それはしなくていいのだけれど……いい？何が何でも、無事で戻ってくること」
「もちろん。めぐねえに何も伝えれてないまま終わる気はありません」
そのあとは、何度もりーさんに頑張りすぎないように念を押され、廊下に出る。

「……よし、行くか」

今日も、あいつらの相手だ。

「りーさん。あたしは大丈夫だってのに」
「レイ君も言ってたでしょ。万が一があるもの。万全にしておくに越したことはないわ」
「そうだけどさ…」
「それに、あのレイ君よ？もしかしたら地下から物資も持って帰ってきてくれるかもしれないわ。ここ最近、物資も心もとなくなってきそうだから」
レイ君は、この惨劇が始まって、気が滅入っていた頃に、くるみと由紀ちゃんを誘って少しでも気を紛らわそうと、『学園生活部』を作っ

て、しばらく経った頃に入部した。
　驚くことに、私たちが屋上と三階でなんとか頑張っていた頃に、彼は一人で緊急避難場所である地下と1階付近で生き残っていたらしい。
「でも…アイツのことは、よく分かんないんだよ。アレが起こった時に、屋上までは一緒だったのに、気づいたらめぐねえと消えててさ。それでめぐねえだけ戻ってきた。めぐねえは何か知っている風なんだけど、何も教えてはくれないしさ。あたしらの事を見捨てて逃げようとしてやられたのか、とも思ったけどあの雨の日に急に戻ってくるし」
「そうよねぇ。それで、戻ってきた時にはまるで別人のようになってたのよね」
「そうそう。めぐねえの周りにいたやつらをばっさばっさなぎ倒して」
　記憶が確かなら、レイ君の一人称は『僕』だったはずで、めぐねえに聞いた限りのレイ君の印象は『大人しく真面目』だった。
　あんな風に、活発ではなかった。
「でも、それは『昔』であって『今』じゃないわ。誰だって、この環境に放り込まれたら、性格が変わり得るもの。変わっていない私たちの方が変なのかもね」
「そうなのかなぁ…」
「そうなのよ」

「……異常無し」
　三階に上がる階段の所にある机とワイヤーなど、使えるものは何でも使った、と思えるバリケードを何度か揺らしたりして強度を確かめる。
「よっと」
　今度はそのバリケードを上り、向こう側に降りる。
　俺が地下と一階で過ごしていた時に使っていたバリケードで少し

ずつ2階を封鎖するように動かしてはいるが、いかんせん重い。
でも、2階を封鎖してその中にいる奴らを片付けてしまえば、この校舎の2～3階が自由に使える。
「うわ……。いた」
二階に降り立つと、少し教室の方向に10メートルくらい離れた場所に数多くいるあいつらの内の一人？がいた。
皮膚はどす黒く変色していて、所々腐ってる。
ホラー映画に出てくるゾンビだといえばわかりやすいだろうか。
格好から見るに、女子だったのだろう。
「…ここまで入り込んでる、ってことは、同じクラスの人？それともただの同級生？おれはC組なんだけど。それか、本当にただここまで入り込んじゃっただけ？」
「……」
「そう、同じクラスなんだ。てことは…丈槍零って覚えてるかな？」
「……」
ずさっ、ずさっと近づいてくる。
「覚えてくれてる？そう、ありがたいね」
あと2メートルほどで掴まれる距離まで来たところで少し離れる。
なんで会話が成立してるのか、不思議に思われるかもしれないけど、地下で過ごしてた頃に、ちょいとイザコザがありまして。
その頃から、こいつらの考えてることがなんとなくわかるようになった。
もちろん、時間が経ち過ぎてると、お腹減った、ぐらいしか分からないけど、なってまだ日が浅いと、こいつらには人間としての思考もまだ侵食されきってなくて、だいたい何を言おうとしてるかはわかる。
それでも飢餓感には勝てておらず、なった時期が浅かろうが関係なく殆どのやつが生きた人間を見ると襲ってくる。
「逃げないで、って。君、おれを食おうとしてるでしょ？後は、君を殺しにくいからかな？」
「……」

「え？違う？謝りたい？」
「……」
「俺へのイジメを見て見ぬ振りをしてたこと？はっは、今更謝られてもね。でも、その心だけは受け取っとくよ。それじゃあ…安らかに眠ってくれ」
相手が人でなくなったとはいえ、人だった頃の自我が残ってる相手は、相変わらずやりにくい。
心を、無にして、ヒトではなく、モノを見る気持ちで、走り出す。
それで後ろに回り込み、うなじに深々とナイフを突き立て、首の右半分を切り飛ばす。
ギリギリ繋がってはいたが、少し触れれば多分取れる。
元はヒトだったものを見ると、そのまま仰向けに倒れ込んだ。
ていうか倒れてくれないと困る。
「……」
「ありがとう、って……意味がわからないよ」
その死体（？）を持ち上げ、窓から外に放り投げる。
「よしっ、完了。そんじゃあ続きを行こうか」
二階から一階に降りて行き、階段を半分くらい降りたところで俺が持ってきていた鉄製のバリケード……とは言ってもただの分厚っい鉄の板なだけなんだけど。
あれだ、卓球するときとかによくみる布製の、球が他のとこ行かないようにするやつ。あれを大きく、分厚く、鉄製にしたものだと思えばいい。板とは言っても、ちゃんと立てかける。
それを二枚使って縦に積んでる。
バリケードとしては申し分ないのだが、まあ重い。これを一段ずつ。余裕があれば2～3段ほど上げている。
てか褒めてよ。これを地下から頑張って引っ張り上げてきたんだよ？
あ、めぐねえに褒めてもらいたい。ハグとかしてほしい。
他には……

「っと、バリケードはこんなもんか。あとは二階にまだいないか確認して、余裕があれば地下にまた行こうか」

なんか随分と話したのに大幅にスルーされてる気がしてならないがまあ気のせいだろう。

そんなことを考えつつ、二階を適当に見回る。

教室や、売店。図書館など、念のため隅々まで見て回る。

一週間くらい前に、くるみさんと出来る限り一掃しておいたため、ほとんどいなかった。

が、教室…正確には、俺が所属していたクラスの教室で、変なものを見つけてしまった。

ここは使っていないはずなんだけど、なぜか机が一つだけ立っていた。

位置的に、俺の席だった場所。

「…？前見たときは倒れてたよな？」

記憶を振り返ったけど、うん。間違っても立っていた机はなかった。

この時に、スルーしておけばよかったんだ。

好奇心が勝って、見に行くなんてことをせずに、地下に水なりなんなりと物資を取りに行けばよかったと。

俺は後悔した。

1話　また由紀姉が変なことを言いだしそうです。

「……あー、見るんじゃ、なかった……。ふっざけんなよ。今更……遅いんだよ……」

1階で、ひたすら、向かってくるヤツラに、どこに向ければいいのかわからなくなった怒りなどをぶつけていた。

「っ、オマエらも、俺を、僕を……見るな、見るな見るな見るなっ！なんで…なんでっ、今になって、オマエらは！僕を……人間だと認識する…っ！」

気づくと、外からも集まってきており、かなりの数がいた。

流石にこの量を殺しきるのは無理だ。

「っ……お腹減った？ああ、僕もだ。いつも…いつもいつも、飢餓感が僕の、俺の中から消えない。唯一、地下で味方をしてくれた、あの人に、裏切られて、そのせいで、俺は…僕は……」

すると、いつのまにか壁際に追い詰められかけていたので、窓の部分を伝いながら壁を移動して強行突破をする。

窓の外にもいたからこれが最善だと思った。

「っ⁉？」

けど、あと1人抜ければいいという時に、恥ずかしいことに床に散らばっていた血で足を滑らせた。

「……あー、もう、踏んだり蹴ったり…だっ！」

その場で回転して、足払いをかまして、目の前にいたヤツを転ばせ、その隙になんとか体勢を立て直す。

「……っ、相変わらず集まりすぎだろ……」

この近くで生存者は僕1人なだけだからなのか、それとも僕が引きつけやすい体質なのか。

「ふー……いやいや、何弱気になってんだ。まだ、めぐねえに何も伝えれてないだろうがっ！」

だから、どうした。多勢に無勢？逃げ場はほぼなし？

なら、血路を開けばいい。無理矢理、殺して殺して殺して殺して。
ひたすら、殺していけばいい。傷を負ったのなら、また地下に行けばいい。
「ふーっ、気を引きしめろ。ここで死ぬ訳にはいかない。絶対に」

〜屋上〜
「…今日、なんだか騒がしいな」
「そうねえ。もしかして……レイ君に何かあったのかしら…？」
「いやいや、まさか。そんなことある訳が……」
くるみと一緒に屋上の農園で作業をしていると、何やら外が騒がしいことに気づいた。
正確には、騒がしいと言うよりは、アイツらの動きが活発なだけなのだけれど。
「…ちょっと、嫌な予感がするから、2階の方を見てくるよ。レイがいたら速攻連れて帰ってくる」
「いいけど、お願いだから無理をしないでね？」
「わかってるって」

ガチャっ

「⁉？」
「レイ⁉？どしたんだお前⁉？」
「お、落ち着いて…ください。そんな揺らさないで……」
「じゃあこの血まみれ状態はなんだよ！」
「血溜まりに足を取られてずっこけました。なんなら、服脱ぎましょうか？噛まれてないのを証明できますし」
「えっ、ちょ！ばか！や、やめい！」
「レイ君、大丈夫よ。噛まれてないのでしょう？ならここで脱ぐ必要はないわ。どっちかというとシャワールームで脱いで欲しいわね」
真顔で言いながら脱ぎ始めるレイ君を前に赤面していたくるみが

可愛かったけど流石に止めないとまずいと思い、レイ君を止めに入った。
「……はい。ひとまず、帰ってきたことを報告するのが先かと思ったので。……僕、少しだけ頭冷やしてきます」
「…？え、ええ」
　と、レイ君はものすごく疲れ果てた目をしながら階段を降りて行った。
　…僕？
「……ねえ、くるみ。めぐねえを呼びに行きましょう」
「え？お、おう。でも、なんで？」
「…レイ君が疲れてる時は…ね？それに、私達も行くわよ。レイ君のところに。何せ、学園生活部ですもの。私達」
「ああ…なるほど」
　と、私はくるみと一緒にめぐねえがいる場所へ向かった。

「佐倉先生、今お時間いいですか？」
「ゆうりさん？ええ、大丈夫よ」
「失礼します」「失礼しまーす」
　めぐねえがいる部屋まで来た。
　教室に入ると、由紀ちゃんもいた。どうやら授業を受けていたらしい。
「どうしたの？何かあった？」
「実はですね、レイ君のことでちょっと……」
「…わかりました。すぐ行きます。由紀ちゃんたちはここで待って…」
「え？なになに？レー君に何かあったの？」
　と、話が聞こえたのか由紀ちゃんも話に入ってきた。
「ええ、ちょっとね…レイ君、元気がないみたいなの。だから私達で元気づけてあげようって思ってめぐねえに相談しにきたの」
「そっか…。何か辛いことがあったのかな…？」

「ひとまず、確認するためにも様子を見に行くわ。レイ君はどこに行ったかわかる？」
「シャワー室だと思います」
「わかったわ。じゃあ皆んなはここで待ってて」
「私達も行くよ！ね、りーさん！」
「はい、ゆきちゃんの言う通りです」
「ま、レイに負担かけちまってるの、主に由紀だもんなー」
「くるみちゃんひどいっ⁉？」
「くすっ…じゃあ、みんなでレイ君をお迎えに行きましょうか」
「「はいっ！」」

～シャワー室～
「うえっ…まだ血が出てくる……どんだけ転んだ時についたんだ……」
血がべっとりとついてしまった夏服を洗濯機にぶっこんだあと僕はシャワー室でずっと血を洗い流し続けた。
「……この咬み傷もなかなか塞がらないね」
左足首を見ると、まだ治っていない咬み傷が。
アイツらに付けられた傷が残っていた。
「屋上でヤケクソになりすぎて脱ぎかけたのは本当にまずかった…。今思うと本気でやばかった……」
それもこれも、あの机が全部悪い。
あれが全部悪い。
「…ふー、もうこの生活も…疲れたな…」
僕ら以外に生存者がいるとも限らない。助けが来るかもわからない。
僕が過ごしてた地下の食料はほとんど手をつけていないから、5人ならば節約さえすれば半年くらいは普通に持つだろうが、その半年間で助けが来るかどうかすらわからない。

「…はーっ、弱気になるなんて、俺らしくねえ。早く立ち直ろう。めぐねえ達も心配するだろうし…」

「レイ君、まだ入ってる？」

「⁉？め、めぐねえ⁉？ま、まだ入ってるよ⁉？」

「そ、そう。わかったわ。シャワー浴び終わったら部室に来てもらえないかしら？少しお話があるのだけれど……」

「う、うん。すぐ行くよ」

びびったぁぁぁぁ⁉？⁉？めぐねえの名前だしたら、いきなりめぐねえの声するからびびったぁぁぁ！

妄想癖そんなに激しくなったか？とか思った！

「っと、こうしちゃいられないね。さっさと血を洗い流してめぐねえのとこに行こう」

～部室（生徒会室）～

「めぐねえ？話って？……あり？なんで皆まで集まってるんですか？……由紀姉も」

「むー、それだと私はいっつも集まらない人みたいじゃん」

「事実でしょ？少なくとも、こんな神妙な場に由紀姉いるの見たことないです」

「むー…」

めぐねえには及ばないがふくれっ面の由紀姉も中々可愛いものだった。なんというか、小動物みたいだった。

犬、的な？

「りーさんやくるみさんも、まるで何かあったみたいな顔ですね」

「…はぁ、おまえなぁ。自分の行動を振り返ってみろよ」

「…？」

うーん…？くるみさんにはそう言われたけど、血まみれで屋上に上がったくらいしか記憶にない。
あ、コレか。
「レイ君、今日は恵飛須沢さんに代わって見回りをしてくれたって聞きました」
「ええ、俺が故意的でないとはいえ、くるみさんを傷つけたので、その罪滅ぼしにでも、と代わりました」
「それで、見回りから帰ってきた時に、貴方の様子がおかしいと聞きました。見回りの時に何かあったの？」
「……いえ、何も」
「本当に？」
「はい」
「なら、なんで…そんな辛そうな顔をしてるの？」
「…つらくなんか、ないです」
めぐねえに聞かれるけど、話したところで余計に迷惑をかけるだけだし、俺は何もない風を装った。
「嘘だよ！だってレー君。確かに疲れているんだろうけど、いつもとは違った疲れた顔してるもん！」
「……？由紀姉、どゆこと？」
「うぇえ？んーとね…何というか。いつも疲れた顔してる時は、ただ遊び疲れたー！って感じなんだけど、今日のは、何というか……うーん、何だろう。好きな人をかけた勝負に負けた時！みたいな？自分に怒ってる、というか？ぅーー、何だか分からなくなってきた…」
ああ、うん。いつも通りの由紀姉だったわ。
自分で自分の首を絞めに行って、挙げ句の果てにショートしてる。
「…そんなことはないです。俺は、何にもないです。ていうか、由紀姉には関係ないでしょ」
何気なく発した言葉が、発した直後に、とんでもないことを言ったことに、気づいた。
明らかに、空気が悪くなったし、由紀姉からも悲しげな声が聞こえた。

「…すいません。今日はもう疲れたんで早めに寝ます」
「あっ、待ってレイ君！」
めぐねえ達に制止されるが、それを振り切って寝室と言う名の社会科準備室に向かった。

「…私、先生失格ね」
レイ君が出て行った扉を見ながら、そんなことをポツリと零した。
「そんなことないよ！あれはレー君が悪いもん！」
「ええ、そうですよ。そんなに気を病まないでください。ていうか由紀ちゃん？涙ぐみながら私の胸に抱きつかないで欲しいのだけれど……まあ。今日はいいわ」
「しっかし、めぐねえ相手でもダメだったか」
そうすると、私の零した言葉を聞き取ったのか3人から励まされた。
つくづく、私は生徒に恵まれていることを実感した。
「それにしても、本当に何があったんだろう？レー君ってっつも、悩み事ない！みたいな感じなのに」
「由紀に言われちゃおしまいだな。つか、悩み事の一つには絶対由紀がいるだろ」
「くるみちゃんヒドイ⁉？」
「こらこら、くるみも由紀ちゃんも。その辺で。今はレイ君のことを考えましょう」
何故だろう。3人のやりとりを見ていると、不思議と笑みがこぼれてくる。
先ほどまでの、暗い感情が、無くなっていた。
それと同時に、レイ君（あの子）も、友達に恵まれているんだ、と思……っ。
「もしかして……。由紀ちゃん、寝室に行くのは少しだけ遅めでお願いしてもいいかしら？」
「ふぇ？う、うん。どうしたの？」
「ちょっと、ね…。もう一回レイ君とお話をしてくるわ。今度は、先生

としてじゃなく、保護者として」
不意に、レイ君が、何気なく零した言葉を思い出してしまった。
（何となくだけど、アイツらを見過ぎだからか、考えてることが何となくわかる気がするんです）

～社会科準備室～
レイ君は、いつからかは分からないけど、虐められていた。
私は、恥ずかしいことに、それを目撃するまで気づかなかった。
あの子の保護者だったと言うのに。
保護者失格だと、謝った。けど、レイ君は自分が悪い、と言い張って聞かなかった。私は悪くない、とずっと言い続けてくれた。

きっと、今日は、その言葉に甘えていた分のツケだ。

私は、レイ君がいるはずの教室の扉の前に立ち、２．３回ノックする。
「レイ君、ちょっといいかしら？」
「…？めぐ、ねえ？う、うん。いいよ…」
「ありがとう」
そう行って、入るとジャージ姿のレイ君がいた。
「ど、どうしたの？俺、もう寝るつもりだったんだけど」
「ええ。わかってるわよ。それでね…ちょっとこっちに来てもらえないかしら？」
「…？う、うん」
布団の、ちょうど枕のところに正座して座り、来るように言うと、レイ君は不思議に思いながらも来てくれた。
「はい、レイ君。どうぞ」
「??ど、どうぞって？」
「膝枕よ」

「ああ、なるほど。膝枕……って、ええ⁉?」
と、いい具合にレイ君が驚いてくれる。
恥ずかしかったけれど、こんな表情が観れたから、よかった、と少し思ってしまった。
「ほら、早く」
「いやいやいやいや、めぐねえ?何を唐突に?いや、そりゃまぁ、嬉ゴニョゴニョ…けどさ」
「いいから、はやくしなさいっ」
少し急かす口調で言うと、顔を更に真っ赤にしながらレイ君は私の膝の上に頭を乗せ、横になった。

「(や、やっぱり恥ずかしい……)」
そして、2人の思考が重なった瞬間であった。

「め、めぐねえ。本当にどしたの」
「へっ⁉?え、えーとね…その。ご褒美かな?」
「…?俺、何かしたかな?りーさんとかがやって貰ってたならわかるけど」
「ううん。レイ君もすっごく頑張ってくれてるよ。私、知ってるんだから」
「……俺は、まだまだですよ。めぐねえ　や、りーさん、くるみさんなんかに比べたら…」
「そんなこと…ないよ。私、いっつも、みんなから元気をもらってるもの。もちろん、レイ君からも」
「……」
「だからこそ私は、辛くなっているレイ君をね、放っておけない。それはみんなも同じ気持ちなの。だから、何か辛いことがあったなら、私たちに相談して欲しいの」
「…謝られたんだ」

「え？」
「きょ、今日…見回りを、してたら…同じクラスの人だったヤツがいて、そ、そいつは噛まれてまだ日にちが経ってなかったのか、考えてることもまだ、はっきりわかって……、それで、ぼ、僕を見つけて、食べたい、って言う欲求があったくせに、『虐めを見て見ぬ振りしてごめん』、なんて謝って来て……そ、その後に二階の教室を見て回ってたら……明らかに、俺の机があった場所に、不自然に机がそこだけに立ってて……好奇心で見たら…すごい、乱雑で、赤くて読みづらい字だったけど…何回も、何回も、ごめんなさいって書き連ねてて…。そ、それで…今更、僕を人として扱って来るな、って思いと、今更遅いよ…ってのと、もうよくわかんない感情がごちゃ混ぜになって……」
「うん…」
「そ、それで…なんで助けてくれなかったんだ、って思いもあって、でも、それ以上に、『今更人扱いなんてやめてくれ！』って思いが…たまって、もう、何が何だか分からなくなって…無性にイラついて……」
「うん」
「ごめんなさい…ごめんなさい…。あんな風に当たるつもりは…なかったんです…。ごめんなさい…ごめんなさい…」
「大丈夫よ。みんな分かってるわ」
　気づくと、レイ君は泣きながら謝っていた。
　堰き止めていた何かが溢れて来たんだろうか。
　レイ君になんども、大丈夫、と言葉をかけ、頭を撫でていると、いつのまにかレイ君は寝ていた。
「…本当は、謝るのは私の方なのにね」

～翌日～

ジリリリリリリ

「……ああ、いつの間にか寝たのか……」
目覚ましの音と同時に目を覚まし、そして昨日の夜の記憶もあらかた全部思い出した。
「っあああああ／／／／／／／」
そして丈槍零は顔を真っ赤にして悶絶をした。
「んー…レー君。どしたの…」
「由紀姉…ああ、いや…なんでも、ない…」
「むー、本当？」
「イエスアイドゥー」
寝ぼけた由紀姉に色々聞かれたが、昨日よりかは大丈夫だった。
つか由紀姉よ。そんなにスッと起きれるならいつも起きてくださいよ。
「ちょっと、りーさん達に言わないといけないことがあるんで、先に行きますね」
「うん～」
「ああ、それと…由紀姉」
「ほえ？どうしたの？」
「…その、昨日は…ごめん。由紀姉に関係ない、なんて言って」
「…うん、大丈夫だよ。私は平気。レー君が元気になってよかったよ」
「ああ、それと……俺は由紀姉の『弟』だから、今後何かあったらガンガン頼らせてもらうんで。昨日のことはそれで…」
「ほんとっ⁉？ねえ！もっかいいって！」
「あーあー、何も聞こえません。それでは、お先に部室に行ってきますね」
「はーいっ！」
おやつを与えられた子犬みたいにはしゃぎまくった由紀姉を放っておいて、部屋を出た。

～部室～
「おはよーございます」
「おはよー」
「おはよう。レイ君」
　部室に行くと、予想通りくるみさんと、りーさんがいた。
「レイ君、もう具合は大丈夫？」
「はい、心配をかけてすいません。…ほんとに。ちゃんと、由紀姉にも昨日のことは謝ってきました」
「そう…よかったわ」
「それで、昨日のことについてなんですけど、ちょっとゴチャゴチャしすぎて話しづらいので、二階までついてきてもらえませんか？」
「…？ええ、わかったわ」
「おう。…一応持って行っておくか」
「ですね、俺も念のため持っていきます」
　と、くるみさんがシャベルを、俺が昨日使ってたナイフを手に取り、りーさん含めた3人でバリケードの外へ向かった。

「え？由紀ちゃん。なんて？」
「だ！か！ら！肝試し！」
「や、やるのは構わないけれど…なんでまた？」
「えーとね、レー君、昨日よりかは元気になってたけど、まだ治ってない気がしたから、元気付けてあげたいなーって」
「そう…由紀ちゃんは偉いわね」
「えへへ～。めぐねえも、凄いよねえ。昨日あんなに落ち込んでたレー君を1日であんなに元気にしちゃうんだから」
「もう…めぐねえ、じゃなくて佐倉先生、でしょ？」
「はーい！」

2話　学園生活部によるレッツ肝試し！

あれから、昨日の不祥事を説明するべく、くるみさんとりーさんと共に2階の例のアレがある場所まで来た。
アイツラを警戒してはいたけど、まったくいなかった。
「…あれです。くるみさん、りーさん」
「あれって…机？」
「だよな…見た感じはそんな…」
「まあ、ひとまず中に入ってちゃんと見てもらったほうがいいですね。……説明はそのあとに、ちゃんとします。あ、ガラス片とか、気を付けてくださいね」
安全に気を付けながら中に入り、俺の机だったものを、間近で見てもらった。
「こ、これって…」
「……」
「…なんとなく察せましたか？めぐねえからは、俺のこと昔の事は教えてもらっていると聞いています。でも、たぶんそれだけだと思いますので、めぐねえが話さなかった部分も踏まえて、話します。ああ、でもただ話すだけだと時間がもったいないので、いつもの見回り時の日課をしながら、でかまいませんか？」
「あ、ああ」
「ええ、大丈夫よ」

～階段～
「よっと…」
「…ねえ、レイ君。あなた、いつもこれをしてたの？」
「ええ、そうですよ。でも一気にやってしまうと音でアイツラを多く引き付けてしまうので、基本は一段ずつ、ですけどね」
いま、レイ君はかなり大きい鉄の板を動かしていた。
しかも二枚。一枚だけでもかなり重いはずなのに、これを動かして

いたらしい。
「けど、今日はくるみさんもいるんで少し強気に行きます。もう5段ほどで二階から降りる階段の入り口まで持ってこれるんで、今日は一気に2段分行きます。
…えーと、どこから話せばいいんですかね。二人とも、俺の身の上の話はめぐねえから聞いてるんですよね？」
「ええ」「あたしは養子縁組くらいしか聞いてねえ。すまん」
「いえ、いいですよ。
……俺、両親が共に事故死して、そのあとに親戚だったためぐねえの家に引き取られたんです。確か……俺が小学6年生くらいの頃だったかな…。ちなみに、今めぐねえ25歳で俺が17なんで…ちょうど大学生のころにめぐねえと会いました。それで、めぐねえは既に下宿していたんで、そこに転がり込んだ、って感じですかね。なぜか俺、めぐねえの家族みんなに毛嫌いされてたもので。……あれ、そういえば小学校でも学校の教頭先生とか校長先生とか、クラスの皆も俺のこと……。まあいいや。それで、中学からめぐねえと一緒に住んでたんですよ。……ただ、俺、人付き合いとか苦手でして、隅っこでおとなしく本とか読むのが好きだったんです。だから、クラスの輪に溶け込めなかったんです。そういう子ってどうなるか、想像つきますよね？」
「…いじめね」
悲しい顔で言うレイ君に、酷なのかもしれないが、私は感じたままに言った。
「正解です。無視から始まり、靴は隠され、……すいません、ちょっとこれ以上は。…ふー。それで、いじめがあったとはいえ、別に複数人ならいいですよ。それが個人から複数人になり、十人単位になり、クラス単位になり、果ては先生まで。先生がグルなもんだから、親に相談しても、学校側で巧みに隠すもんだから、どうしょうもなくて、不登校になったんですよ。それで中学は、知ってる人は誰もいないところをって、佐倉さんが親戚で通って他地域とは少し離れたところだっていうんで、そっちにお世話になろうって話し合ってた矢先ですよ。親が事故で死んだって連絡がきたのは。……そのあとは、さっき言っ

たとおりです。めぐねえの家で養ってもらいながら、中学はこの近くの私立に通っていました。迷惑をできる限りかけたくなくて、バイトも始めて、家事も頑張って覚えて、めぐねえの役に立ちたかった。学校も、めぐねえの期待に応えるべく頑張ろうと思いました。……でも、二度あることは三度ある、っていうじゃないですか。中学でも、かわらず、いじめは、起きたんです。けど、めぐねえに心配をかけたくない。不安にさせたくない。その一心で隠し通しましたよ。三年間、ずっとずっと孤独に耐え続けました。三年経って、高校に行けば…めぐねえの元に行けば、この苦しみからも、解放されると思いました。

……

けど、現実はそう甘くはないんですよね。

高校(ここ)でも、同じでしたよ。学校が始まって2か月くらいだったでしょうか。一気に孤立して、気づいたらいじめの標的でしたよ。自分以外の、大切な人になるべく苦しみを背負ってほしくない、その一心で隠し通そうと……懸命に頑張ったんですけどね。

同じ学校にいるんですよ。そりゃいつかバレますよ。

いじめの現場をめぐねえに見られて、家に帰ってから、ずっと謝られ続けましたよ。

めぐねえは、何も悪くないのに。俺が悪いのに。泣きながら、教師失格だって、ずっと夢だった教師を辞めるって言いだして。

…すっげえ、いやでしたよ。俺のせいで、大好きな人が夢を捨てるっていうのが。自分に怒りがわきましたよ。

そのあとは…めぐねえが頑張ってくれて、保健室登校?だったかな、それで何とか出席日数とか確保でいるよう掛け合ってくれて、それから送迎もめぐねえにしてもらって、補習も、忙しいのに組んでもらって。

…そんな中です。【あの事件】が起こったのは。

由紀姉とはあの日に会いました。補習を受けてた由紀姉の所に、めぐねえがいたので、そこへ向かって、補習が終わるまで隅っこでじっとしてました。けど由紀姉にいじられ、そして由紀姉がさぼるために屋上に行きたいって言いだして強引に連れてかれて、りーさん達と

会って……。そのあとに……。
たぶん、ここから後は、みなさんはわかると思います。だって一緒にいたんですからね。
多分、この後に俺がどうやって生き延びていたか、とかも聞きたいんだと思いますが、今はその説明は省きます。めぐねえにも話さないといけないことですし、またみなさんが集まっている時に話します」
「ええ、分かったわ」
「おう。けど、その時は包み隠さず、で頼むな」
「もちろんです。……俺、ちょっと色々あって、地下に逃げてたんですよ。クラスメイト数人と一緒に。数日は……ええ、数日はシェルター並みの地下施設の中だったんで安全で、過ごせましたよ。
でも…！俺は、裏切られた！ずっと、いじめが起こっても、味方をしてくれた人にすら！
…詳細は省きますが、俺はクラスメイトだった人達が安全に帰るための囮として、アイツラがたくさんいるほうに、だまされて、連れていかれたんです。
それで、クラスメイトだった人たちはなんて言ったと思います？『お前を同じ人間だなんて思ったことは一度もない。お前なんかに食料を渡すのがもったいない。でも、生きているのならせめて人間（おれたち）の役に立ってから死んでくれ』
って、言い放たれましたよ。
そこからは、もう自分の生に、何も、何も、感じることができなくなって。でも、めぐねえに会いたい一心でここまで来て。それからも、ヒト為らざるモノとして、皆さんの、学園生活部の役に立とうと頑張りました。
……でも、そうですね。心のどこかでは、まだ人と扱われたい、人だと思い込みたいという思いがこびりついていたんでしょうね。
だからこそ、アイツラに成り果てたクラスメイトによる懺悔の言葉を連なっていた俺の机を見た俺は、どうしょうもなく、混乱したんだと思います。むしゃくしゃして、わざわざ一階まで下りて、八つ当たりをして。

そして、気づいたら馬鹿みたいに集まってたんで急いで、かつ上に集めないように立ち回りながら屋上まで逃げ帰りました。三階でいいのに屋上まで行ったのも、何も考えていないのか、思考停止していたからでしょうか。

……これで、答えにはなりましたか？」

「ええ、ありがとう。レイ君。そして…ごめんなさい。辛いのに、話させてしまって」

「なんか…聞いちゃいけない話を聞いた気分だぜ…」

「いえ、元はといえば俺が何も説明をしていないのが悪いんです。……そろそろ部室へ帰りましょうか。流石にこれ以上ここで話していると近くを通ったアイツラに気づかれる可能性も高くなります」

レイ君のその言葉を区切りに、私たちは部室へ帰ることになった。

また、嘘をついた。

どうしようもない罪悪感に、心がひどく痛むが、これくらいは何ともない。

生き残るために、俺の事情なんて、イラナイ。

自分と他人を騙すのには、もう慣れた。

～部室（生徒会室）～

「あ！きたきた！ほらほら、みんな座って座って！」

「「？」」

「学園生活部、ちゅうもーーく！」

俺たちが二階から戻ると由紀姉がやたらと興奮した様子で椅子の上に立った。

危ないよ、ソレ。

あと…こっち座ってるモンでさ、あの、見えちゃいけないもの見えかけてる…。

「レーくん、なんで顔逸らすの？」

「い、いや…なんでも」
「むー…。まあいいや！みんな、肝試し、やるよ！」
「「肝…試し？」」
俺もりーさんも、くるみさんも皆かポカーンとなっていた。
「夏休みじゃん？なら肝試し！だよ！夜の学校でハラハラドキドキだよ！」
「いきなりなにを言い出すかと思えば…」
「…いいんじゃないすか、どーせ物資足りなくなってきてるんでしょ」
「そうと決まったら準備ね、由紀ちゃんはめぐねえに伝えくれる？」
「むっふっふー。実は！もうめぐねえに許可もらったよ！」
「…由紀姉、自分が遊ぶことになると途端に準備いいね…」
「そ、ソンナコトナイヨー」
由紀姉、目をそらしながら言っても無駄だよ。言葉で全部丸わかり。

それから、夜になり俺たちはバリケードの先にみんなで出ていた。
「それじゃあ早速！肝試ししゅっぱーつ！」
由紀姉は、暗い廊下を、まあ元気にスキップでもしそうな足取りで進んでいく。
「……」
「大丈夫ですよ、くるみさん。今日行くところの周辺は昼過ぎに下見も兼ねて行ってますし、その時にいたアイツラはあらかた片付けておきました。余程のことがない限りは大丈夫ですよ」
「そういえば、地下の物資までは流石に難しいかしら？」
「先に消費するなら購買部のほうがいいと思います。地下の物資って、馬鹿でかい冷蔵庫みたいなのに入ってるんで、停電とか起きない限りは、しばらく大丈夫です。ただ、万が一のこともあるんで、早めに行っておきたいところではありますね」
「そう……」

「ねえ！みんな……！」

色々話し合ってるなか、先に行っていた由紀姉が遠くからこっちを見て叫んでいた。

「これはもしや、私だけ一人でみんな帰っちゃうパティーンですか!?（泣）」

「「違う違う」」

「きっもだーめし！きっもだーめし！」

「やっぱり夜は少ねえな」

「そうね、今頃みんな家に帰ってるのかも」

「…生前の記憶、なんでしょうね。…にしても、由紀姉、肝試しなんだから、少しくらい緊張感持とうよ」

「えー、レー君もしかしてオバケ苦手？ぷぷぷ……（笑）」

「（本当に置いてけぼりにしようか）」

そんな感じで由紀姉に煽られつつ、廊下の掲示板前までくると、そこには……

「はーい、みんな揃ったわね」

「あー！めぐねえ！」

「こらこら、肝試しなんだから、静かにしなきゃダメでしょ？」

「はぁーい」

「なんだ、めぐねえも来てたんだ」

「めぐねえ、お疲れ様です」

「めぐねえ、お疲れ様」

天使（めぐねえ）がいた。

「肝試しもいいけど、無茶しないでね」

「めぐねえ、もっと静かに！」

「はいはい（汗）。で、組み分けはどうするの？」

「せ、せっかくだからみんなで行かない？」

「あれ？由紀姉もしかして怖いの？」
「ち、違うよ！でも、万が一ってのがあるじゃん！」
「ふふ、そうね。みんなで行きましょうか」
「わーい！」
「じゃあ、五人一緒に行くわよ。逸れないようにね。それじゃあ「それじゃあ説明するわね」はうっ⁉？」
　と、めぐねえが説明しようとしていた所を、りーさんがまさかの被せて来た。
「今回肝試しするのは購買部と図書室！何か証拠の品をとってくるのよ。万が一逸れたら絶対に声を出さずにここまで戻ってくる！」
「「はーい」」
「じゃ、みんな「それじゃあ行きましょう」……」
　まさかの出発の号令すらりーさんに奪われていた。
　見るからに超落ち込んでる。可愛いけども。
「めぐねえ、はやくー」
「私……顧問……」
「ど、ドンマイです……」

3話　やっぱ肝試しは怖い

肝試しを始めた俺たちはまず購買部に来た。
うん、昼の下見の時に見たけどやっぱりこの購買部って色々ありすぎだと思うよ。
てか、枝切り鋏とかどこで使うっちゅーねん。
「ねーねー！なんでも買っていいの⁉？」
「ええ、ちゃんと部費から払うから大丈夫よ」
「わーい！」
由紀姉はりーさんに確認を取ると一目散に何処かへ行った。
「お菓子売り場…でしょうね」
「でしょうね」
「だろうなー」
りーさんの言葉に一同頷く。
分かり易すぎるよ、由紀姉は。
「それじゃあ、私たちは別の必要なものをそれぞれ取ってきましょうか」
「あ、俺はざっと見た限りなかったんで大丈夫です。…っと、めぐねえ。外の見張りは俺がやるから、めぐねえも何か必要なものあればとって来なよ」
「め、めぐねえじゃなくて、佐倉先生。で、でも…私は先生なんだし、生徒の君たちの方が……」
「うん、俺の必要なものは一通り見終わったよ。だから交代」
「え⁉？い、いや、さっき着いたばかり…」
「男子の買い物に対するズボラさを舐めちゃダメだよ、めぐねえ。男子の日用品の買い物なんて必要か必要じゃないか、それだけでスパッ！と終わりなんだから。それに男の俺より女性のめぐねえたちの方が必要なもの多いしちゃんと選びたいでしょ？」
「たしかにそうだけど…」
「ほら、俺に遠慮しなくていいから」
「…わかったわ。交代する。でもいい？絶対に何かあったら私たちを

呼ぶこと」
「はい、わかりました。めぐねえ」
「もう、めぐねえじゃなくて……」
と、玄関近くで待機していためぐねえと見張りを交代する。
「…っし、気合い入れろ。これで見逃してました、じゃすまないぞ…」

～しばらく経って～

特に…異常はなさそうだね。アイツラの気配も感じないし。
けど、油断はできない。
1匹ならまだしも、急に、大量に押し寄せてくる、なんてこともありえるかもしれないんだから。
だから…

「ねえっ！みんな！」
「っ⁉？由紀姉⁉？」
由紀姉の叫びによって全身の血の気が引いた。
「（まさか、見逃してた⁉？）」
扉を乱暴に開け、由紀姉の声がしたところまで一目散に走る。
お菓子売り場の方からしたはず…
無事でいてよ……。
「由紀姉！どうし…」
「どうした！」
「由紀ちゃん！」
「由紀ちゃん⁉？」
由紀姉のいる場所にたどり着くと、そこで何かを持ってしゃがんでいた。
と、そこに続々とみんながきた。
…ひっじょーにやな予感しかしない。これ。
「凄いよ！これ、２０倍に膨らむんだって！」

そう言いながら、由紀姉が見せてきたのは…

「・・・」

「ま、まさか、風船(それ)の為だけに呼んだのか…？」

「うん！そーだよ！ねえ、すごくない⁉？２倍じゃないよ、２０倍だよ！すごいねえ、科学の勝利だよ！」

うん、どっからどー見ても風船。

「肝試し中に脅かすなー！」

「ご、ごめん…」

すると、くるみさんが由紀姉に頭ぐりぐりし始めた。

うん、いいぞくるみさん、もっとやれ。

「って、レー君？なんだか顔が怖いよ？ど、どうしたの？」

「…由紀姉」

「はいっ⁉？」

「そこ、座って…」

俺がそういうと、由紀姉はおどおどしながらも正座した。

「てりゃ！」

「あぅ⁉？」

「よし、気は済んだ」

由紀姉の頭に全力でチョップを繰り出した俺は悪くない。悪くないったら悪くない。

「ひ、ひどいよ……めぐねえ！レー君ひどいよ！」

「今回は由紀ちゃんが悪いわね。ほら、みんなに驚かせちゃったこと謝りなさい」

「うぅ…ごめんなさい」

「私じゃなくて、みんなに、でしょ？」

「はーい…。みんな、ごめんなさい」

「たっく、次からはやめろよなー」

「次からは気をつけてね」

「今回は俺が由紀姉の馬鹿さ加減を忘れてたのも原因ですしね…」

「レー君だけ酷くない⁉？」

三者三様の答えを由紀姉に送ったのち、またしばらく購買部探索を開始していた。
俺はまた入り口付近に戻って警戒に当たった。
「…さっきのでいくらか近づいてきてる……って思ったけど、そうでもなさそうだね」
うん、静かな夜のままだ。
周りにある血の跡やらガラスが割れた跡やらがなければ、めっちゃいい景色かついい具合に怖い肝試しスポットなんだろうけどね。
「これがあれば人形でもなんでも作れるよ」
「いや作り方が分から……って何食ってんだよお前は！あとめぐねえも！」
「みんな、買い物は済んだ？」
「「はぁーい」」
「じゃあ、外で待ってるレイ君とも合流して図書室へ向かいましょう」
…めぐねえが生徒と化してる件について。
ガラッ
「おまたせ、レイ君」
「はい、買い物は満足にできました？」
「レイ君のおかげでとってもね」
「それは良かったです」
りーさんに続くようにくるみさん、由紀姉、めぐねえと出てきた。
…めぐねえ、本当に生徒と化してる…。
ていうかさ、みんながうんまい棒なるものをずっと食べているのにはツッコミ入れるべきですか？ねえ。なんでみんな食べてるの⁉？
なんて言うのが正解ですか⁉？

～廊下～

「図書室……そうだなぁ、生物関連の参考書があれば欲しいかな……」
「私は数学の参考書があればいいのだけれど……」
「あたしは特にねーな」
「私は漫画ー」
「(うんまい棒…美味しい……)」
俺、りーさん、くるみさん、由紀姉、めぐねえの順である。
ていうか、みなさん、ずーーっとうんまい棒食ってますね。
大ブームか何かですか？
と、うんまい棒にツッコミを入れるべきか否か、それで悩みながら歩いていると、いつの間にか図書室の前に着いていた。

ガラッと扉を開け、中に入る。
「…そんじゃあ、今回はあたしがここに残るよ」
「そうねぇ…わかったわ。けど、無理はしないでね」
「わぁーってるよ」
「恵飛須沢さん、本当に無理しちゃダメよ？」
「わかってますよ、めぐねえ」
少し話し合い、入り口にはくるみさんが残ることとなった。
「くらいねー電気つけようか？」
「ダーメ、ここだと電気つけた時に外から目立っちゃうから」
「そっか！肝試しだもんね」
「そんじゃ。りーさん、めぐねえ行きましょう」
「そうね」「わかったわ」

まず真っ先に向かったのは参考書などが陳列している棚。
「オォ…あいかわらずの蔵書量。目当てのものあるかな……」
「教科書と問題集と……」
「あ、りーさん。その問題集結構使えますよ」
「これ？」

「はい」
「さっすがりーさんにレー君！勉強熱心だね」
　おっと、この人はこれが何のために必要とされているかわかっていないらしいね。
「いいえ。これは由紀ちゃんのよ」
「へっ？」
「この間数学わからないって言ってたでしょう？」
「あ、あうぅ…、わ、私も本を探してくる！」
　りーさんが言うと由紀姉はたじろいだ後に1人でどこかに走って行った。
「っ！まって由紀姉！1人で行ったら……」
「由紀ちゃん、まって！」
「由紀ちゃん！止まって！戻ってきて！」
　が、由紀姉は俺たちの叫び虚しく1人でどこかへ行った。
　それを追いかけようと走…
あ…ぁ……ぅ……
「…っ！マジかよ…」
　今、確実に、アイツラの声がした。
　くっそ、昼に下見をした時はいなかったのに…。
　確認漏れしていた？
　いや、入り込んできただけ？
「早く行かないと…」
「シッ、りーさん。近くにいます。できるだけ声も抑えて。懐中電灯も消してください。めぐねえも、近くに寄って」
「っ…わかったわ」「そ、それなら早く由紀ちゃんを…」
　そう言って2人を近くに寄せる。懐中電灯も消してもらったため、だいぶ暗いが月明かりのおかげでまだ見える。
「わかってます、2人は、できる限り早く、ですが静かにくるみさんの所へ一旦逃げてください。気配的に、一体しかいないはずです。なので…くるみさんなら大丈夫なはずです」
「レイ君はどうするの？」

「…由紀姉の元に行きます」
　それを言うと、小声とはいえ2人に止められた。当たり前だ。でもこれが一番確率としては高い。
「…2人は、くるみさんの元に戻ったら、入り口の扉を閉めて、アイツラを引きつけれるような何かをしてください。やり方は任せます。仕留め方も…。…時間がもったいないです。それじゃ、俺は行きます」
「まって、レイ君！お願い、1人で…」
　めぐねえの叫びを後ろに受けながら、俺は由紀姉が走って行った方向に駆けた。

「…あ！これ面白そう…」
「由紀姉！」
「あ、レー君。どうしたの？」
「…っ、よかった、無事で…」
　由紀姉が呑気に漫画を選んでいるのを見て思わず安堵の息を漏らしてしまう。
「？何か言った？」
「何でもないよ。それより由紀姉、ダメだろ1人で走って行っちゃ。りーさんもビックリしてたし、めぐねえなんか超オコだったよ」
「ヴッ…ごめんなさい」
「うん、わかってるならいいよ。ほら、俺も一緒に謝るから、みんなのところに戻ろ。あ、ちゃんと読みたい本もとった？」
「うん！…あれ？」
「どうし…っ⁉？」
　…しくった、後ろにいつの間にかきてた。
　しかも、由紀姉に見られた？
「お化け…？」
「喋っちゃダメ」
「んむっ⁉？」
　反射的に由紀姉の口を塞ぐ。

「(幸い…こっちには気づいてない…か?それならゆっくり逃げれば…。殺してもいいけど、そんなところ見せたくないし…)」
ゆっくり、ゆっくりと由紀姉の口を塞ぎつつ奥の方に移動をする。
「あ…ぁ……」
「(…こっちに近づいてきてんな。物音で反応したか)」
本棚の端っこまで辿り着いて、すぐに別の列のところに入り、ちょっと進んで由紀姉と一緒にその場にしゃがむ。
どんどん近づいてきてるな…。りーさん、めぐねえ、まだか…。もう少し時間を稼いで…
「むーむー!」
「黙って由紀姉!お願いだから!」
「(ビクッ)」
強めで、かつ小さな声で言うと由紀姉は少し涙目になりながらも黙ってくれた。
「…賭けだな、これ」
流石に由紀姉に見せないように、コイツをこの場で殺すのは無理だ。
「あぁ…うぁ……」
ズチャッ、ズチャッと、足元で血が付いているのか、そんな音を鳴らしながら、だんだんと近づいてきてる。端っこまで来たと思うと、運の悪いことに、俺たちのいる列の方に曲がって来た。
「うぅ…」
「…大丈夫、大丈夫だから」
そいつの姿を見た由紀姉が、俺の胸に顔を埋めるようにして来た。
それを庇うように後頭部に腕を回して、強く抱きしめる。
「(万が一の時は……多少大げさにでもして由紀姉を…りーさん達のところに…)」
本当に、すぐ横をソイツが通っている間、心臓をバクバクさせながらゆっくりと距離を離す。が、ソイツは俺たちの列に入ってくることもなく、そいつはそのまま通り過ぎて行った。
「…フーッ、ひとまず…このままジッとしてれば…」

「レーくん…今のは……」
「大丈夫…です。みんな、由紀姉のことを、想ってくれています。由紀姉のことを、絶対に助けようと、してくれます。みんながいれば……あんな程度のお化けなんざ、怖くないです。平気です。それに、めぐねえも居てくれるんです。絶対に、平気です」

ガンガンガンガンガン！

しばらく身を潜めていると、何か金属を叩いているような音が響いた。
…よかった、向こうは無事らしい。
「はっ…」
「大丈夫、ジッとしてて…」
そうすると由紀姉はもっとこっちに顔を埋めて来た。

しばらく音が鳴り響いていて、突然ピタッと止まった。
かと思えば何かを殴る、鈍い音が鳴り響いた。
それを聞いて、ちゃんとやってくれた、とすごい安堵した。

「(…もう二度と肝試しやんねえ)」
そして俺の嫌いなものが一つ増えた瞬間だった。

「…めぐねえ！りーさん！くるみさん！こっちです！」
「わー！わー！声出しちゃ…」
「いや。もう大丈夫ですよ、お化けはくるみさん達が退治してくれました」
「えっ…」
「おっ、いたいたー」
まぶしっ⁉？くるみさん、急にライト当てないでくれません⁉？
「由紀ちゃん！レイ君！」
「２人とも、大丈夫⁉？」

「う、う…ごめんなさい！」
　すると由紀姉はさっきまで俺にしていたように、今度はりーさんの胸に飛び込んだ。
　その豊かなたわわに由紀姉が吸い込まれていった。
　そしてそのまま泣き崩れていた。
「はー…、ほんと、心臓止まるかと思った……」
「レイ君！大丈夫なの⁉？」
「だ、大丈夫ですよ、めぐねえ。心配しすぎ…」
「当たり前ですっ！もう二度とこんな無茶しないで！」
「っ…はい。すいません」
「もう…本当に……」
　めぐねえが涙目でそういってくる。
　…もっと上手くやれる方法が、あったかもしれない。
　けど、俺にはこれしか思いつかなかった。
　これは、俺のミスなのはわかってる。
「にしても、レイ、ほんと助かった」
「いえ…こんな、危険な綱渡りの方法しか気がつかなかったんです。もっと他のやり方あったかも…」
「それでも、ありがとう、レイ君」
「ありがとーレー君！」
「先生を代表して私からも言わせて、丈槍零君。ありがとう」
「う、うぅ…」
「あ、赤くなったー」
「うふふ、珍しいわね」
「これは写真に残しときたかったなー」
　くっそ…由紀姉のせいだ、こんな恥ずかしい目にあうのは…。
　あとりーさんやめぐねえの慈愛に満ちた目もここだと只の心を突き刺す槍にしかなっていない……。
　可愛いですけども！可愛いですけども！
「それじゃ、帰りましょう。今日はとっとと寝たいです」

「そうね、それじゃ帰りましょう」
そして来た道をそのまま戻っていく。
バリケードを超えて少し歩いた時に、りーさんが口を開いた。
「ねえ由紀ちゃん、肝試し楽しかった？」
「うん！とっても楽しかった！来年もまたみんなで！」
「ああ」
「そうね」
「俺はもうゴメンです…二度としたくない……」
「えー⁉？」
「ゆ、由紀ちゃん達、三年生…よね？留年…しちゃうの？」
気づいていなかったのか、めぐねえに言われて由紀姉は忘れてた…みたいな顔をして固まった。
「あー、由紀はするんじゃないですか？」
「そーねえ」
「うー、くるみちゃんもりーさんもイジワル！あ、でもそれだとレー君と一緒に卒業できるのかー！」
「えー…ただでさえ由紀姉の面倒見たくないのに来年もさらに見るの…？」
「レー君まで⁉？」
その後は、よく覚えてない。
気づいたら部室に戻って来ていて、そのまま部屋に行き、倒れたところまでは覚えている。
あ、でも途中で図書館に由紀姉にしたことを思い出して1人で悶絶はしていたな。
あれは二度とゴメンです。
ほんっと恥ずかしいったらありゃしない

４話　世界が死んだ日

「……」

うん、やっぱり夜の屋上はいい。少し肌寒いけど、余計なこと…って言ったらちょっと…いや、カナーーリだめだけど他の誰のことも考えることなく、自分だけの、自分のためだけの時間になる。

ただ、一つ問題点としては、この行為は見つかる＝めぐねえとリーさんからの超長いお説教が待っているという点だ。

できればそれは御免被りたい。

というか絶対に嫌だ。

それでも俺がこんなことをするのは、未だ自分の選択が、地下での出来事が、正しいと思えない。

そんなことを思ってしまうから。

足首についている噛み傷を見るたびに、地下での出来事を、あのクズどもに裏切られたことを思い出す。

そして、俺自身が行った罪も。

「…痒。てか…マジで治んねえな。血液が変異してんじゃねえの？これ。出来るわけないとは思うけど、輸血するときとかどーすりゃいいんだろ」

噛まれたのがもう数ヶ月以上前だ。それに、あの薬も使ったんだ。血液が変異していてもおかしくない。

つまりは、見た目は人間でも、中身はやめている可能性が十分にある。

つか、空腹感が常にある時点でアイツラと同じようなものだ。

「…まあ、関係ねえか。俺は俺だ」

うん、そんなことを考えてもしょうがない。

俺に出来ることなんか限られてる。

「…ひとまず、あの薬は最低でも人数分は取ってきたいよなぁ…てか、できることならあの地下を使って生活したいけど…それはまだ高望みしすぎ、かな」

あの地下には、俺のせいでアイツラがウヨウヨしてる。そのことは

まだみんなには伝えてはないけど、地下まで物資を取りに行くときになれば必然とみんなに言う必要がある。
それに、流石にあの狭さであの量相手は幾ら何でもキツイ。
「…いっそのこと、燃やしてやればいいんじゃね？蒸し焼き、みたいな。あそこの扉、全部防火扉でクッソ分厚いし、なんとかなるんじゃ……いや、食料とかダメになるかもだし、熱で薬の性質が変化したら元も子もないか…」
…まあ、そのときになったら考えよう。
「ん…？あれ、誰か走ってる…？……やな予感」
なんか物音するなーと思い、耳を澄ませると、扉の方から何やら音がする。ドタバタと階段を駆け上がるような。
アイツラはこんな音を出せるわけがないから、出せるとしたら生きた人間。しかもここには生きてる人は俺以外だとたった４人な訳で…

さて、説教（地獄）が待ってるぞ、こりゃ。

「レイ君！」
「…げ」
うわっ、しかも一番怒らせたら怖いりーさんだ。
これは死んだかも（震え声）
「レイ君！何してるの！」
「い、いえ。少し考え事を」
正直にいうも、りーさんは納得しておらず、怒り心頭だった。
あれ？ていうかうっすら涙が浮かんでいるような……。
「ほんっとうに…急にいなくなって……。心配したんだから……」
「は、はい。ごめんなさい。ただ、夜だし、３階から上は完全に安全と言えるまで探索はやっていたので１人で屋上に行っても大丈夫かなーと思いまして」
「ふざけないで！」
「（ビクッ）」

…怒鳴られた。いや、当たり前なんだけど。これは百パー俺が悪い。
「私が、レイ君が急にいなくなってて、どれだけ不安になったか…」
「…すいません」
何も言い返せねぇ…
てか、涙目で訴えるって反則。良心が粉々に砕かれる。
「…ん？私、ってことは今起きてるのはりーさんだけ？」
「そんなこと今は関係ないわ」
「いやいや、俺が言えた立場ではないですが、学園生活部の…第何条目かは忘れましたが夜1人で行動しないってやつがあった気が」
「…」
「いや、目を逸らさないでくださいよ」
そう言うも、りーさんは目を合わせようとしない。
俺に注意してしまった以上、気まずいんだろう。
…でも、なんか無理に顔逸らしてるから、何というか面白可愛い顔になりかけてる。
「……」
だから、そんなりーさんをケータイで写真を撮ったのは間違っていない。
何でケータイがあるかというと、元々この高校は携帯については規則が緩く更には俺は保健室登校だったため、常に持つことを許されていた。充電の仕方とかかなり気を使ってるけど。
「ちょっ、レイ君!?？何を…」
「ほら、りーさん可愛いですよー。これ由紀姉とかくるみさんにも…」
「…」
「あっ、はい。すいません。冗談です。…口止め料、っていうものですよ。りーさんのこの写真があるので、俺がここにきていたことも内緒で、頼みますね」
笑いながらそう言うと不満なのかりーさんは不機嫌な顔になった。
「まあまあ、そう怒らないでくださいよ。今夜たっぷり時間はあるんですから。…そうですね。不公平でしょうし、もう一つ。俺の秘密

を、りーさんに教えますよ。それでおあいこです」
「秘密…？」
　秘密という単語が引っかかったのか、不満顔から今度は疑問を含んだ顔になった。
「ええ、俺の秘密です。具体的に言いますと……俺が地下で何をしたか、何が起こったか。……それを言う前に、覚悟、できますか？」
「覚悟？」
「ええ…。世の中には、『知らない方が幸せ』って事があります。俺の秘密は、まさにそんな部類に入ります。今から言うことは、めぐねえにすら言ってません。ですが、今後地下に行く可能性は限りなく高いです。ならば、必然と俺が何をしたか、何をされたか、わかってしまいます。ならば、今いうか、後に言うかの違いです。覚悟っていうのは…そんな俺を、どうするか――――生かすか、殺すかを決めて受け入れる覚悟ができているか、という意味です」
「…めぐねえ達と、一緒じゃダメなの？前に、めぐねえ達と一緒に、包み隠さず、って言ってくれたでしょ。アレは嘘なの？」
「嘘じゃないですよ。ただ、今は、めぐねえはともかく、くるみさんと由紀姉が一緒はダメですね。ショックが、大きすぎる可能性があるので。もう少ししたら、…地下に行って、薬の箱を見つけてもらったあたりが、多分タイミング的にはジャスト、だと思います」
　りーさんは、何を言おうとしているのか想像ついていなかった。
　ただ、それが当たり前だ。
　俺は、フェンスに座ってりーさんを見下ろす形になり、そこから左足の靴と靴下を、ゆっくりと脱ぐ。
「…！レ、レイ…君？そ、その足首についているのって…」
「ええ、そうですよ、りーさん。俺は、地下生活をしていた時に、アイツラに噛まれています」
「っ！」
　そう言うとりーさんはすぐに俺から距離をとった。
　うん、ただしい判断。
「安心してくださいよ。俺にあるのは、空腹感と体温の低下のみです。

超低温の体温ですので、夏とかだとヒンヤリして気持ちいいと思いますよ。これからの季節にはぴったりです」
　皮肉を交えてみるも、りーさんの顔はずっと険しい。
「…本当に安心してくださいよ。俺が噛まれたのにこうして生きている、ってことはどう言うことか、りーさんなら想像つくでしょ？」
「…薬が、あるのね。アイツラの症状を治すための、薬が」
「うーん、少し違いますね。正確には、噛まれた後に投与すれば発症を抑える事ができると言うもの。噛まれてから時間が短ければ短いほど、効果は期待できます。俺の中での当面の目標は、この薬を人数×2つ分は取ってくること」
「レイ君、そこは…今は、どうでもいいの。貴方は…」
「ああ、はい。…どこから話しましょうかね。やっぱり…あの日から、でしょうか」

　あの日、僕はいつも通りの朝を迎えていた。

　僕は、いつも通り慈さんより早く起きて、慈さんのタンスから下着以外の、いつも学校できている服を取り出して慈さんの部屋の前において、キッチンで2人分朝ごはんを作って、テレビをつけて。
　…なんか、交通事故のニュース多いね。
　朝の6時半になり、慈さんの部屋から目覚ましの音が鳴り響く。
　ガチャッと音がしたあたりからちゃんと起きてくれたんだと思う。
「うー…おはよー…」
「おはようございます、慈さん」
「あ…今日は目玉焼き？」
「ご名答です」
「いつもありがとうね…レイ君」

「いえ、これくらい」
慈さんは寝ぼけながらも、椅子に座ってご飯を食べ始めた。
というか、恵さんパジャマがはだけかけてるんですが。目のやり場に困るんですが。僕、ちゃんと着替え置いてなかったっけ？
「相変わらずご飯美味しい～」
あ、これ気づいてないやつだ。いつもののほほんとした感じだから、多分そうだと思う。ていうか…あの、パジャマの下から下着とか見え始めて……
「？レイ君、どうしたの？顔逸らして。なんだか顔も赤いよ？」
「いや、あの…その、慈さん、今一度自分の姿をご確認ください…」
「…？……っ⁉？」
ゆっくりと自分の姿を見た慈さんは、一気に顔を真っ赤にして服を着なおしてくれた。
「むきゅう……」
「そ、その…なんかごめんなさい」
「い、いえ、これは私が悪い…んだけど、レイ君、もしかして見…」
「見てないです」
「いや。さっき指摘してくれたってことは見」
「見てないです」
「いやでも」
「見てないです。あ、学校行く準備…しなきゃなのでひとまず部屋に戻りますね」
「…まあいいわ。わかったわ。…ねえ、レイ君」
「はい」
「学校…行くのは辛くない？」
「…辛いかと言われたら、辛いです。でも、慈さんがどれだけ僕のために頑張ってくれているのか、それを考えると行かない、なんて選択肢はできないです。それに…人付き合いがダメなだけで、勉強は普通に好きなんです」
「そう…」
相変わらず慈さんは学校の話となると一気に暗くなる。

そんなのを見ていたら僕まで悲しくなってくる。
イジメは慈さんは一切悪くないのに。
悪いのは、全部自分なのに。
「それじゃ、準備してきますね。慈さんも、部屋の前に着替え置いていたはずなので、早めに準備お願いします。なんか今日は渋滞してそうなので」
窓から外を覗くと、車がかなりいっぱいいるのが微かに見えた。
今日雨なのかな？

思えば、ニュースをよくよく見ると、この街の近くで交通事故が多発していたのいうのがわかって、何か異変が起こっていると気づけたのかもしれない。
この時から、何かおかしいと、気づけたのかもしれなかった。

あれから、準備を終えた慈さんと、車にて学校に向かった。
歩いて行けない距離ではないけど、あの一件から、1人で登校することを慈さんが拒んだ。そのためこういうことをしている。
「本当に渋滞しているわね…。レイ君が言っておいてくれて助かったわ…」
「いや、慈さんいつもギリギリだったから冗談で急かしたつもりだったんですけど…別の意味で功を奏しました」
「その節は大変ご迷惑をおかけしました…」
と、慈さんは項垂れてしまった。
可愛いけど、運転大丈夫ですか？それ。
「ていうか、今日サイレン多い…ですね。何かあったのかな」
「そうね…」
今朝のニュースといい、何かテロでもおこってたりして。
まさかね。

と、そんなくだらないことを考えてると助手席の方からメールの着信音が届いた。
「？慈さん、メール届いてますよ」
「ああ、またお母さんだと思うわ。いいわよ放っておいて」
いつものやつってことですか。相変わらず慈さんのお母さんは心配性というかなんというか。
「…（見えてきたな…嫌だな。またクラスメイトと顔を合わせるかもしれない）」
窓から学校が見えてきて、そこそこ高かったテンションは一気に０まで落ちた。
それをできるだけ隠しながら窓の外を、できるだけ学校を見ないように眺める。
そしてしばらくしたら学校の中に入っていく。
「よし、それじゃあ丈槍レイ君。また放課後ね」
「はい、佐倉先生」
そして、慈さんは職員室の方向へ。僕は保健室の方向へ向かって歩いていく。
はぁ…やだな。

～昼休憩～
「…ご飯食べよ」
保健室の机で弁当（もちろん僕の手作り）を開く。
相変わらず素っ気ないけどお腹膨れればいいし。
うん、料理のバリエーションが少ないわけじゃないですよ。本当です。
「いただきま…」
ポンっ
「っ⁉？…て、なんだユウちゃんか…」
「相変わらず驚き過ぎじゃない？てか、どーやってそこまで移動した

のよ」
「か、勝手に体が動いちゃうんだからしょうかないじゃん…」
「いやいや、机の前から、後ろ私がとってたのにどうやって私の後ろにあるベットまで潜り込んだのよ」
そんなこと言われても分からない。
目の前にいる茶髪ロングで、瞳の色が赤というちょっと変わった見た目をしてるのは、南雲有(なくもゆう)。
小学校に上がる前からの幼馴染で、この学校で慈さん以外で話せる2人のうち1人だった。もう1人?それはこの保健室の先生です。
ユウは、超体育会系女子といった感じで運動神経がめちゃくちゃいい。
あとは喧嘩早い。
小学校の頃に、2人の下の名前をあわせたら『ユウレイ』となることからからかわれたが、その日のうちにからかってきた相手を男女問わず問答無用で蹴散らしたことが…。
「ユウちゃん、僕のとこに来た時点で何をしたいかは察してるけど…どしたの?」
「ふふん、バレてるなら隠す必要もないね。てことでレイ。勉強教えて!」
「やだ」
「なんでー!」
「だって…ユウちゃん。どうせ赤点全部でしょ?」
「……」
「目そらしてもダメだよ」
図星らしい。相変わらず体を動かすこと以外はポンコツらしい。
「うーー、お願いレイ!ピンチなの!ほんっとにピンチなの!」
「一教科ならともかく、全教科はヤダ。勉強しなかったユウちゃんの責任」
「うぅ…レイの人でなしー!あ、じゃあじゃあ!わたしと何かスポーツで勝負して!それで私が勝ったらお願い!」
「やだよ、ユウちゃんの独壇場じゃん」

「むー、よく言うよ。レイもなかなかの身体能力の癖にー。私と唯一張り合える男子だよ?キミィ。少しくらい自分のスペックの高さを自覚しなよ」
「そんなわけないじゃん。みんな手を抜いてるだけだよ。それと絶対やだよ。前に勉強を見てあげて地獄見たからね」
「むー!レイのドケチ!いいよもう!」
そう言いながらユウちゃんはどこかに走り去っていった。
「相変わらず破天荒…。……僕に関わったらロクなことが無いって分かってるはずなのに、お人好しなんだから…」

〜放課後〜
よし、やっと終わった。早く慈さんの所に…。
職員室の扉をカラカラとゆっくり開けると、いろんな先生に一斉に目を向けられる。
「っ…そ、その…さ、さく、佐倉…慈、せん、せいは…」

思わず、息が詰まって、何かよくわからない感情がグルグルして、うまく言葉にできない。
どれだけ人に対して拒絶をしているのか、克服できていないのか、自覚できるほど酷い。
「あ、ああ。佐倉先生ね。いま三年生の教室で国語の補習をやってるわよ。ね、ねえ…顔青いけどだい…」
「ひっ…」
「あっ!ちょ…」
先生が近づいてきて、思わず逃げるように職員室を出てしまった。
周りの生徒の目が向いているのも構わず、とにかく慈さんのいるであろう教室へ走った。

「はっ…はっ…はっ…」
三階の、三年生の教室まで来た。
逃げるように走ってきたおかげで、呼吸が辛い。
「うぅ…」

駄目だ、やっぱり人と話すのは。
大丈夫と、わかっていても拒絶してしまう。

「し、失礼…しま……」
「あらレイ君」
「誰？」
「由紀ちゃん、この子はレイ君。丈槍零君よ。って…それより由紀ちゃん、テストやってね…」
「わかってるよー。お堅いんだからめぐねえは～」
「めぐねえじゃなくて、佐倉先生でしょ…もう。あ、レイ君。中入ってていいから、離れた所に座っててくれるかな？」
「は、はい…」
教室の中には、慈さんともう1人。ピンクの髪で少し変わった帽子を被ってる人がいた。
制服は紫色の方だった（この学校はなぜか制服が二種類、緑を基調としたものと紫を基調としたものがある）。
慈さんの言葉からすると由紀さんというらしい。
この教室で補習？を受けてるということは多分三年生の人だろう。

でも、僕には関係なくて。
どうしても、慈さんの人以外だと、他の全ての感情を差し置いて、拒絶をしようとしてしまう。
由紀さんを警戒しながら、かつ怯えながらという自分でもよく分からないことをしながら、ゆっくりと壁沿いに移動して、一番離れている席に座る。
「（本…読もう）」

本を読むのは、個人的には好きだった。
周りを気にしなくていいから。自分だけの世界に入ることができる。

あとは、慈さんをこっそり見てたりとか。

「…由紀ちゃん。ちょっとテストしながら待っててもらえる？ちょっとだけ外に出てくるわ」
「えー。お腹すいたーおかし食べたいー！」
「テストが終わったらね」
と、慈さんは教室から出て…行って……え？
「め、めぐ…み……さん」
とっさに、呼ぼうと思ったけど、時すでに遅く、どこかに行ってしまった。
「……」
怖い、一人は、嫌だ。
しかも知らない人と、他人と同室だから、尚更、嫌だ。
と、とにかく本を読むフリでも何でもいいから隅っこでじっとしてよう……。

「……」
何というか、あの子変だ。
たしかレー君ってめぐねえが言ってた。
でも不思議なことに名字が丈槍で一緒だ！
もしかして、生き別れの弟だったり⁉？
「ねえ！」
「（ビクッ）」
小難しいことを考えず元気に話しかけてみると、ビックリさせてしまったらしく縮こまってしまった。
うー、失敗したかな？

「レー君？だっけ。本読むの好きなの？」
「……」
「あ、あれぇ…？」
私なりに無難な話の始め方をしたのに、無視されちゃった⁉？
「…」
あ、違う。どうしようか迷ってる。目が泳いでるもん。
「そ。その…テ、スト。やら……なくていいんです…か？」
「ふふーん。もうとっくのとうに終わったよ！」
「そ、そう…です、か」
なんだろう。ずっと目をそらされる。
……いたずらしちゃおっかな。
「えいっ！」
「へっ、うわっ⁉？」
「このこのー！」
「ちょ…やめ……くすぐったい…」
「ほら！張り詰めた顔は疲れちゃうよ！笑って笑って！」
「や、やめ…」
顔をずっと本で隠してたから、後ろに回り込んでくすぐってみると効果は抜群だったみたい。笑いを必死にこらえてる。
「ゆ、由紀ちゃん…？な、何してるの…？」
「あ。めぐねえ。おかえりー。いやー、ちょっとね。レー君と遊んでた！」
「あ、遊んでた…？それとめぐねえじゃなくて…」
レー君が涙目になってきたあたりでめぐねえが帰ってきた。
「由紀ちゃん、テストは…？」
「ふふーん。もうとっくのとうに終わっちゃったよ！」
「お疲れ様。レイ君も、ごめんね1人にしちゃって」
「い、いえ…大丈夫…です」
「ねえねえ！レー君。一緒に帰ろ！それでそれで！アイス買って食べようよ！」
「こらこら、下校中の買い食いはダメよ」「そ、その…帰りは、佐倉先

生と…帰るから、無理……です」
「えー！」
なんと…まさか生徒と教師の禁断の恋⁉？

あながち間違いではなかったりする。

「めぐねえー」
「佐倉先生…？」
「うん…」
どうしたんだろ？ずっとスマホ見てる。
「ねえめぐねえ、どうしたの？空返事だよ」
めぐねえのスマホを見てみようとするも、見れなかった。
何があったんだろ。
「もう、人のスマホを勝手にみちゃいけません」
「ちぇーもう帰るー」
「慈さん、本当にどうしたんですか…？」
「い、いや…その…」
おおっ、レー君がちゃんと喋った！なんだー。喋れるじゃん！
「た、丈槍さん！」
「はい？」
と、めぐねえに呼ばれたから返事をすると、まさかのレー君とハモっちゃった！これは運命的な奴では⁉？
「あ、そ、そうだったわね…。２人とも名字が同じだったわね…。由紀ちゃん。電車止まってるみたいだから、少し待って行ったら？」
「えー？そうなんだ。でもお腹すいたよ…。あ！そうだ！屋上いこうよ！プチトマトとかあるんでしょ？」
「あるけど…食べちゃダメよ？それに屋上は立ち入り禁止だし」
「それなら、園芸部の見学！それならいい？」
「…しょうがないわね」
「やったー！ほら、レー君も行こ！」

「え、僕は…い、いいで…」
「よし！レッツゴー！」
渋っていたレー君の腕をもって、屋上へしゅっぱーつ！

…一体何がどうなって僕はここまできたんだ。
由紀さんに弄ばれて、流れて屋上まで連れてこられた。
にしても…電車とまったんだ。
今朝のニュースといい、サイレンの多さといい。本当に何か起こってるのかな。
スマホを開きたいけど、手を由紀さんにもたれてひらけない。
「鍵、開いてたね」
ためらいなく由紀さんが屋上のドアノブを回すと、普通に開いた。
そしてその先には園芸部が育てている植物から、太陽電池、貯水槽などが見えた。
相変わらずの設備の良さだね。
「あ、すいませーん。また鍵かけ忘れちゃってて。閉めておいてもらえますかー？」
多分、園芸部の人だろう。その人がそう言ってくる。
場所的に僕が一番近かったから、鍵を閉める。
「わぁー！ほら！レー君行こ！」
「ちょっ…ひっぱら…ないで…」
「すごいよ！これ！あ、園芸部の人ですか？」
「見ての通りよ。あなた達は園芸部の見学かしら？」
「うん！そーだよ！」
「いや、僕は違…」
「美味しそーだね！」
「うふふ、食べたい？」
「いいの⁉？」
「ええ、お手伝いしてくれるならね」
「うん！」

ちょっ…僕関係ない……。
慈さん、そんな慈愛に満ちた目を向けないで助けて…。
「ゆーりさんは、いつも1人で菜園のお世話をしているの？」
「ううん、なぜか今日は1人も来ないのよね」
由紀さんが手伝いに入って、ようやく解放された。
にしても…やたらとスマホに通知くるな。何かあったのかな？
慈さんは慈さんで誰かに電話してるし。
「…えーと、ニュース速報…？」
何でニュースが通知で来るんだ。
てか…あれ？『巡ヶ丘市で大規模な交通事故発生』『巡ヶ丘ショッピングモールで大規模な乱闘』『巡ヶ丘市で……』
…え、全部この近辺じゃ…。
「慈さん。電話って誰にかけて……」
「そ、その。お母さんにだけど…なんでかでなくて……」
そう言いながら慈さんはスマホをまた操作し始め……。
プルルルル……
そしたら、今度は電話がかかってきた。
慈さんと、僕のが同時に。
慈さんのは他の先生から。
僕のはいつもお世話になってる保健室の先生から。
「もしも…」
『レイ君！大丈夫!?？今どこ…』
ドンドンドン！
とても焦った声で、開口一番にそう言われた途端、今度は屋上の扉

が勢いよく叩かれた。
「え…」
「なんだろ？」
「他の当番の子かしら？」
『屋上ね！なら絶対そこから動かないで！絶対に誰も入れないで！もう保健室の方は……グシャッ！』
話してる最中に、何かが吹き出たような音が聞こえた。
そのすぐあとに、バリン！と言う何かが割れる音も。

ドンドンドン！

いまだに、叩く音が鳴り響いてくる。
「…ね、ねえ。慈……さん。一体何が…」
「わ、わからないわ…。職員室の方で…何か起こって…」
「ほ、保健室の方も…です。何か、吹き出たような音とかして…」
職員室も…？
「はーい、今開けるよー」
そんな中、由紀さんは扉を開けようとした。
「ま、待って由紀ちゃん！」
「へ？めぐねえ…？でも、開けてあげないと…」
慈さんのとっさの制止によって、しばらく沈黙が流れた。

だれか…

「慈さん、生きてる人です！」
「！」
小さな声が聞こえたから、咄嗟に叫ぶと慈さんがドアに近づいて耳を当てる。
「お願い……開けて…」
「っ！」
慈さんが確認したあと、すぐに扉を開けた。

そこからは、ひとりの女子と怪我をして担がれている男の人がいた。
男の人は、左腕に咬まれた跡があった。
犬や猫といったものじゃなく、どう見ても人の歯型だった。
「恵飛須沢さん⁉？」
「早く…鍵かけて…」
「この人、怪我してる！」
「何が…あったの？」
「先生、早く保健室へ！」
「「ダメだ（です）！」」
園芸部の人に、僕と恵飛須沢さん？はほぼ同時に返した。
「下は…もうダメなんだ」
「保健室の…先生から、電話があって……もう、そこも、何かが起こって…。保健室の先生も多分…巻き込まれて…」
「何…あれ…？」
全員が混乱してる中、由紀さんがフェンスから外を見てそう呟いた。
それにつられて、見てしまった。
見ない方が、良かった。
そこは、地獄が広がっていた。
まるでゾンビ映画のワンシーンのような、現実にありえないようなことが、実際に起きていた。
人が、人に噛まれて。噛まれた人も、同じように他の人に噛みつきにいって。
それが至る所で起きている。
人の悲鳴が、こだまする。
「…っ！あ、あの！ユウちゃん…南雲有は…どこにいったかわかりま

すか！格好を見る限り、ユウちゃんと同じ陸上部…ですよね！」
「っ…。な、南雲のやつはアタシが逃げること提案したのに、他の奴らを助けるって言って聞かなかったよ。アタシのせいじゃない…」
「…そ、んな…」

いや、大丈夫だ。きっと…ユウちゃんなら…。

「っ、先輩！」
突然、男の人が唸った。
容体が急変したのだろうか。
「外に出て、救急車を呼ばないと…」
「ダメ…さっきからかけてるのに、繋がらない！」

ドガァァァァン！

すると、今度は街の方で、とても大きい爆発音がした。
一回だけじゃなく、何回も。
目で見えるだけでも4～5箇所ほどから、煙が上がっているのがわかる。
「え…？わかんない…。なんで…。どうして、こんなこと……」

ドン…ドン……

由紀さんが、混乱して、何かを言ってると、また扉が叩かれた。
まだ生きてる人が……？もしかしてユウ…

バリィン！

「「っ⁉？」」
「いやぁぁぁ！」
「くっそ、きやがった！」

ガラスが割れ、そこから出てきたのは
明らかに腐敗してきている腕。
一本だけじゃ無い。少なくとも5本以上ある。
「え、園芸部のロッカーを！」
「せ、洗濯機も！」
慈さんが慌ててロッカーを動かしに行った。多分扉を塞ごうとしたんだと思う。
園芸部の人は、洗濯機を取りに行った。
「て。手伝います！」
「お願い！」
それに流されるように、洗濯機を移動させるのを手伝う。

「……」
「先…輩？」

洗濯機を移動させている最中に、見てしまった。
噛まれていた人が、急に立ち上がったのを。
皮膚の色が、変色し始めていたのを。
目から光が消えていたのを。
さっきまで男の人だったものは、一番近くにいた恵飛須沢さんに向かって手を伸ばした。
「恵飛須沢さん逃げて！」
「ハッ…きゃっ！」
そして。押し倒された。
「いっ…っ…！」
その後も、男だったものは、恵飛須沢さんにゆっくりと近づいていった。
「ウガァァァ！」
「うぁぁぁぁ！」

そして、恵飛須沢さんは、手元にあったシャベルで

目の前の、男だったものの首を、殴った。
ゴギッという生々しい音と共に男だったものはその場に崩れた。
「……」

死んだような目で、恵飛須沢さんは立ち上がった。
そして、首にもう一度、振り下ろした。

更にまた、今度は頭に向かって

さらに頭にもう一発

四発目が入ろうとしたところで、由紀さんに止められた。
由紀さんが恵飛須沢さんにしがみついた。
するとさっきまでなかった光が、目に戻っていた。
遠目だからはっきりとは言えないけど、由紀さんも恵飛須沢さんも泣いているように見えた。
そして、カランと音を立ててシャベルをその場に落とした。
「慈…さん。ここから、どう……」
プルルルル

慈さんに、どうすべきか、背中からのはげしい振動を感じながら聞くと同時にスマホから着信音が鳴った。
押さえつける力を緩めずに、なんとかスマホを取り出すと、そこにはユウちゃんからの着信を示す画面が映っていた。
「も、もしも…」
『レイ！よかった生きてた！』
「ユウちゃん！よかった…そっちも無事だったんだ…」
『なんとかね！そっちはどう⁉？誰か生きてる⁉？』
「慈さんと他に三人生きてる人いるよ。…っ！」

話してる最中も、アイツラは構うことなく扉をこじ開けようと力任せに叩いてくる。
『っ、やっぱり屋上に集まってんのね…。レイ！生きてんのなら、多少無理してでも地下にきな！地下は食料も薬も…ああもう！数が多い！ごめんまた無事だったらかけ直す！』
そして電話は切れた。
「レイ君、今のは……」
「ユウちゃん…です。まだ、生きてる…。多少無理してでも地下に…って。食べ物も薬…？もあるって…」
「れ、レイ君。何を考えて……」
「慈さん…、僕、こいつらが僕たちを諦めたら…いって、みます…。そ、それで…慈さんを、少しでも、安全な……」
「っ！ダメよレイ君！そんなこと…」
慈さんにそう言うと、とても止められた。
当たり前だ。

でも、この時の僕は、なぜかまともな思考ができなくなっていた。
そもそも、地下の場所すらわかってなかったはずなのに。

少しずつ、地下に向かえるよう今この場を整えるべきだったんだろうけど。
とにかくユウちゃんが心配だった。
それに、慈さんを、とにかく安全な場所に連れて行きたかった。

「……諦めた、感じですね。物音が聞こえなくなったら……行ってみます」
「お願いレイ君、やめて！」
「…うん、行けそう……。慈さん、念の為、僕が行ったら……、すぐにここ塞いで…。大丈夫です、ユウちゃん達を確認したら、すぐにユウちゃんを引き連れて、帰ってきます。そしたら、またみんなで地下に行けば……。よし、それじゃあ…行ってきます」

「お願い！待ってレイ君！1人で……」
慈さんの制止を振り切り、僕は屋上から出て地下へ向かった。

5話　地下の地獄の始まりと終わり

「ユウちゃん…！」
　ユウちゃんからの電話があって、屋上から飛び出した。廊下に出ると、そこにはヤツラ…映画に出てくるゾンビ？のような奴らがたくさんいた。
「うっ…」
　思わず、吐き気を催した。
　けど、なんとかそれを飲み込む。
「だれか…！たすけ…」
　所々に、生きた人がいた。窓際に追い詰められていた。
「っ！そこの人、助け…」

　でも、何故だろうか。
　それらが、同じクラスの人だと、わかった瞬間
　僕は、その人を
　見捨てた

　手元にあった、瓦礫を、そいつの方へ無意識に投げ、音を鳴らしたすると、ぼくの前にいた奴も、その音がした方へ向かって行った。
「なん…で、いや、いやぁぁ！」

　悲鳴を背中に受けながら、下へ、下へと降りる。

　所々にも、逃げ惑ってる生徒がいた。
　けど、その全てを、確実に助けれるものがあったのに、その全てを僕は見捨てた。いや、むしろ人のいる方に向かうよう、誘導して自分だけ助かるようにしていった。

　驚くほど冷静だった。
　非現実的なことに直面しているはずなのに、体はスイスイと動く。

正確に、最適なルートでゾンビ達の間を潜り抜けていく。

「っ…多…」

一回まで降りると、そこは上の階以上の地獄が広がっていた。

さっきみたいに間を縫って走り抜けるなんてことはできないくらいに、ゾンビがいた。

「地下への階段は…向こうか」

けど、それをみても驚くほど冷静だった。記憶にあった学校の見取り図を必死に思い出して地下への階段の場所を確認する

「廊下は無理…でも、外から回れば…いけそう。うん…急がば回れ…」

近づいてきた奴のうち窓際にいた奴の足を払って転ばせて、その隙に窓枠に登る。

そして、窓枠を伝って移動した。

近づいてきた奴は、その都度蹴り飛ばした。

地下への階段は一番端。だから一旦降りてホールの外を通って、渡り廊下の直前にある事務室のところまで来た。

事務所の窓ガラスを蹴り割って入る。

多少擦り傷できたけどどうても良かった。

「っ、ユウちゃん！どこ！」

けど、そこにはゾンビ以外誰もいなかった。

廊下に溜まっているゾンビと、地下へ向かっているゾンビ。その二種類しかいなかった。

「ユウちゃん！来たよ！どこ！」

そう叫ぶも、ユウちゃんからの返事はなかった。

「っ！まず……」

叫んだことにより、周りのほぼ全てのゾンビがこっちを向いた。

しかも地下へ向かっていた奴まで僕の方を向いた。

本能的に、自分の死を悟った。

「っ…やだ、まだ死にたくない…」

死ぬのかと思うと、途端に体が全く動かなくなった。
「やだ…まだ、慈さんにも何も…」
手が目の前に迫った。

その瞬間に、血飛沫が上がった。

「レイ！何してんの！早くこっちに！」
突然目の前から血が吹き出てかかってきたかと思うと、そんな声が聞こえた。
その方向を見ると、地下の方にユウちゃんがいた。
手には、消火器を持っていた。
そして、勢いよく噴射し、ゾンビ達に吹きかけた。
「ユウちゃん！無事…」
「あ、レイ！そのナイフ抜いてね！あと感動の再会は後！早くこっちにそのナイフ抜いて走って！」
「え？あ、うん！」
さっき僕に手を伸ばしていたゾンビを見ると、ナイフが側頭部に刺さって倒れていた。
そのナイフを抜き、ユウちゃんの方へ向かって一直線に走る。
ここに来るまでにやっていたように、ゾンビの間を縫って走り抜ける。
「そのまま地下にむかって！そしたらシャッターあるから、閉める準備だけ整えといて！」
「うん、わかった！」
通り過ぎる際に、ユウちゃんにナイフを渡してそのまま走り去る。
階段をさらに降りると一本道になっていて、至る所にゾンビの動かなくなったやつがいた。
ざっと２０匹くらいだろうか。
それらに目もくれず走り抜けるとシャッターがあった。それを思いっきり上にあげ、そばにあった机を置き完全に閉まらないようにす

る。

五分くらい経った頃だろうか。時間感覚もよくわからなくなったまま待っていると、ユウちゃんが走ってきた。

後ろに奴らを大量に引き付けた状態で。

「いくよ！タイミング合わせてよ！」

「わかってる！」

そしてユウちゃんはスライディングしてきて、それに合わせるように机を外に蹴り飛ばしてシャッターを下ろす。

綺麗にユウちゃんだけ入った瞬間に閉まって、ゾンビ達は1匹たりとも入れなかった。

「はぁっ…はぁっ…。レイ、ナーイス。あー疲れた…」

「お疲れユウちゃん。…ありがとう。たすけてくれて」

「いやぁ、びっくりしたわぁ。てっきりしばらく経った後に来るもんだとばかり。そしたら電話して直ぐに来たんだから。この辺であらかた片付けた後、戻ってたらレイの声聞こえたから慌てて戻ったのよ」

「本当に…ありがとう」

あれ、おかしい…な。涙が止まらない。

いくら虐められても、涙なんて一度も流したことないのに。

なんで…。

「…ひとまず、色々ありすぎた。ひとまず休も？大丈夫、この中は安全だから」

「うん…」

そうして、ユウちゃんと地下室の奥の方へ歩いて行った。

「いやぁ、すごいよここ。薬もあればお菓子もある。ご飯もあるし電気も水もある。なんでもあるよここ」

「そうなんだ…。そういや、ユウちゃんってどうやってここまできたの？」

「あたし？陸上部の練習してたら急に悲鳴聞こえてきてさ。周りを見たら人が人を噛んでんだもの。何が何だかわからないまま無事な人

を逃すように、立ち回ってさ。んで、校内も手遅れだーって思ってたら地下見つけて、これに行ってダメならダメだ、って思って他の子と入ったのよ。そしたら超あたり。んで、その後は上に行って無事な人を助けて、地下に連れてきて、上に行って、の繰り返し」
「そうなんだ…。それで、何人助けれたの…？」
「うーん、それが……たった2人ぽっち。本当は最初に陸上部の子達と地下に行ってたんだけど、途中で私ともう1人以外みんな噛まれて…。地下から校庭まで行っても、無事な人なんて5人いたかいなかったか。でも全員は流石に無理だから、確実に助けれそうな人だけを助けたの。
ほかは見捨てた。
まあ、もし生きてたら私のところに復讐に来るでしょ、きっと」
ユウちゃんは、何でもないかのように、そう言った。
けど、不思議なことに僕はそれに何も感じなかった。
当たり前だ、と思った。
「そういえば、あのゾンビ…？を殺すのにもなんのためらいもなかったよね」
「ん？当たり前じゃない。ためらってたら私が殺されてるっての」
「ああ…そう」
今度も躊躇いなく答えてきた。けどまあ、それもそうか。
「逆にレイこそ、どーやってここまできたのよ。あの怖がりなレイがよくここまで来れたわね」
「…わかんない。けど、気づいたら地下への階段の前まで来てた。上の階で、生きた人やゾンビ達は見たけど…1階についてからはよく覚えてない」
「そ…。まあ、レイの身体能力なら普通に来れそうだねぇ。あ、そいや他に生きてる人はそっちにいた？」
「え？えと…慈さんと、陸上部の人と、補習受けてた人と園芸部の人が…」
「…ん？陸上部って、だれ？」
「え？えと…ツインテールで、大学生？の男の人を担いでた人」

「あー、恵飛須沢か。なるほどなぁ。よく男1人担いで屋上まで逃げれたよ、あいつ。んで、他に生きてた人は？」
「いたけど…どうなったかは知らない。さっき言った4人は屋上にいて、無事だったのは見たけど…」
「どうなったか知らないって…見たんだろ？」
「見たけど…見捨てた。邪魔だったし…それに、中に同じクラスの人とかいたから、そっちに石投げて意識向けさせたりとか、した。それでそいつらに向いてる隙に降りたり、間を縫うように走ったりとか」
「…」
　あれ、ユウちゃんが黙った。
「なあ、レイ」
「なに？」
「お前、クラスメイトを見捨てたとき、どう思った？」
「え？
　…別に何も」
「…」
「なんでアイツラのようなクズを助けなくちゃいけないの？僕の時は、助けるどころか加担して、虐めてきて。そんな奴らをなんで助けなくちゃいけないの？」
「…そ。まあいいわ。んじゃ…はい、ここが私達の避難場所」
　と、なんか途中で色々入ってるボックスとかいろんな部屋があったけど、その全てを素通りしてすごい広い場所についた。
「おう、南雲。ようやく帰ってきたか。てっきり死んじまったかとおもったぞ」
「あんな所で死ぬもんかっての」
「ま、そだわな。んで、そいつが……」
「うん、私の幼馴染」
　そして。そこには2人いて。
　そのうちの1人――男子が一人、女子が一人いた。
　しかも。そいつらは、とても見知った顔だった。
「……っ！」

「ん？なんだ丈槍かよ。うーわ。なに、南雲って丈槍と幼馴染だむたの？」
「何？なんか文句あんの？」
「いーや別にぃ」
「あっそ、んじゃほっといてよ。私が誰と幼馴染だろうが関係ないじゃん」
ユウちゃんが何かを言い合っているなか、僕は情けないことに、ユウちゃんの後ろに隠れて震えていた。
苦しい、呼吸ができない。過呼吸になりそうだ。
吐き気がする。
この人間達をどうしても拒絶してしまう。

非常事態だから協力し合う、なんてことを考える前に、僕は即座にこいつらをゾンビ達の中に放り込みたくなったが、それ以上に拒絶感が勝った。

「…ちっ、今てめえと対立すんのは得策じゃねえな…。あーはいはい。今は手を出しません。これでいいか？」
「今は、じゃなくて今後二度と。それ約束しないなら、この中に遠慮なくゾンビども入れるよ？別に、私はお前らがどうなろうが知ったこっちゃないからね。とりあえず助けて、って言われたから助けただけ。私達も死ぬぞ、って脅しは無意味だよ。悪いけど君たちの知らない安全な隠し通路見つけたから」
「…」
「そういう訳で、大人しくしておくのが吉だよ？上の階にも生存者いるみたいだし、その人達と合流できたら多少変化あるだろうし。それまでは我慢しときなよ？」
「あーはいはい。わかりましたよ。チッ…」
そう言って、男は女と一緒に隅の方に移動した。
「…レイ。アイツらとどーゆー関係？」
「…イジメられてた。ずっと、ずっと。慈さんに見つかるまで、ずっ

と」
「なるほどねぇ…。どうする？レイ」
「どうするって…？」
「だーかーらー。殺したい？殺したくない？ぶっちゃけると、人はいなければいない方がいい。間引けば、食料もさらに温存できる。ただデメリットとしては何かしら事を起こす時の戦力低下。でも正直アイツらが役に立てることと言ったら囮くらい。…どうする？」
突然そんな事を聞かれたから、頭の中では軽くパニックになった。
けど、答えはすぐに出た。
「いや…今はいいよ。もし今後、危ない時があったら…犠牲になってもらえないから」
「オッケー。んじゃ、今しばらくは大人しくしてようか。さ、そうと決まればこの地下の案内しやきゃね。何があるかとか分かんないでしょ？ほら、行くよ！」
「え、ちょ…」
そしてユウちゃんに思いっきり手を引っ張られていった。

～約1ヶ月後～
「おい、とっとと起きろ丈槍」
「いっ…」
誰かに蹴られて、目が覚めた。
「ひっ…」
蹴ってきた人を見ると、あの男で、一気に体が強張った。
また呼吸ができなくなりかけた。
この一週間でだいぶまともになったけど、拒絶感は無くならなかった。
近づかれるだけで血の気が引いて、触れたら過呼吸に陥ってしまう。
ユウちゃんができるだけ近づかないようにしてくれたけど、それで

も治る気配はなかった。
「はっはっ…」
「んだよ、めんどくせえ。南雲のやつが呼んでるんだよ。とっととこい、クズ」
「っ…」
「ちっ…早く来いってんだよ！」
「わ、わかった…わかったから…」
再度蹴られそうになって、慌てて避けて壁際に移動する。
…ユウちゃんの存在が、大きいというのを今これでもかと実感していた。
男が何処かに行っているのに、十数メートル離れながらもついていく。
上の階に上がって、そこからさらに上に上がる。
そして、外と地下を隔てるシャッターの前で男が止まった。
「…ユウちゃんは？」
「この先だよ、早く行け」
「…君といつも一緒にいた女の人は？」
「いいからとっとと行け！」
そう叫ばれて、慌ててシャッターを開けてその先に行く。
そして男もこっちにきた。
「こっちだ」
そして、上の階に進んでいく。階段を上がるとすぐに警備室が見えた。
周りをよく見ると、簡易的なバリケードみたいなのを作っていて警備室と地下室にはあのゾンビ達が入ってこれないようになっていた。
そして、そこにユウちゃんとあの女がいた。
「あ、おはよーレイ。そいつに何かされなかった？」
「何もしてねえよ」
「お前に聞いてないよ。レイに聞いてんの。んで、レイ。何もなかった？」
「…」

何かを答える前に、男に睨まれた。何もいうな、って脅すかのように。
「だ、大丈夫だよ。なにも…なか、った。ただ、僕が拒絶しかけただけで…」
「…そ。ならいいわ。うっし、そんじゃあ今日やることねー。今日は購買のとこまで行って食料その他必要な物の確保」
そうして、ユウちゃんはみんなにカバンを渡した。
「ゾンビ達の処理は主に私がする。ただ、極力見つからないようにしてもらえると助かる」
「別に食料は地下にあるだろ。わざわざ危険を冒してまで上に行く必要あんのか？」
「地下のは巨大な冷蔵庫に入ってるようなものだし、保存食のようなものもたくさんある。でも購買部のは荒らされてなければかなりの食料庫。それに加えて購買部のはたべれる期限が短い。わざわざ地下のを消費するよりは先に上の食料をとったほうがいい。そうすれば地下の物資を温存できる。万が一、助けが来るまで地下で籠城する羽目になったときのために」
「…なるほどな」
「はい、んじゃ目的もはっきりさせたところで行きましょー」
ユウちゃんが先導してバリケードを乗り越える。
それに続くようにして男が。その次に僕が。最後に女が乗り越えてきた。

そこからは、普通に進むものだと、思っていた。
普通に、ゾンビをユウちゃんが蹴散らして、僕たちは安全に購買部まで行けると、思っていた。

「っ！なんでいつにも増して数が…」
「ユウちゃん！こっちも…」
「クッソ！どういうことだ南雲！夕方になれば数は少ないんじゃなかったのか！」

「きゃ…」
一回で、少し進んだ時には、そんなにたいした量はいないと思ってた。
すぐにユウちゃんが蹴散らした。
でも、そこから一匹、また一匹とどんどん現れてきた。
最初こそ、数の少なさに調子に乗っていた。
けど、数十匹が複数の方向から出てき始めたら話は別だった。
地下への階段付近のバリケードまでも距離が離れすぎてる。
絶体絶命、だった。
「っ……無理矢理突破する！付いてきて！」
ユウちゃんが近くにあった消火器を一箇所に向けて勢いよく放出し、そこから更に追撃を行なう。
そして先導していってユウちゃんに男と女が付いていった。
僕は…
「レイ！余計なことしなくていいから！お前もこっちに来い！」
「え？う、うん！わかった！」
出来る限り、数を減らそうと、バットで首をへし折っていっていたが、ユウちゃんにそんなことしなくていいって言われて慌てて走る。
「ちっ…二手に分かれるよ！私と――――は外から！レイと――――は中！いい具合にばらけさせるわよ！」
ユウちゃんに言われて僕は男と校内に。ユウちゃんは女と一緒に外へ出た。
「っ…おい丈槍！いくぞ！」
ユウちゃんが居なくなったことにより体が一瞬強張ったけど、男の叫びでなんとか体を動かす。
地下までの直通ルートはゾンビが多すぎるため、さすがに無理と判断したのか、別校舎へ向かう。
そこからは、また記憶が曖昧になっていた。気づいたら、別校舎の

二階の教室にいた。扉を机とかを全部使って簡易的なバリケードを作ってゾンビを凌いでいた。
「はぁ…はぁ…クソが……」
二階な為、入り口以外からゾンビたちが来るのを心配する必要はないのは良かった。
「…い、おい！聞いてんのか！」
「っ!?な、何…」
「とっとと何か考えろってんだよクズが！」
「痛っ…」
思いっきり蹴られた。
なんで？僕何もしてないのに。
「くっそ…南雲の奴に仕切られてからだ…そもそもあいつがこいつを連れてこなければ…」
何かぶつぶつ言われたけど、よく聞き取れなかった。
「…。おい、丈槍。おまえ、あの中に突っ込め」
「は…？」
いきなりこっちを見たかと思うと男はそう言ってきた。
「おまえ、ここに来るまでは嬉々としてゾンビどもの首へし折ってただろ。だから、おまえが先導してあの群れをぶっ潰せ」
「な、なんで僕がそんなこと…」
「あん？適材適所だよ！とっとと行け！」
またけられた。
なんで、そんなことするの。
簡易バリケードの前に来ると、ゾンビ達の群れが数十人ほどいた。
こちらに手を伸ばしてるけど、ギリギリ当たらない。

「……」
思いっきりバリケードを、蹴飛ばす。そうするとゾンビ達は勢いよく吹っ飛んで、何体かは窓から落ちた。他はその場に崩れたりしたのが１０体くらい。あとは周りに立っていて、僕を見た瞬間に近づいてきた。

まず、崩れた奴らの頭を、的確にバットで殴り潰す。
数発もやってたんじゃ、効率が悪すぎるから一発で的確に。

次に周りにいたやつ。
バリケードに使っていた机のうち一個をもって、思い切り振り回す。倒れたやつから、一体ずつ頭を潰す。
「おい！こっちだ！早く来いクズ！」

黙れ、何もできない癖して。何もしてくれない癖して。
偉そうに命令だけしてくるんじゃない

何かを吐き出すように、目の前にいた一体を、力の限りを尽くして潰した。
返り血をすごい被ったが、特に気にしている余裕なんてない。
また後ろからたくさん近づいてきてる。
それを見て舌打ちをして、男の方に向かって走る。
階段のところまで来て、ゾンビに向かってまたバットを振るった。
一番上いたやつを倒すと、ドミノ倒しのように、連なって倒れた。
流石に頭を潰す余裕はないので、顎を蹴飛ばしながら、僕が先導する形で下に降りる。

「っ…邪魔！」
おそらく音が響いていたからだろう。
ゾンビ達が群がっていた。
だから僕は、すぐそばにあった教室のドアを、力づくで取って、そ

れを思いっきり振り回した。ゾンビ達の体がいとも簡単に吹っ飛んでいく。
「はあっはあっ…」
「おい！こっちだ！」
男に呼ばれた方向へ、急いで向かう。
男を通り越して、先に行き、ゾンビどもをバットで殴って、蹴り飛ばして、蹴散らしていく。
気づくと、警備室の近くまで来ていた。
すぐそばにはバリケードもある。

けど、突破されかけていた

「うぁぁあ！」

そこに向かって、叫んで突撃する。
叫んだことによって、周りに溜まっていたゾンビは粗方こっちを向いた。一体潰して、一歩下がり横から来ていた奴の頭を殴る。そのままバットを振り回してゾンビ達を後退させる。
それを、ずっと続ける。
倒しても倒しても、どこからかゾンビ達が集まってくる。
そして数秒、ほんの数秒だけ、ゾンビ達がいなくて、安全に走り抜けれそうなところまできた。

その瞬間に、その道を誰かが走り抜けた。

それは、あの男だった。
どこかに隠れていたのだろうか。
そいつは、シャッターまで一直線に走り、開けて、その向こうへ入った。

その瞬間に、確かに、男がこっちをみて笑ったのを、みた。

瞬間、背筋がゾオッと寒くなった。
そして、その瞬間に確かに、喋っていたことを、聞いた。

「ここまで守ってくれてありがとよ、丈槍。お陰様で安全にこれたわ。んじゃあな、丈槍。そいつらと元気でやれよ。
あとな、俺たちはお前を同じ人間だなんて思ったことは一度もない。んで、お前なんかに食料を渡すのがもったいない。でも、生きているのならせめて人間(おれたち)の役に立ってから死んでくれ」

「俺…達?」

「ああ。そうさ。しっかし、南雲の奴も、酷いよなぁ。お前が唯一信じていた相手なのになぁ。お前はそいつに裏切られたわけだ」

は…?え?な、なんて言ったの…?

ユウちゃんが?僕を…裏切った?
僕が、いま正に、男にシャッターを閉められようとしているのは、ユウちゃんが考えたこと…?

そんな、そんなわけが…。

「う、嘘だ!そんな…デタラメ…」
「信じる信じないはお前の勝手だ。ま…もう無意味だけどな。じゃあな、丈槍。精々役に立って死んでくれや」

そう言って男は、シャッターを閉めた。
ロックする音も聞こえた。

「嘘だ……嘘だ……。ユウちゃんが…そんな…」

この時の僕は、いったいどんな顔をしていたんだろうか。
見たくもないが、見なくてもわかる。

今まで、必死になって、生きようとしたことは、無駄だった。

この地獄の中、唯一生きる希望だった人に、絶望の底へ叩きつけられた。

なんで僕はここまで必要とされない？
異質だから？
周りに合わせれなかったから？

なんで？なんでなんでなんでなんでなん――――

「痛っ！」
突然、左足首に痛みが走った。
思わず左足を見ると、ゾンビに噛まれていた。

やばい、多分感染した。
このままだと、僕はこいつらと同じになる。

でも、もうどうでもよくなってきた。
ああ…もう、このままこいつらに身をまかせるのも良いのかもしれない。

でもこのままだと、ユウちゃんに、あの男に、あの女に、嘲笑われるかもしれない。
それに、アイツらの、思う壺。

それだけは嫌で嫌で嫌で嫌で

なら、壊しに行けばいい。アイツラが、僕のことを壊しにきたんだ。なら僕もやってやればいい。アイツラを、恐怖のどん底に、入れてやればいい。

報復を、すればいい。

地下には薬もあったはずだ。もしかしたら間に合うかもしれない。

左足首から、どんどんと痛みが広がってくる。それを我慢しながら、一旦周りのゾンビから逃げる

確か、ユウが言うには、隠し通路があるはず…。

「あーもう、テメエラ、どんだけ俺のこと好きなわけだ?俺なんかよりイケメンは外に大量にいるだろ」

校舎の外へ出ると、少し小雨になっていて、雨に濡れるのを嫌がったゾンビ達が校舎内へ入ってきていた。

「チッ…他に入れる場所は…」

地下があるであろう場所の近くを、注意深く見ながら、ゾンビから逃げる。

そして、その途中に、明らかに最近弄ったような、マンホールがあった。

それを素早く取り外して、その中に入る。ゾンビどもが追ってこれないよう、ちゃんと蓋も閉める。

その間にも、左足から広がってくる痛みは続いてる。

あとどれくらい持つ?数十分?それともあと数分?

とにかく、まずは薬からだ。

あの地下までは簡単だった。足跡がついていたから。
あとは看板もあったし。
これ、もしもの時の避難通路？かな。
足場が悪いけど、とにかく走り抜けた。

体感で2分くらいだろうか？それくらい全力疾走をした後に、扉が見えた。
それを走った勢いのまま蹴って開ける。

…けな…で！レイが……なこと…
…無駄…ぜ？それに……つは、お前…裏切ら…

その先にも、また扉があり、その奥からは、よく聞き慣れた、憎悪を向ける対象の声が、聞こえてきた。
何を言っているかはわからなかったが、多分俺が居なくなったことへの喜びの声だろう。
とにかく、それより先に薬だ。
ガァン！と派手に音を鳴らしながら入る。
そこには、南雲と俺を囮に使った男と、それにずっと付き従ってた女がいた。けど、こいつらより先に、薬を、と思っていたのに、体は思わず男の方へ行っていた。
男が戸惑っていた中、目の前まで近づいた俺は、腹に一発、拳をぶち込んだ。
前かがみになったところを、無防備な首筋に向かって
噛み付いた。

周りから悲鳴が聞こえる。
だが、そんなものを意に介さず、噛み切らないくらいまで、顎に力

を入れた。
そして口を離した後、今度は女を見た。
こっちは別段、何かをされた訳では……いや、されたな。よく侮蔑の目を、軽蔑の目を、奴隷を見るような目をしてきたな。
それを思い出した俺は、足の、しかも膝を前から思いっきり蹴ってやった。
ボキッという音と感触が感じれたことから、明らかに折れただろう。
それに噛み付く気力はあまりなく、喚く二人を放って薬の保管してある場所へ向かった。
南雲の奴からは、なんか色々と言われていたが全部無視した。
それにしても、あの男の血肉、なかなか美味かったな。薬を服用したらもう一回噛んでみるか。

「あっ…た！」
薬の棚の中を乱暴に漁ると、鎮静剤と抗生物質、実験薬と書かれた薬を見つけた。
注射器だったが、それを躊躇わず、かつ慎重に自分の腕に刺した。
中に入っていた液体が、体の中に入ると、痛みがほんの少しだけ和らいだ。
「はっはっ…」
「レイ！良い加減に説明を…」
「あ、あー？なんだ、まだいたのか南雲。とっととおれの前から消えろ、目障りだ」
「え…？」
「聞こえなかったか？用がないなら俺の目の前から消えろ。まだ、お前に報復してないだけマシなんだぜ？」
「お前…誰よ」
「あん？丈槍零だよ。お前が見捨てた」

ああ、見捨てた相手のことは覚えてないってか？
「ま、そんなこたぁどうでもいい。とりあえずは…」
「ちょっ、待って！レイ！」

「…お、おま…え…」
「…」
シャッターの方へ向かうと、途中に男が血をドクドクと出しながら地に伏せていた。

…ウマソウ。

「…」
「がっ⁉？」「痛い、痛いよ…なんで…」
男の脇腹めがけ、蹴りを入れた。
女の方には、頭を踏みつけてやった。
「…じゃあね、精々、惨たらしく、死ね」
男達を放置してシャッターの方へ向かう。
やるべきことは…

「レイ！お前いい加減に…」
「煩いよ、とっとと逃げろ。お前に何もしないのは、せめてもの慈悲だ」
「は…？」
「よし…よいしょお！」

シャッターを、思いっきり、開けた。
開けた上で、上の方の固定するための器具を使って、開いたままにする。
「ちょっ⁉？レイ⁉？何して…」
「逃げろ、って言ってるじゃん。それじゃ…死なないように気をつけて。これから、上の一階をつなぐ階段のとこにあるシャッターもそう

するから」
「はっ…？」
「これは報復だよ。
ユウちゃん……じゃあね、バイバイ」

「レイ…痛っ⁉？」
振り返らずに、上の方へ走る。
後ろで南雲の叫びが聞こえた。
多分、あの男がゾンビ化して、それに噛まれたか？
まあ、どうでもいい。逃げなかったあいつが悪い。

「…？なんで、涙なんて出てんだ？」

とにかく、あのシャッターもだ。あれも開放してやらねえと。
南雲の奴なら普通に生還しかねない。

「はっはっ……よし、ここで…」
あの、僕が締め出されたシャッターのところまできた。
ロックを解除して上に持ち上げ固定した。
外には奴らが結構な数いた。
バリケードは既に壊されていたが。
「よし…これなら通り抜けれるか。そーれっ！」
近場にあった机を、ゾンビの群れの中に向かって投げつける。
それによりできた空間へ向かって走り抜けた。
階段のところから五メートルほど離れた後、階段の中へ向かって爆竹（なぜか物資の中にあったもの）を投げ込んだ。
その数秒後に激しい音がなって、ゾンビ達はそっちの方へ向かっていった。
「よし、後は…早く上に行かないと。アイツラが、めぐねえの所に行くかも…」
外では、雨が降っていてアイツラは濡れるのを嫌がって校舎内に集

まっていた。
なら、上に行っている可能性もある。
これで間に合わなかったら、もう生きる意味なんてないしな。
善は急げだ。早く行こう。
めぐねえの元へ。

カチャン

「ん…？なんだこれ？…折りたたみナイフ？なんでこんな所に…」
向かっている途中、折りたたみナイフを蹴飛ばしてしまった。
何処かで見たことがあるものだった。
「…どこで見たんだっけか。まあいいや…とりあえず使えるものは使わせてもらおう」
バットじゃ心許ないし。
それよりかは殺傷力のあるナイフの方がいい。
「…どんどん上に集まってるな。早く行かないと…」

……え！早……こっ…
…メ、みん…先…
上の階に上がると声が聞こえた。
めぐねえの声だった。
あの日に、聞いたことのある声の人もいた。
窓からあの人達が見えた。ゾンビ達に追われている。
前の方に3人、後ろに1人。
めぐねえが後ろだった。
その後ろには、さらに多くのアイツラが。めぐねえが必死に抑えているが、いつ噛まれてもおかしくない。
足に力を込めて、駆ける。道中にいたアイツラは、ひたすら避けて

走る。

「めぐねえ！」

めぐねえ達のいる通路にたどり着いて真っ先にそう叫んだ。
アイツラもこっち振り向いたし、めぐねえ達もこっちを振り向いた。
めぐねえ以外の３人は、その先にある扉に入った所だった。
いや、それよりは先にめぐねえを襲いかけてるアイツラの処理だ。
「レイ君！無事で…」
「色々あると思うけど後でお願い！ひとまず逃げて！こいつらは俺がやる！」
一瞬戸惑いを見せていたけど、めぐねえは直ぐに走ってあの３人がいたところへ向かってくれた。
「そこの人！開けたままにしておいてもらえると助かります！」
「お、おう！」
その叫び声に反応したのか、また少しずつ、めぐねえ達の方へ向かっていった。

「わっ！」

思いっきり、声を腹から出した。
同時に、ガラスなんかも割った。
これでまたアイツラは全員がこっちを向いた。
音に反応する体質なのは本当に救いだね。
これで目の前の生体だけに反応だったら本当にやばかった。
チラッとめぐねえ達の方を見るとみんな避難が終わっていた。
よし、それじゃあ、こいつら殺せば終わりだ。
目の前にいた二体の間を潜り抜けて片方の首筋にナイフを突き立て、勢いよく横へ振り抜く。その勢いのまま今度は目の前に来ていた奴の頭に突き立てる。

そいつの体を蹴飛ばしてさらに奥にいた奴にぶつけて転ばせる。
転んだ奴を踏みつけて前方に跳んで、まだ先にいた奴の顔にナイフを突き立てた。
扉まで後二メートルくらい。アイツラは数体。ならわざわざやる必要はないかな。
「そっち入るんですぐ閉めてくださいねっ！」
「へ？」
倒すことをせず、間を縫って走り抜ける。
それで扉の中に入ると同時に、そこにいた人が扉を閉めてくれる。
「あっぶねえな！」
「すいません。でも、ナイスです」
ツインテールでなぜかシャベルを持っている人から、スライディングして入ったことに愚痴を言われたが、この際は許してほしい。
「ふー、間に合ったー」
「お前…確か…」
「ん？どっかで会いましたっけ？あ、めぐねえ。久しぶりです」
「レイ君…良かった……無事だった…」
「めぐねえこそ、無事で何よりです」
「めぐねえ！良かった…無事で…。あ、そっちの人…」
なんか、みんなと会ったことあるらしいけど、覚えてない。
「何はともあれ、みなさん無事で良かったです。…少し、休みたいんですが、何か休める場所に行かせてもらえると助かります…」
「え、ええ。わかったわ。みんな、この子をバリケードの向こうまで案内しましょう」
「「はーい」」
いつのまにかめぐねえ以外に3人まで揃っていた。こんなに生き残っていたのか。
にしても…つか……れた……。

6話　由紀姉は遠足をご所望です

「以上、丈槍レイの地下生活でした。これにて閉幕」
あの忌々しい記憶を遡りながらりーさんに説明する作業は終わった。
所々フィクションを織り交ぜているのは、まあご愛嬌だ。
言わない方がいいことはちゃんと理解して話す部分を選んでいる。
さてさて、この状況どうしたものか。
「さて、りーさんどうします？」
「どうって？」
「決まってるじゃないですか。俺を学園生活部から追い出すかどうか、ですよ」
フェンスを乗り越え、フェンスの外側に立つ。
少し足を外へ運べば屋上から地面へ真っ逆さまだ。
確実に死ぬ。

りーさんが選べば、僕はこの先に身を投げることになる。

「そんなの…」
ああ、困らせてしまってる。
でも遅かれ早かれ、いつか直面してもらうべきことだ。
「俺は発症を薬で抑え込めれましたが、完全に治ったとは言えません。いつまた発症するかわからない。そんな俺を…学園生活部に、皆さんの側に置くのは、とてもとてもリスクが高いです。安全を取るなら、俺を追い出すべきです。流石にめぐねえの為だけに、みなさんを、めぐねえを危険に晒したくないですから」
例えどんな返事をされたとしても、覚悟はできている。
そもそも、その覚悟でここに来たはずだ。…多分。

いやだって、記憶が曖昧なんだもん。

「そんなの…決まってるじゃない」
　辛そうな顔をしながらりーさんが言葉を紡ぐ。
「…もちろん、レイ君には居てもらうわ」
「へ？」
　だいぶ予想外な答えが返ってきて、素っ頓狂な声をあげて呆けた顔をしてしまった。
「な、なんて？え？りーさん？俺を学園生活部に居ていいと？」
「ええ、そう言ったのよ？聞こえなかったかしら？」
「いやいや、りーさん。自分が何言ってるかわかってます？」
「ええ、めぐねえが大好きなレイ君にはずっと学園生活部に居て、由紀ちゃんのお世話をしてもらって、私たちの生きるお手伝いをしてもらいます」
「は、はぁ…」
　要は、いつも通り雑用をこなしてくれ、ってこと？
「…いいんですね？若狭悠里さん。後悔…しませんね？」
「当たり前じゃない。…知らないだろうけど、私達はみんなレイ君に感謝してるのよ？」
「感謝？なぜですか？」
「それは…ふふ、秘密よ」
「えー…」
　りーさんは悪戯っぽい笑みを浮かべた。
　それを見てこれ以上聞いても無駄だと悟って、大人しくフェンスを再度乗り越えて内側へ入る。
「レイ君、ごめんね…辛いことを…」
「いえ、構いません。寧ろ話す時期が早まっただけです。それよりも、俺を置いてくれると言っとくれて、正直嬉しいです。またずっとめぐねえの側にいられるんですから。みんなの生きるお手伝いもできる」
「そう…。それにしても、本当にとても冷たいわね」
「まあ今まではできる限り隠してましたから」
　りーさんに手首を触られて、ヒンヤリとした感触に驚かれる。
「さて…それじゃあ…お説教ね」

「え？」
　生徒会室まで来たところでりーさんが突如そう言った。
「え？じゃありません。学園生活部にの規則を忘れたかしら？頭のいいレイ君はすぐに覚えていたはずだけれど？」
「え？え、いやーそのー…」
　冷や汗を垂れ流しながらゆっくりと後ずさりをして逃げ…
「逃げちゃダ・メ・よ？」
「は、はぃ…」
　有無を言わさず腕をガシッと掴まれた。
　ああ…わが人生ここで潰えたり…

　その後、トイレの為部屋を出た由紀と胡桃は生徒会室で正座させされているレイを見たとかなんとか。

　次の日
「おはよーございます…」
「おはよう、レイ君」
「おはよー」
「おはよう」
「おはよーレー君！」
　寝ぼけた状態で生徒会室に来ると、みんな揃っていた。
「…とうとう由紀姉より後に起きてしまった…」
「どういうこと⁉？」
「そのままの意味だよ。それにしても…由紀姉、やたら上機嫌ですけど、何かあったの？」
　そういうと、不敵に笑みを浮かべながら由紀姉は立ち上がった。
「みんな！遠足！行こ！」
「「「遠足？」」」
「そ！もう遠足の時期じゃん？だから！え・ん・そ・く！」
　はぁ…そんなこと言われてもなぁ。

「ふっふっふー。私気づいたんだ。
学校を出ないで生活するのが学園生活部！でも！学校行事なら学校を出たことにならない！」

由紀姉はドヤ顔でそう言った。

「「「・・・」」」
しかし。俺たち全員が黙ってしまった。
「よね？」
「…」
「よね？」
「…（メソラシ）」
「よね？」
「さあ…」

りーさんは黙って考え、くるみさんは目をそらし、俺は疑問形で返した。
「め、めぐねえ！」
「そうねえ…いいとは思うけれど…」
「いやいや、おかしいだろ。遠足って部でやるもんじゃないだろ」
「くるみちゃんはあたまかたいね！わたしたちの後に道はできるんだよ！」
「ぬぅっ…」

相変わらずの破天荒さ。
由紀姉らしいや。
「それなら提出用の文章を作りましょう。めぐねえに見てもらわないと」
「むっふっふー…」
りーさんがそう言うと、またもや由紀姉は不敵に笑った。
「じゃーーん！」
机の下から、なにかをとりだした。

よく見ると『学園生活部による遠足』と言う題名の文章だった。
…相変わらず遊ぶことになった時の準備の速さよ。
「そうね、これを見せてもらえたらいいわね。由紀ちゃん、それもらってもいいかしら？」
「うん！はい、めぐねえ！」
めぐねえが由紀姉から紙を受け取ってそれをしばらく眺める。
「うん、オッケーよ」
「やったー！」
どうやらいいらしい。
てことは、色々と考えないとね。
由紀姉は喜びながら授業へ向かっていった。
「そうだなぁ…それじゃあ色々と考えないといけないですね」
「だな」
「そうねぇ」
「行くのはいいのだけれど…足はどうする？」
「車…が一番いいですね。歩きや自転車は流石に危なすぎます。運転…は、どうしましょう。流石にめぐねえは無理だと思います」
「え、そんなことないわよ。大丈夫よ」
「いやいや。めぐねえ。アイツラを轢き殺すことができます？」
俺がいった一言で、全員が一瞬固まった。
「めぐねえは、優しいから、きっと躊躇してしまうと思います。それに、めぐねえには手を汚して欲しくないです。後は…純粋にめぐねえ運転が時々怖いので」
「うっ…」
最後の一言がめぐねえの心に突き刺さったような音が聞こえた気がしたが、まあ許してほしい。
めぐねえに手を汚して欲しくないのは本当だし。
「ゲームならなぁ…なんとかなるとは思うけど」
「俺、一応運転のやり方はめぐねえの見よう見まねですけど大体分かりますよ」
「そうねえ…そもそも５人乗れますか？」

「つ、詰めればなんとか…」
まあ、最悪俺がトランクの中なり車の上になり乗ればなんとかなるか。

～2日後～
「ふふん、レイとは初めてだな」
「そうですね」
「それじゃあ行くよー。よーい」
由紀姉の掛け声で、くるみさんと共に構える。
「どん！」
同時に走り出す。
廊下を、一心不乱に走る。
少しずつ由紀姉のいるところまで近づいていく。
そして横を走り抜けたと同時にカチッと言う音が聞こえた。
「はあっはあっ…。……まじですか。まけたぁ…」
「ふふーん。鍛え方が違うさ」
肩で息をしながら見上げると、そこにはすでにくるみさんがいた。
さすがは元陸上部…。
いやでもさ、シャベル持った状態に負けるとは思わなかった。
「さてさてタイムは…」「俺のタイムも…」
「ん」
「あちゃぁ…タイムだだ落ち…」「うわっ…タイムくそ落ちてる…」
これはヤバい。鍛え直さないと…。
「ねえ、2人とも。シャベルとか色んなもの持ったままだけど…」
「「あっ」」
そして由紀姉に指摘され、俺たち2人とも素っ頓狂な声をあげた。
てかくるみさん忘れてたんかい。
「もう、くるみちゃんのシャベル愛には妬けちゃうよ。もうシャベルと結婚しちゃいなよ」
「なっ。いやほら、道具は体の一部になるまで使いこなすって言うだ

ろ。奥義開眼ってやつ？」
「どうする？シャベルなしの計る？」
「いや、いい。これならいける」
突如真面目なことを言われてくるみさんは赤面していた。
ああいう由紀姉の天然はセコイと思うんだ。

～教室～
現在はりーさんとくるみさんと共に作戦会議中。
「玄関からは無理だな」
「3階から降りれば駐車場まで１５０メートルだけれど…シャベルを持って全速力よ？いける？」
「余裕余裕。さっきタイム計ったし」
「どうしましょうか。1人より2人で行った方が安全ではありますが…」
「そーだな。んじゃあたしがレイの周りを蹴散らすから、レイが探し出して運転するでどうだ？」
「そうですね。めぐねえの車知ってるの俺だけですもんね。それじゃあそれで行きますか」
「おーけー」
「それじゃあ…くれぐれも気をつけてね？」
「はい、りーさんも由紀姉とめぐねえをお願いします」
りーさんからめぐねえの車の鍵を受け取って、改めて体を解す。
「んっ…よし。それじゃあ玄関に着いたら連絡ください。そしたら俺たちもいくんで」
「わかったわ」
そうしてりーさんと別れた。
「さて…スイッチ切り替えて行こう…」
軽く頬をパチンと叩いて気合いを入れ直す。
「それじゃあ再確認しときましょうか」
「おう」
「くるみさんから先に降りて、俺は降りると同時に走って行って車ま

で全速力で行きます。くるみさんは追い抜いてくれて構わないんで進行方向にいるアイツラを駆除する」
「ああ。でも流石に全部はキツイぞ。明らかに邪魔だとわかる奴だけ。それ以外はあたしが引きつけるだけ。お前はその間にできる限り早く車を出して運転する」
「ええ。まあ見よう見まねで覚えてるだけなんで少し時間がかかるかもですけど」
「構わねえさ。あたしを轢かなかったら」
「大丈夫ですよ。そんなヘマは多分しません」
「多分じゃダメだぞ？」
そんなくだらないことで笑いあっていると、持っていた携帯が二回振動して止まった。
りーさんからの合図だ。
「よし…それじゃあ」
「いくか」
窓枠にかけてある緊急避難ハシゴをくるみさんから先に降りていく。

くるみさんが先な理由は、まあ色々察してください。
下から着地する音が聞こえて、俺も飛び降りて着地する。
ちょっと足が痺れたけど、まあこの際はいい。
「よーい」
「ドン！」
事前に決めていた掛け声を言って、同時に全力疾走をする。ゾンビの間を潜り抜けていく。
車まで、ひたすらに走る。視界の端の方でくるみさんが引きつけてくれているのが分かった。
くるみさんを信用してゾンビのことは考えず車まで走り抜く。
「はあっはあっ…着きました！」
「おう！」
鍵を開けて運転席に乗る。記憶をたどりながらエンジンをかける
ブロロロ…とエンジンがかかってくれる。

「よし！」
「わり！少し時間食った！」
「いえジャストです！」
くるみさんが助手席に入ってきた。
それを確認してすぐに車を出す。道中にいるアイツラは遠慮なくぶつける。玄関に辿り着いてくるみさんが降りて玄関のところにいるはずのみんなに向かって叫んでくれる。
そして続々と車に入ってくる。
「よし！出しますよ！」
「ま、まってシートベルト」
「揺れますからねぇ！」
由紀姉が何かを言っていたが関係なく車を発進させた。
出した瞬間に目の前にいたアイツラを轢いたが、まあいい。
これから遠足なんだから悪いことは考えないほうがいい。

「それじゃ、遠足に」
「「「「しゅっぱーつ！」」」」
こうして由紀姉の掛け声と共に学園生活部第一回目の遠足が執り行われた

7話　いざ遠足！

「やっぱり外はあまりいないですね」
「レイ君の言う通りだったわね。それにしても…私より運転うまい…」
助手席からそんなめぐねえの落ち込んでる声が聞こえた。
いやまあ、そんな声ださなくても。
見様見真似だからそんなに上手くないと思うけど…。
「やっぱりレイはハイスペックだよ。勉強できて運動できて、ましてや見てただけで車の運転できるとか」
「そんなことはないですよ。自分は皆さん以上に時間があったわけなので。みなさんが別のこと…部活とか、それらに時間かけてたことを全部勉強とかに費やしてただけです。めぐねえに褒めてもらいたくてずっとやってたんですけどね。俺がいい成績をとると自分のことのように喜んでくれるめぐねえを見て俺も嬉しくなって、それで余計に頑張ってたんです。なぜか俺以上にはしゃいでいましたけど」
「やっ！ちょ、レイ君！」
隣から非難の声が上がったが別にいいでしょ。自宅でのめぐねえは結構天然で可愛いからもっと普及するべきだ（真顔）
「っと…ここも通行止め…」
「やっぱり多いわね」
「バックするんで由紀姉とりーさん、後ろ見ててください」
「わかったわ」「はーい！」
ゆっくりバックミラーを見ながら慎重に来た道を戻っていく。
交差点まで来たところで一旦車を止めた。
「えーと…ここもダメだから…」
「次は…左から回る方ですね」
「想像以上に大変ね…」
どうも爆発とかで塀が崩れたりとか電柱が倒れているだとかが多い。
「もう少し、もう少し…はいストップ」

「フーッ…つかれた……。で、あとどれくらいですかね？」
「この調子なら…明日の朝に着くくらい？」
「でも…ここまですんなり来れたのは意外でした。もうちょっと手こずるかと思ってたので…。そんじゃ、引き続きドライブ続けますよー」
「おー！」
　由紀姉だけが俺の適当な掛け声に全力で返してきてくれた。由紀姉はこう言う時に無理にでもテンション上げてくれるから頼もしい（本人は自覚ないと思うけど）。
「しばらくここを真っ直ぐで…」
「わかりました」

「…っ！ストップ！」
「え⁉？」
「わっ⁉？」
　ゴスっ
「あだっ⁉？」
「ど、どうしました胡桃さん？」
　後ろから突然言われて急ブレーキをかけた。おかげで1人盛大に頭をぶつけた音がした。
「あ…いや、ごめん。なんでも…ない」
「？」
「あれ…もしかしてここ、くるみちゃんの家？」
　由紀姉が外を見ながらそう言った。釣られてみてみると、確かにプレートに恵飛須沢と書いてあった。
「顔だしてきたら？随分と帰ってないじゃない」
　由紀姉はそんなことを言った。
　悪気は一切ないと思う。だって由紀姉だし。
　でも、あまりにも酷だと、内心思った。
「でもほら、今日帰るって言ってないし」
「いーじゃない別に」

「……。そうだな、ちょっと顔出してくる」
そして胡桃さんは家へ行くことを決めた。
辛くない筈がないのに、胡桃さんは確かめる方を選んだ。
「(やっぱりここにいる人、みんな、つよい。どっかの誰かと違って…)
胡桃さん、俺も行きましょうか?自分の娘が男と共に過ごしてるって親御さんからしたら場合によっては発狂ものでしょう」
「いやいいわ。あたしの両親はむしろごりごり押してくるから余計めんどくさくなるし」
「りょーかいです」
軽く言葉を交わしたあと、胡桃さんは自分の家へ入っていった。
「…自分の家、家族…か」
最初に思い浮かんだのは、ずっと育ててくれた母さんとめぐねえ。父親はよくわからない。いたと言うことは覚えているけれど、どんな顔か、どんな人だったかは覚えていない。
「…あ、帰ってきた。よかった、無事で…」
「もしかしたらレー君を女の子って紹介してたりして」
「んなバカな」
いやまぁ、確かに俺が親なら同性だけの方が安心するわな。なにも疑わなくていいし。
「おかえりーくるみちゃん」
「おう」
「あ、おかえりって変かな?家からおかえりって」
「いんじゃね。ただいま」

〜夜〜
「ｚｚｚ…」
パシャ「ふふ…相変わらず可愛いわね」
車の後部座席には由紀と零が肩を預け合うようにして寝ている。
助手席にはめぐねえが乗っており、外には胡桃とりーさんが見張りを

していた。
　しばらくしたらめぐねえ、零と交代だろう。
「もしかして…って、思ったんだよな」
　外で胡桃が何気なく口を開いた。
「やばいのは学校の中と周りだけで外じゃもう救助が始まってるんじゃないか、みたいな」
「そうね、私もちょっと思ってた」
「ヘリがさ、ばばばって飛んできて自衛隊？国連？の人が大丈夫かー。よく頑張ったなーって。そんな…ことを、思ってたんだけど、やっぱり現実はそんなに上手くいかないよな」
「まだわからないわよ。きっとヒーローも頑張ってるのよ。今は東京で救出作戦をやってるの」
「そっかー」
「救出した人を集めて大きなバリケードを作って、そこから遠征隊を募って…」
「じゃあヒーローもうちょっとかかるかなぁ」
「そうね、ヒーローさんあとちょっと……」
「ヒーロー早くくるといいなぁ」
　そんな他愛ない、現実から離れた理想を互いに話していた時だった。

「あっまーーい！」
「え？」「わっ」
「ヒーローなんて待ってるもんじゃないよ！ヒーローはなるもんだ！」
　それは由紀だった。車の上に立ちそんなことを大声で叫んだ。
「お、お前、どっから聞いてた？」
「ん？ヒーローがくるとか来ないとか？」
「ほっ…。たっく、ヒーローなるってどうするんだよ」
「人はね、誰だって誰かのヒーローになれるんだよ！ダリオマンが言ってた！」

「漫画じゃねえか！つか、レイはどうしたよ」
「めぐねえがいつの間にか横に来てて、それでめぐねえが膝枕してめぐねえも寝てる」
　由紀がそう言い、３人は一斉に車の中を見た。
　そこには由紀の言う通り、膝枕されているレイと心地好さそうに寝ているめぐねえがいた。
「ふふっ…可愛いわね」
「このこと知ったら、２人とも赤面するだろうなぁ。…あ、そういえばレイのやつの携帯が…」
「どーするの？」
　胡桃が何か悪い顔をしてレイの携帯をポケットから取り出した。
「こーするんだよ」
　パシャッという音を立てて、２人の写真を撮った。
　そして…
「よし！これでレイへのドッキリの準備は完了だな！」
　そこには先ほどの光景が背景と化したレイの携帯があった。
　それを見てみんな笑いを堪え切れなくて――――２人を起こしては悪いので静かに――――笑った。
「ねーねー、みんなにとってのヒーローって誰？」
「あん？なんだよ急に」
　そんな中、突然由紀がそんなことを言う。
「さっきヒーローのことを話してたでしょ？だから、ついそんなことおもっちゃって…」
「私にとってのヒーロー…か、待て、それ恋バナじゃね？」
「あらいいじゃない。恋バナ。そーねぇ、私にとってのヒーローは……やっぱりレイ君、かしらね。ずっと自分のことを顧みず、私を、私たちを助けてくれてる」
「りーさんも⁉？私もレー君なんだよ！レー君は、私が何言っても嫌な顔せずに、ちゃんと付き合ってくれて、無下にしないでくれて、いざという時には助けてくれて……本当に、優しくてかっこいい！
「ヒーロー、か…。あたしは、やっぱり……」

胡桃は、大学の先輩を思い浮かべていた。
ただ、ヒーローというよりは、いつも目で追っていたというのが正しいと感じていた。
「…やめだやめだ。あたしにはこんなの似合わねえよ」
「もー、照れ屋だなぁくるみちゃんは」
「よく言うぜ。由紀もレイの話する時異様に元気になるくせに」
「へっ…」
胡桃に指摘された瞬間、由紀の顔が真っ赤になったのは言うまでもない。

～次の日～
「ｚｚｚ…」
「ほら、レイ君。起きて。もう出発するわよ」
「レイ君がここまで寝てるのは珍しいわね…」
現在は朝の7時。レイ以外の皆がもう起きていた。
「…んぁ…慈さん、おはよう…ございます……」
「おはよう、レイ君。ほら、みんな起きてるわよ」
「みんな…？……っ！すいません！寝坊しました！」
「大丈夫よ、ゆっくりとご飯食べてから出発しましょう」
「わかりました、慈さん」
レイは乾パンと水という簡易的な朝ごはんをポリポリと食べた。
その最中に時間確認のために携帯を開いた瞬間に吹き出したとかなんとか。
「はい、出発しますよー。準備はよろしいので？」
「「はーい！」」
こうして学園生活部主催の遠足二日目は元気よく行われた。

「とうちゃーく！」
　あれから1時間ほど運転し、目的地だったショッピングモールへ着いた。
「はしゃぎすぎよ」
「遠足で熱出すタイプだな」
「そんなことないよ！ないもん！」
「ほら、もう赤くなってる」
「まあまあ」
「でも、本当に心配だわ…」
「何を、めぐねえだって…」

「…やっぱり中には大量にいるよな」
　他の４人が和気藹々としてる中、ショッピングモールの中にいるアイツラの気配が学校レベルでいて、軽くげっそりとなってしまう。
「平日だからか、そんなにいなかったな。万が一強制帰還とか考えてたけど」
「アイツラ、みんな学校や仕事へ行っているんでしょうね。まるで生前の記憶があるかのように」
「けど今はそのことを考えても仕方ないわ。久しぶりのショッピングなんだし、楽しみましょ？」
「そうですけど…」

「ねえみんなー！早くー！」

「…そうですね、由紀姉の面倒も見ないとですね」
「ふふ、それじゃあ行きましょ？エスコート、お願いするわねレイ君」
「はい、喜んで」
　りーさんにそう言われて冗談を交えて返す。
　そして俺たちは入り口まで慎重に近づく。
「開けっ放し？おやすみでーすか？こーんにちわー！」

「由紀姉、あんまり大声出しちゃダメですよ」
「そーだぞ」
「え？どうして？」
「由紀ちゃん、今コンサートのイベントやってるみたいだから、静かに、ね」
「はーい！」
「しーっ」
　めぐねえに言われて由紀姉はちゃんと静かにしてくれる…と嬉しいんだけどね。
　まあ、なんとかなるでしょ。
「…っし、準備オッケーです。それじゃ…行きましょうか」
　左手にタオルをぐるぐる巻きにして固定し、ズボンの右ポケットにいつも使ってる折りたたみナイフを。
　準備が完了してみんなで中へ入った。
「わー、広ーい！」
「やっぱりいるわね」
「これくらいの数なら問題ない。あんまり音立てずに着いてきて」
「わかったわ」
「胡桃さん、あまり無茶をしないでね？」
「わかってますよ、めぐねえ。それじゃあ…レイ、後ろは任せたぞ」
「合点承知です」
　その後、胡桃さんの小さな掛け声でみんなで一気に走る。
　止まっているエスカレーターを駆け上り、シャッターが壊れていない場所を探す。
「くるみさん！そこの店の中なら安全です！」
「オーケー！追ってきてる奴ら足止めしといてくれ！シャッター閉めてくから！」
「わかりました！」
　みんながCDショップの中へ入ったのを確認して、周りから湧いて出てきたアイツラを中へ入れないように、かつ噛まれないように立ち回る。

「よし！戻ってこいレイ！」
「りょーかい、ですっ！」
アイツラを振り切って全速力で店の中へ入る。
スライディングして入ったと同時にくるみさんがシャッターを閉めてくれる。
「はぁはぁ…お、お疲れ…様、です…」
「おう、ありがとな、レイ」
「い、いえ、この…くらい。はぁ…」
念のため中の安全確認もしてくれていたようで、ここはしばらく安全だ。
呼吸を落ち着かせて、周りをよく見てみると正確にはＣＤショップというよりは左右の店とつながっている。他は全部シャッターが閉められていて、ここのＣＤショップの部分だけ開いていたらしい。
ずっと奥の方を見ると１００均のような店から雑貨まである。流石に服とかはないか。
「りーさん、レイ。あたし地下へ行ってくるよ」
「食品売り場…でしたっけ？もう腐ってるんじゃ？」
「缶詰欲しいだろ？だからその辺余ってるのを回収してくるよ」
「一人で大丈夫？レイ君…は疲れてるから、めぐねえとでも一緒に…」
「大丈夫だよ、安全第一でやってくるから。そんじゃ、レイ。みんなのことは任せた」
「任されました…」
そうして、胡桃さんはシャッターの外へ出て行った。
「はーっ…、……うん、特に周りにもいないですし、しばらく気兼ねなくショッピング楽しめそうですね」
「ほらほら！レー君行くよ！めぐねえも！」
「はーい」
その後、しばらく由紀姉のショッピングにめぐねえと共に付き合うこととなった。
「…胡桃、大丈夫かしら？」

「くるみちゃんまだかな？」
「そうね、もう少し待ちましょ」
しばらく経って、一旦りーさんと合流した。てかりーさん、演歌なんて聴くんだ。結構渋いですね…。
ガララ……。
「フーッ、助かったー。やっぱりレイがいるといないじゃ違うな…」
「お帰りなさいくる…み⁉？」
「犬⁉？」
「ワンちゃんだ！」
「あらあら…どこから…」
「あっこいつ！」
シャッターを開けて胡桃さんが戻ってきた。
犬を1匹お土産を引き連れて。
てか、なぜに大和煮の缶詰咥えてんの？
「ワン！」
「はっ……。ふふっ。うーーワンワンワン！」
「ワンワンワン！」
「「通じ合ってる⁉？」」
「ゆ、由紀ちゃん…」
「ワオーーン！」
「待て待て待て！」「めぐねえも見てないで止めて⁉？」
由紀姉がワオーンとか言いながら犬に抱きつこうとしたのを、俺と胡桃さんで無理やり止める。それを微笑ましくめぐねえが見ていたが手伝って欲しかった。だって異様に暴れるんですもん、この犬姉。
「ご、ごめんね。ちょっとまってね……。はい、どうぞ」
「あっ！大和煮！」
りーさんが犬が咥えていた大和煮の缶詰を開けて犬の前に差し出した。
するとガツガツと食べ始めた。大和煮いいなぁ…。
「りーさん早く…」
「ちょっと待って…」

大和煮という豪華な餌に夢中になっている犬をりーさんが後ろから抱きかかえた。
気配的にアイツラの仲間にはなってないから大丈夫だとは思うけど、噛み跡がないかどうか確かめる必要はある。
「フーッ、大丈夫ね。噛まれてないわ。はい、由紀ちゃん」
安全なのを確かめた後に、由紀姉へ犬が献上された。
その後は心が通じ合ったのか共にのほほんとした顔になり、由紀姉はそれはまあ喜んだ。
「くるみさん、あの子どうしたの？」
「地下でばったり会ったんです。そのまま付いてきたみたいで…」
「飼い主さんはいた？」
「いえ、いなかったです」
「ねえねえレイ君！この子の名前何かな？」
「さあ、首輪にでも書いてるんじゃ？」
「うーーワンッ！ワンッ！」
「うわっ！何何⁉？」
「もー、レイ君何したの？」
「何もしてないですよ！」
首輪を確認しようと手を近づけた瞬間、犬に吠えられた。
さっきのような和気藹々としたような吠え方ではなく、敵対心むき出しの吠え方だ。
ちょっとでも手を近づけたら噛まれそう。
…昔から動物に嫌われるよなぁ。俺は好きなのに……。
「た…ろう、まる、太郎丸！」
「わぉーん」
「そっか！よろしくね、太郎丸！」
「ワン！」
「納得いかない……」
「気、気を落とさないで、レイ君」
「そーそー。気が立ってるだけかもしれねえぞ。由紀はただ単に同族と思われてるだけ？だと思うし」

「まあ、いつか慣れてくれるわよ」
　めぐねえやみんなに慰められたが、やっぱり納得はいかない。
「…よし、ここでの買い物はみんな済んだかしら？」
「「「はーーい」」」「ワン！」
「それじゃあ上の家電屋さんへ行きましょう」
　こうして次は上の階だ。
　予定としては家電を見た後、服、上の方まで一通り生存者がいないかどうかの確認。その後念のためもう一度俺とくるみさんだけで地下の食料品売り場を見て終わり、といい流れだ。
　家電屋では由紀姉が防犯ブザーを鳴らしたがってりーさんにこってり絞られたりとか、面白い場面はちょくちょくあった。
　今は服屋だ。みんなが色んなものを試着していっている。
「レー君！これどうかな！」
「…馬子にも衣装…」
「へ？なんて？」
「なんでもないですよー。うん、可愛いんじゃないですか？」
「やったー！」
　由紀姉が着てきた衣装は、まあ、うん。小動物的な？そんな感じの可愛さだった。
「レイ、あたしはどうだ？」
「…かっこいい？ですかね？あんまり服に関してはわからないですけど…」
「レイ君、私はどうかしら？」
「大人なお姉さんって感じがすごいです」
「あら嬉しいわね」
「普段の家のめぐねえより大人っぽいです」
「ちょっ、レイ君！」
　試着室の中からめぐねえの声が聞こえた気がするのは、気のせいだろう、多分。
「ほらめぐねえ！レー君に見てもらわないと！」
「ちょ！ちょっと待って由紀ちゃん…。まだボタンとか止めきれてな

…」
「はいレー君！めぐねえどうかな！」
「きゃっ⁉？」
この時、ちゃんと着れていないめぐねえがカーテンの向こうから出てきて、ブラとか色んな、見えてはいけないものが見えてしまったが、俺は悪くない。悪いのは由紀姉だ。
思わず顔をそらしたから、そんなには見てないと思う…。

肌白かった。可愛かった、エロかったです（真顔）

「レイ君は服は見なくていいの？」
「俺はもう決めてますよ。これです」
めぐねえに言われて、すでに手にとっているジーパンと2着ほどのシンプルな色のみのデザインの服を見せる。
「相変わらずオシャレには興味ないのね」
「あんまりわからないですし。それにかっこいい服を選んでも似合わなかったら宝の持ち腐れですしね」
「あ！ねえねえみんな！水着があるよ！これも着てみようよ！」
由紀姉が水着売り場へ駆け寄ってみんなへそう言った。
……なんか嫌な予感がする。
「それじゃあレー君！感想お願いね！」
「やっぱりですか⁉？」
うん、なんとなく気づいてたよ。
普通の洋服の時からなぜかみんな俺に見せてくるからね、いや別に皆さん可愛いけどさ！
ちなみに、みなさんには悪いけどめぐねえの深い青を基調としたシンプルな水着が一番可愛かったです。
「……割と、外から集まってる…なんてことはないですね。シャッターって偉大だな…」

「大丈夫そう？」
「はい、安全に外へ行けるかと」
「わかったわ。それじゃあみんな、行きましょう」
「「はーい」」
そして俺たちは生存者がいるかもしれない最上階の方へ向かった。

「いっちばーん！とうちゃーく！」
「フーッ、やっとだ…」
「ワンワンワン！」
「太郎丸？」
「どうした？」
「ワンワンワン！」
どうしたんだろ、俺がちかづいて吠えるのはもう慣れたけど、何もないのに吠えるのは珍しい。
いや、何かあるから吠えてる…？
「…考えても仕方ないや」
とりあえず今は気にしなくてもいいでしょ。また何かあれば吠えてくれると思う。
ずっと吠え続けていたのを、りーさんとめぐねえが静かにさせていた。

ガタッ

「っ！」
「くるみさん…」
「ああ、物音…椅子を倒したような、音だったよな…」
「どうしたの？くるみさん、レイ君」
「めぐねえ、さっき椅子を倒したような音がしたんです。でも一階下にはアイツラはほとんどいなかったし、ここにもいる可能性はあまり考えられない…」
「なので、生存者がいるかもしれないです」

「もしそうなら助けないと、って話してたんです」
「…わかった、行きましょう。生存者がいるなら、助けないと」
こうして、物音がした方へ、俺たちは向かった。

頼むから生きててくれよ…！

「ここ…ですね」
「もしもーし！すいませーん！」
「誰も…いないですね」
「映画館だー！何上映してるんだろ…」
「…くるみさん」
「ああ…わかってる。…りーさん。めぐねえ。あたしら、中を確認してくるよ」
そうやってりーさんとめぐねえに伝えると、二人とも不安な顔になった。
「大丈夫？」
「気をつけてね…！」
「わかってる」
「みなさん、すぐにここから逃げれるように準備だけは整えておいてくださいね。万が一が、あるので」
それを言って俺とくるみさんは奥へと進んだ。
「…使わずに済む、って思ってたんだけど…」
「どうだ？レイ」
「…まずい、ですね。想像以上に大量にいます。まるで、下から逃げてきた人が集まって…それで立て籠もってたのかな？でも、中で感染した人がいた…って感じですかね」
「そう…か。どうする？」
中にあったバリケードが作られている一室に、耳を当ててみると、奴らの呻き声がたくさん聞こえてくる。

気配的にも、１０人とかそんなものじゃない。３、４０体くらいは少なくともいる。
でも、ここだけなんだ。アイツラの気配がしているのは。だから、もし生きている人が隠れているとしたら、ここだけ。だって、外からバリケードが作られている。中から外へ出た形跡もない。なら…。
「…他には、いても一体くらい、です。他を確認して、いなかったら、ここにいる可能性も、僅かですがあります。……どうしましょうか。正直言うと、一人いるかもわからない生存者のために、俺たち全員が危険になるのは、俺はしたくありません」
「…それでも、生存者がいるかもしれないなら、それに賭けてみたい。万が一の場合は、あたしが囮になる」
「何を言ってるんですか、囮なら俺がなります。俺より、胡桃さんの方が身体能力は上なんです。なら、俺より胡桃さんが生き残った方が、将来的にみて良いです」
「何言ってんだ！そんなの…」
「そんなこと言うなら俺も許さないですよ。くるみさんは大事な部員の一員なんですから」
「そりゃあたしもだ！それにだな！あたしたちがどれだけレイに救われてきたか！こんなところでレイを死なせたらめぐねえや由紀、りーさんにも顔向けできねえ！」
「俺もですよ！俺がどれだけみんなに救われてきたか！俺たちみんながどれだけくるみさんに救われてきたか！くるみさんを死なせたらみんなに顔向けできない！みんなを守ると言っておきながら守れないなんて！そんなのは死んでもごめんです！」
思わず感情的になってしまった。
でも、本音をぶちまけて、思わず笑ってしまった。
「ははっ、お互い考えてることは同じだな」
「ですね…。やっぱ、今ので中のやつら活発になっちゃいましたね。どうしましょうか？今生存者いるかどうか叫んだらヤツラ完璧こっちにきますよ？」
「上等！めぐねえもりーさんも由紀も、みんなを守り通してやる！そ

れにレイも手伝ってくれるだろ？お互い、片方を死なせたら殺されちまうしな」
「ですね」
それに、一人でも欠けたら学園生活部じゃないしね。

その後、例の部屋以外にいるアイツラを、あらかた片付けた。やっぱり他の部屋にはいてもせいぜい一匹か二匹くらいですぐに片付けれた。そして俺たちは例の部屋から少し離れた場所へ立った。
「それじゃあ…行きますよ」
「おう」

「スゥーー……生きてる人！いますか！助けに来ました！ヤツラは俺たちが引きつけます！だから！もしいるのなら！思いっきり手を叩いてください！それ確認できたら、再度俺たちが引きつけます！」
思いっきり、腹から声を出して叫ぶ。
下のアイツラに関しては、気にしていなかった。階段が苦手というのはわかってたから、少なくともここへは来れないだろう。
下にたむろしているだけなら、対処の仕方ならいくらでもある。
「……」
「聞こえない、な」
「わからない、ですよ。アイツラがあそこから出てきたら、鳴らしてくれるかも…」
「でも、でた瞬間に鳴らされても、一旦逃げなきゃ、だぞ？」
「分かってます…。さあ、くるみさん、来ますよ」
「おう、レイ。怯えんなよ」
「胡桃さんこそ」
冷や汗を垂らしながら、ギリギリまで待つ。

が、結局手を叩く音は聞こえなかった。

外から作られてたバリケードごと、扉を壊されて、中からアイツラ

が大量にでてきた。
「っ…いない、か」
「レイ！逃げるぞ！」
「はい！」
本気で走る。とにかく、めぐねえやみんなを死なせないために、とにかくみんなの元へ走った。
すぐにみんなが見えてきた。
「みんな！逃げろ！」
「アイツラ、めちゃくちゃいます！とにかく逃げますよ！」
りーさんとめぐねえだけは、直ぐに逃げる準備に入ってくれた。というより、直ぐ逃げれるようになっていた。
由紀姉だけは、何が何だかわかっていなかった。
「えっ…」
「由紀姉！早く！」
「わわっ⁉？」
胡桃さんに先導してもらう形で、俺が殿だ。
未だ戸惑っている由紀姉の手を取り、無理やり走らせる。
「胡桃さん、その先！あんまりいないです！」
「りょーかい！みんなちゃんと付いてきてくれよ！」
「くるみちゃん！りーさん！めぐねえ！レイくん！」
「大丈夫です！今はとにかく走ってください！めぐねえ！後ろは俺が気にするのでとにかく走ってください！りーさん！サイリウムか何か持ってたと思うので胡桃さんのサポートを！」
とにかく、全員が全力で走った。
「痛っ…」
「由紀姉⁉？」
「由紀ちゃん⁉？」
手を引いていた由紀姉から、そんな声がした。その瞬間に、全身の血の気が引いた気がした。
由紀姉を見ると、足首を抑えている。
どうやら、無理に俺の走る速度に合わせてしまったらしい。

くそっ、何やってんだ俺は！
「由紀姉、大丈夫？足くじいた？」
「う、うん…でも、だい…じょう、ぶ…」
「大丈夫なわけないでしょ！…っ、クソっ…。由紀姉、ごめんなさい。あとで謝るんで今は許してくださいね」
「へ？」
「よっと！」
「わわっ⁉？」
周りにヤツラがだんだんと集まっているのを見て、立ち止まるわけにはいかなかった。
だから、俺は由紀姉を抱えた。
いわゆるお姫様だっこ、ってやつだ。
「レイ！大丈夫か！」
「はい！こっちは大丈夫です！由紀姉意外と軽かったんで！よし、由紀姉、しっかり掴まっててくださいよ！めぐねえ！すいませんが後ろからどんな感じてきてるか教えてくださいね！」
「わかったわ！」
そこからもとにかく全力疾走をした。その間、しっかりと由紀姉は掴んでくれていたので落とす心配もなかった。
二階と一階を結ぶエスカレーターにたどり着いた。が、下にヤツラが集まってきていた。
「マズイですね、これ…。俺と胡桃さんならまだしも、後ろから迫ってて、俺の手も塞がってますし…」
「最短ルートで突破する。りーさん、下にライトばら撒いて」
「わかったわ」
そこでりーさんが鞄からペンライトをばら撒いて、そこに少しの間アイツラが集まった。
その隙を狙って胡桃さんが滑り降り、一番近くにいたアイツラを蹴飛ばす。
それに続くように、りーさんとめぐねえが、一番後ろを俺が走り抜けた。

「大丈夫！追ってきてないわ！」
「わかりました！」
安全だと思われる一室にみんなが入っていって、そこに最後に入ろうとして、めぐねえがアイツラが来てないことを教えてくれた。だからナイフも取り出さず、とにかく全力で走り、部屋の中へ入った。
「はっはっはっ……あーーつかれた……」
周りを確認すると、りーさん、くるみさん、由紀姉。そして、めぐねえ。
みんな無事だった。
よかった、本当に……。
でも、とりあえず……
「すい…ません、少しだけ…休みます」
「ええ、ゆっくり、休んで。お疲れ様、レイ君」
めぐねえにそう言われて、俺は安心して、ソファに横になった。

8話　生存者発見

後悔はしたくない。
常に前を見て進んでいたい。
振り返るのが怖いから
もし仮に僕の決断でみんなを死なせてしまうのが嫌だから。
後悔をしたくないから
精一杯努力をする。

そう決めたんだ。

「……」
「レイ君…」
「レー君…」
現在、学園生活部が逃げ込んだ場所――――キッズコーナーではレイがソファに寝かされていてその側でめぐねえと由紀が看病していた。
本当なら由紀も熱を少なからず出していて安静にしていないといけないのだが由紀が看病をしたがったため皆好きなようにさせている。
「どうしましょうか、佐倉先生」
「…そうね、本当ならレイ君が目覚めたり由紀ちゃんの熱が下がるのを待ちたいけれど…。くるみさん。レイ君が居なくてもなんとかなりそう？」
「大丈夫だと思います。隠密に徹すればレイを誰かが抱えてても大丈夫です。由紀はりーさんが連れて行ってくれますし」
「ただ、くるみと話したんですが、少なくとも由紀ちゃんの熱が下がるまではここで休んだほうがいいと思います。これで無理をして学校で病気になっちゃってもダメなので」
「……」

佐倉慈は考えた。何が一番最善手なのかを。
いつも生徒に任せていたことを、レイに任せきりにしてしまっていたことがこんなにも重いことだと改めて理解していた。
「…そうね、悠里さんのいうとおりね。それじゃあ由紀ちゃんの熱が下がるまではここで休みましょう。くるみさんも疲れているでしょうし。もしかしたらレイ君も目を覚ますかも…」
「はい」
「ふーっ、にしても、やーっぱり由紀は遠足で熱出すタイプだったな」
「えへへ…ゴメン…」
「ほら、レイ君は私達が看病するから、由紀ちゃんも横になって休んでて」
「はーい…」
くるみが軽口を叩くも、由紀は力ない笑みで返しただけだった。
そしてりーさんに促されるようにし空いている場所に横になる。
「とりあえず…はい、お水。佐倉先生もどうぞ」
「サンキュー」
「ありがとう、悠里さん」
全員がソファの空いている場所へ腰掛けりーさんが皆に水の入ったペットボトルを配る。
「……プハァ、生き返ったぁぁ」
「いなかったわね、生きてる人」
そんな中、誰もが触れようとしなかったことを、りーさんは言った。
「どうも来るのが遅すぎたみたいだ。あの映画館…子供が多かったんだ」
「…ずっと助けを待っていたのかしら」
「それとも、必死にあの中で生きて…」
「…いや、違います。めぐねえ、りーさん」
そんな会話に入ったのは――――レイの声だった。
「レイ君⁉？大丈夫なの？」

「はい、めぐねえ。ご心配おかけしました。りーさんも、くるみさんも。もう…大丈夫です。少し休んだらすぐに動けます」
「そう、よかった…」
「レイ君、違うっていうのは…？」
「そのままの意味ですよ、りーさん。くるみさんとも同じ見解なんですけど。あれはそうじゃない。まず、扉な外にバリケードがあったんです。普通、外から逃げてきたなら、バリケードは必然的に内側にあるはずです」
「ああ、そうなんだ。しかも周りのシアターにはアイツラはほとんどいなかったんだ。まるで一箇所に集められたかのように」
　レイは朧気ながらも起き上がり、映画館での様子を話し始めた。
　くるみも同じように補足をしながら説明をしていった。
「おそらく、あそこで立て篭もって生活をしていた、これは正しいです。だって他のシアターの場所にはペットボトルとか散乱してましたから。違うのは生存者の中に感染者が混じっていた」
「ああ、多分あのバリケードは中にいるやつらを閉じ込めるために作られたんだ。そして中にいたアイツラもあそこで過ごしていたにしてはあまりにも多すぎる。外から襲われたんじゃないのは確実だと思う。だってあいつら、階段が苦手でそうそう登れないのに。５階まであの量の人間が対処できないほど襲ってくるのは考えにくい」
「つまりは、感染にいち早く気づいた誰かが、言葉巧みに全生存者と感染者を同じ場所に…俺たちが開放してしまった一番大きなシアターに集め、閉じ込めた。そこからは早かったでしょうね。大きな部屋とはいえキャパオーバーしている部屋に一人、二人、三人と感染者が鼠算式に増えていくんです。全滅するまで半日と持たなかったでしょう。…久々に胸糞悪いもの見ましたよ。本当に…」
　レイは怒りを吐き出すかのように言葉を吐き捨てた。
　くるみは怒りではないが同じような感情を胸の内に秘めていた。
「あたしは、やだな。あんなのはやだ！」
「くるみ？」
「恵飛須沢さん？」

「だって、あそこにはきっと大事な人を守りたくて逃げ込んだ人もいたんだ！…その人を、守るためにさ…。
…もし、あたしが感染したら迷わないでほしい」
「な、何言ってるの恵飛須沢さん」
「そ、そうよ。いい加減なことを言うと怒る…わよ」
「…」
くるみの突然の言葉にめぐねえとりーさんは困惑していた。
唯一レイだけがそれを静かに聞いていた。
迷わないでくれ、とはそのままの意味。
もし自分が感染したら殺すのを迷わずやれ。
勿論くるみは感染する気なんかこれっぽっちもない。だが万が一、億が一ということがある。こういうことは早めに言っておくべきだと思ったのだろう。
「何言ってんですか、くるみさん。俺がそんなことさせませんよ。いえ、そもそも学園生活部の誰にも感染なんてさせませんよ」
「わぁーってるよ。あたしもしくじる気なんかこれっぽっちもねえ。だがもしもの時、迷うとあたしだけじゃない。みんなが危険になるかもしれないんだ。だから…約束してくれ、レイ、りーさん。…めぐねえ」
そしてくるみはりーさんとめぐねえの間に座り、笑いながら…乾いた笑みで、指切り、と二人に言い指を差し出した。
それに対し二人はぎこちない動きで指切りを交わした。
恐らくまだ迷いがあるからだろう。
「ほら、レイも」
「…ええ、わかりました。ですがやるときは俺です。他のみんなには絶対にやらせません。…いえ、まずそもそもくるみさんにそんなことをする事態に陥らせません。くるみさんの約束とともに、させてもらいます」
「おう、ありがとな。相変わらず頼りになるよ、お前は」
「くるみさんやめぐねえ、りーさんほどではありませんよ」
皮肉を言いながらレイはくるみと指切りをした。

「う…ん…」
そんな重い雰囲気を壊すかのような寝言が聞こえてきた。
その声の主は一人しかいない。
「お、由紀姉。おはよ」
「どうしたの？由紀ちゃん」
「んー…お腹、空いた…」
由紀のなんとも言えない緊張感のない言葉にレイもりーさんもくるみもめぐねえも笑ってしまった。
そしてもう大丈夫だろうと、確認しあった。
「そうねぇ。帰ってご飯にしましょうか」
「だな」
「ですねぇ。俺も腹減りましたよ」
「わ、私は…ダイエット…しなきゃ…」
「めぐねえはしなくても十分細いですよ」
「でも…」
めぐねえはスーツを履こうとして破れてしまったことがいまだに心に傷を負っているらしい。
知っているのは由紀だけだが。
「それじゃあ…帰りましょう。学校へ」

それから、基本的に隠密に徹し先頭をくるみが、殿（しんがり）をレイが務めキッズコーナーへ避難する時よりもスムーズに安全にデパートの外にある車へ出ることができていた。

「ふー、だっしゅーつ！」
「さ、戻りましょ」
「そうですねえ、早く帰って飯食って寝たいです」
「私は日誌書かないと…」
俺たちがそんな呑気なことを言っている中、由紀姉だけがずっとデパートの中を見ていた。
…？また何かあったのかな？

「由紀ー、いくぞー」
くるみさんが由紀姉に話しかけるも由紀姉はじっと中を見つめていた。
「由紀？」
「ねえ…今何か聞こえなかった？」
「え？」
突然由紀姉がそんなことを言った。
…？何も聞こえなかったけどな。
「別に…」
「声がしたの！私達を呼んでた」
「「「…」」」
由紀姉以外の俺たち四人は顔を見合わせた。が、誰も聞こえていないらしい。
…勘違いだと思う。でも、由紀姉のこういう時のは無視できないことが多い。
「由紀…それ気のせいだよ。早く帰ろうぜ」
「違うよ！本当に声がしたもん！」
「ワン！」
「由紀ちゃん、落ち着いて…」
「めぐねえも聞こえたでしょ！レイ君も！」
「そ、それは…」
めぐねえがなだめようにもあまり効果はないようだった。同意を求められたが…声はしなかったから何も言えない…。
「ワン！ウーッ！」
「あ！おい太郎丸！」
「一緒に行く！」
「待って！由紀ちゃん！」
「由紀姉！一人で行ったら…」
「と、とにかく追いかけましょう！」
突然、由紀姉に抱かれて大人しくしていた太郎丸が暴れて由紀姉の腕の中から飛び降り、デパートの中へ走っていった。追いかけるよう

にして由紀姉もデパートの中へ。
それを見た俺たちはとてつもなく焦り、慌てて追いかけた。
しかし、いつもの由紀姉とは比べ物にならないくらい早かった。
走っても走っても追いつけない。
「…？なんだ、アイツラ、一箇所に集まってる…？」
走りながら周りを確認するも、あまり数がいなかった。
気配的に、奥の方に集まっている感じがした。

…これ、もしかして本当に生存者がいた？それで俺たちのことに気づいたから出てきてここまできた？

「…善は急げ、だな。とにかく由紀姉を追いかけないと」
だが、生きているかもしれない人には悪いが、見知らぬ人間よりは学園生活部のみんなだ。絶望的だったならば、切り捨てさせてもらう。

「ワン！」
「…いた！あそこ！」

「えっ…」

「マジかよ…」
「本当にいた…」
「待て、あの数ちと不味…」
由紀姉が走っていった先は、でかいグランドピアノが置いてある場所。
そこには、一人の生きている、感染していない人間がいた。
ピアノの上に避難していて周りにはアイツラが大量にいる。
「太郎丸…それに…本当にいた…！」
「まず…まって由紀姉！止まって！俺が行くから！」

「でも…でも！……うわぁっ！」
「まって由紀ちゃん！」
「レイ君！くるみさん！あの子を助けてあげて！由紀ちゃんは私達がなんとかするから！」
「「はい！」」
りーさんや俺の制止も聞かず、駆け出した。
それを見てめぐねえがとっさに指示を出してくれて、慌てて動く。
左手にタオルを荒く分厚く巻きつけ右手に折りたたみ式ナイフを持つ。
「くるみさん、俺が突破します！周りの奴らをおねが…」
「レイ？どうした！」
そこで俺は、不意にも止まってしまった。

生きている人間は

見たことある人間だった。

蔑んできていたクラスメイトとよく一緒にいた。
一年生の時に、クラスメイトだった人間だった。

「あ…うぁ…」
「レイ！どうした！大丈夫か！」

それを認識した瞬間、僕の体は全くといっていいほど動かなくなった。目の前にアイツラが迫ってきているのに、全く体が動こうとしてくれなかった。
息ができなくなる感覚が襲ってきた。
辛い、辛い。次に出てきたのは恐怖。今まで蓄積してきたものが爆発したかのように恐怖が一気に襲ってきて。吐き気を催した。
なんとか我慢した。
「おいレイ！しっかりしろ！おい！」

「嫌だ…嫌だ。もう…あんなのは…」
「っ…！どうしたレイ！お前らしくねえ！」
「みんな！耳塞いで！」
くるみさんに胸倉を掴まれながら叫ばれ、りーさんが何かを叫んだかと思うと防犯ブザーを一気に鳴らした。
それで多少ながらも目の前の状況を改めて認識することができた。
防犯ブザーの爆音により目が覚めた。
周りをぐるっと確認し、あいつらの動きが止まっているのを確認した。
ずっとこっちを守ってくれていたくるみさんに、もう大丈夫、と口パクと腕を使ってオーバーに伝えた。
生き残っていた人間を見ると由紀姉が近くまで寄っていた。
思わず近づくな、と叫びそうになるがぐっとそれを堪える。

由紀姉達の周りにいた奴らを、邪魔になりそうな奴らだけを見極め、とにかく無心でうなじにナイフを突き立て切る。
「早く！こっちだ！」
くるみさんが二人を誘導してくれてる中、めぐねえはライトをばらまいてくれてよりアイツラを分散させてくれていた。りーさんは一番音源に近くだからか相当辛そうな顔をしていた。
防犯ブザーの音が鳴り響いている中、俺たち四人はめぐねえとりーさんの場所まで合流できた。
これ以上奴らをおびき寄せる可能性もあったから防犯ブザーの音は切ってもらい、とにかく走った。前と同じようにくるみさんが先頭を、俺が殿を務めとにかくデパートの外へ走った。
さっきのピアノのところに大半が集まっていたのか外までの道は比較的に楽だった。
が、とにかく脚が重い。
こんなにうまく動かないのははじめてだった。
何度も転びそうになったがなんとかバランスを保ち車までたどり着いた。

「それじゃあ、乗るのはどうしましょうか…」
「俺が運転席で助手席めぐねえと由紀姉。後ろにりーさん、くるみさん、そこの人で、お願いします。来る道は覚えましたし、夜までには学校につけると思います」
「わかったわ。でも、無理しないでね？さっき、とても体調が悪そうだったわよ？」
「ええ、もう大丈夫です。さっきみたいな失態はもうしません。ちょっと生き残ってた人が予想外すぎたので。思わず止まっちゃいました」
生き残っていたやつ――――――直樹美樹を見ると、あっちも俺を覚えてたそうでこちらを見るなり目をそらしてきた。
はいはい、目も合わせたくないってか。
名前を覚えているのは、同じクラスだったからだ。
これでも入った当初はすぐに馴染めるように、って思って全員の名前は覚えてある。
それも一年まで、二年の同じクラスのやつは知らん。名簿をみてすらない。
「(…相変わらず、昔のことで暴走しかけるのは悪い癖だな…。とっとと昔のことは全部忘れねえと)」
こうして長い長い学園生活部の第一回目の遠足は、俺にとっては最悪の気分で終えることとなった

9話　生存者との邂逅

「…」
「えーと、えーと…」
　車の中では軽車両なのに6人という大所帯で、かつレイとショッピングモールの生存者であった直樹美紀という女生徒との空気が悪すぎてみんな困惑していた。
「…あ、あー。由紀姉。遠足どうだった？」
「へ？う、うん！楽しかったよ！また次もやろーね！」
「はい、そうですね。めぐねえも、その時はまた助力お願いします」
「え、ええ。わかったわ」
　レイは、少しでも気を紛らわそうと、話をするがみんなたどたどしい。
　しかしそれもすぐ終わり、直樹美紀はすぐに眠りについた。
　よほど疲れていたのだろう。

　しばらくして学校に着いた。
　来た道は覚えていたため行く時よりは断然早く着いた。
　生存者はりーさんに背負ってもらって俺が先頭を担当し胡桃さんに殿を務めてもらう。
　夜だからあんまりアイツラはいなくて、本気で駆け上がり、緊急事態にもならず安全地帯へたどり着くことができた。
　そこからは流れ解散だった。
　シャワーを浴びる人、ご飯を食べる人、寝る人、勉強をする人、お菓子を食べる人と様々だった。
　俺はシャワーを浴びることにした。
　熱いものではなく、冷水を頭からぶっかける。
　多少落ち着いたとは思うがそれでもまだ生存者のことを思い出すと途端に体が震えてうまく動かなくなる。
　帰ってくる時も危なかった場面が多々ある。

コンコン

「ん？」

冷水を浴び初めて十分くらい経った頃だろうか。遠くの方の扉、シャワー室の更衣室へ入るための扉がノックされた。

「レイ君、今大丈夫かしら？話したいことがあるのだけれど」

耳を澄まして聞くとりーさんだった。

「ああ、構いませんよ。あとで生徒会室行くんで待っててください」

聞こえるように、大きく喋る。

すると『わかったわ』という声と共にまた音はシャワーの音だけになる。

「っと、この傷もようやく塞がりかけてるか？ようやくかよ」

体を拭いているときに左足首をよく見ると、血が固まりかけているのがわかった。

まだベトベトしてはいるが。

今までは止血を常時施さなきゃいけなかったからまだマシになった方だろう。

拭き終わり、ジャージを着て生徒会室へ向かう。

「どうも、りーさん。ただいま見参いたしました。…っと、めぐねえも一緒とは」

生徒会室にはりーさんとめぐねえがいた。

まああの生存者と会った時から少なくともめぐねえには話さなければならないだろうと覚悟していた。

「レイ君、今日のあの生き残ってた子についてなのだけれど…」

「ええ、でしょうね。胡桃さんから聞いた、って感じですかね」

そう言うと二人とも頷く。

「…えーと、何から言えばいいのか。とりあえず先に謝っておきます。二人とも、自分のせいでみんなを危険にさせてしまってすいませんでした」

「ちょ、あれはしょうがないわよ」

「そ、そうよレイ君。レイ君は何も…」

「いえ、そうであっても体が動かなかったのは俺自身の心の弱さ故です。これからはもうないよう、精進します。…さて、前置きはこの辺でいいですね。

…二人とも、俺のここでの一年生までの過去を知っているはずです。だからなんとなく察しはついているのでは？特にめぐねえは俺の一年の頃の名簿にも目を通していたのですから」

より一層、二人の顔は深刻になる。

「あの生存者の名前は、記憶が確かなら『直樹美紀』。俺が一年の時の同じクラスの人間です。運命って面白いですね。こうまで自分に縁のある人と会うんですから」

「同じクラス、と言うことはあの子もレイ君をいじめていたの？」

「もし仮にそうなら、私はあの子を受け入れられないかもしれないわ」

めぐねえは例えそうであっても受け入れなければ、そう思っているのに対しりーさんは違うようだ。もし自分の思うような人だったら受け入れるのを拒否する。そう言う言葉だった。

「正確には違いますね。直樹美紀といつも一緒にいた人間が…確か『圭』って呼ばれてたかな。クラスメイトではなかったですが、よくそっちの圭って方の人間が俺を見るたびに、気持ち悪い、とかそんな蔑んだ目で見てましたよ。直樹美紀の方は、それを窘めつつも軽蔑してたような、よくわからないものを見る目で、可哀想だと言う目で見てたから余計印象的でしたよ。虐めるわけでもなく、助けるわけでもなく、ただ傍観する。そんな明確な意思を持っていじめてくる人間よりも気持ち悪く、そしてなぜ助けてくれないのか、という何故憐れんでいる癖して何もしないのか、俺はそんな奴が不思議でなりませんでしたよ。だけど他の奴らよりはマシだったから、そんなに憎しみを抱いてないんでしょうね。

それでも、俺の体は拒否をした。

出会った瞬間に、本能的に体が恐怖を思い出した、って言えばいいんですかね。

そんな感じになって体が動かなくなって、震えて、過呼吸になって。

胡桃さんがいなければ割とマジであの場で全滅があり得ました。

全滅とは行かなくても俺は確実に死んでいた。
みなさんを危険にさせてしまった。
守ると言っておきながら自分のことで何もできなくなってしまった。
本当にすいません」
「ちょっ、話が変わってきてるわよ⁉？」
「そ、そうよ！レイ君は謝るようなことなんてないわよ。その…しょうがないと言うか…」
顔を上げると二人ともオロオロとしていた。
めぐねえはともかく、りーさんは珍しいな。なんというか得した気分だ。
「ただ、一つだけお願いがあります」
「？」
「俺をちゃんと見張ってて欲しいんです。すぐに見境なしに、怒る可能性があるんで」
「ど、どういうこと？」
「レイ君、ちゃんと説明して欲しいわ」
「はい。もし仮に直樹美紀が俺自身を馬鹿にする、軽蔑するなどをするのは、まあ構わないです。ただ、めぐねえ、由紀姉、りーさん、胡桃さんを馬鹿にするような、侮辱するようなことをしたのなら…俺は直樹美紀を許さないです。学園生活部から追い出す、または問答無用で喧嘩まで発展する可能性もあります。だから…そうなったら止めてください。俺は、皆さんのことになると見境なしになる傾向があるので」
もし仮に、めぐねえを馬鹿にした暁には、アイツらの中に放り込む、くらいはする気がする。
由紀姉を泣かしたら、それこそ他の人が（とくにりーさんが）放っておかないと思うし。
「丈槍零君」
「？」
突然めぐねえにフルネームで呼ばれる。

「貴方が過去に辛い思いをしていたのは知っています。
だから…それらを全て忘れてみんなと仲良く、今を精一杯生きて、なんてそんな事はいいません。
トラウマと向き合うのは生半可な覚悟でできるものでもありません。
だから…もし自分を見失いそうになったら、私たちを頼って欲しいの。私でも、悠里さんでも、胡桃さんでも、由紀さんでも構いません。辛いことを一人で背負わず、皆がいるということを、忘れないで。
貴方は、一人じゃない」

……ずるいです。急にそんなこと、言うなんて。
僕、何も言えなくなっちゃいます。
やっぱり慈さんは、すごいです。
僕が欲しい言葉を、いつもくれる。
そんな貴女を…僕は……

「…はいっ、わかりました。佐倉先生。本当に辛くなったら、先生を、みんなを頼ります。それじゃあ…俺はもう、寝ますね。最近夜更かしをしてるのか起きれなくなってきてるのでしっかりと生活リズムを戻さないと」
「ええ、ゆっくり休んでちょうだい」
「また明日ね、レイ君」
「はい、おやすみなさい。佐倉先生、悠里先輩」
そうして俺はベットの置いてある社会科教室へ向かった。

正直言うと、佐倉先生に最近嫉妬ばかりしている気がする。
多分それをするようになったのは、レイ君が来てから1ヶ月が立ちそうな頃からだったろうか。

すぐにレイ君を元気づけられるところや、レイ君が安堵する言葉を、欲している言葉をすぐにあげれるところ。
彼に、レイ君に愛されていること。
わかっている。これはどうしようもないエゴだ。
でも…どうしても感じてしまう。

嗚呼、もし私がずっと彼と一緒にいてあげれたのなら、と。
嗚呼、もし彼が私を好いてくれたなら、と。

嗚呼、もしこの世界に私と彼の二人だけだったなら、と。

…わかっている。これは、私のなかの、ドス黒い感情(エゴ)だ。
結局のところ、私も愚かな人間なのだと思う。
そうだ、そんなことを考えるくらいなら、もっと他のことを考えなければ…。

～次の日～
「ｚｚｚ…」
時は午前7時。
場所は社会科準備室。
この場には一人しかいない。
「…レイ君、まだ寝てるわね」
「昨日、一昨日と一番働いたのはレイだからな。多少はしょうがないさ」
「でも…ここ最近、レイ君の眠る時間が増えていっているのよね…」
その様子をそっと覗いていた悠里と胡桃はそう呟く。
とくに悠里はレイの体のことを知っていたからかレイの眠る時間が長くなってきているのを心配していた。
「そういえば、えーと…直樹美紀、だっけ。あっちの方はどうしたんだ？」

「めぐねえと由紀ちゃんが行ってくれているわ。めぐねえがいるから大丈夫だとは思うけれど…」
由紀は新入部員が入ると喜び、とてもはしゃぎながら早起きをしめぐねえを引き連れて直樹美紀の元へ行っていた。
「ん…。……ふぁあ…」
そうしているとレイがもぞもぞと動き出した。
半目で起き上がり、しばらくその場でじっとしていた。
そして何かを思い出したかのように時計を見、慌てて準備をし始めた。
着替えを始めたあたりから二人は慌てて視線を外し扉の外で待っていたが。
「ふふっ…レイがあんなに慌てんのは珍しいな」
「そうね。ちょっと得した気分だわ。由紀ちゃんやめぐねえの知らないレイ君を知ってるもの」
部屋の中からドタバタと聞こえてきてしばらくすると落ち着いた。
すると教室の扉が開く。
「「おはよう」」
「…おはよう、ございます」
レイはすぐ外にいた二人に驚きながらも挨拶を返す。
それを見て二人はくすくすと笑っていた。
レイは何が何だかわからず、釣られて笑っていた。
「さあ、ご飯にしましょう。もう準備はできてるわよ」
「申し訳ないです。…最近、起きれなくなっていってるなぁ…」
「疲れすぎてんだよ。レイは働き過ぎなんだっつーの。もう少し要領よくやったらどうだ?」
「みんなの命がかかっているのに、手を抜くわけにはいかないですよ」
「ふふ、そう言うところもレイ君らしいわね」
こうして3人は生徒会室へ向かった。

「お、今日の朝ごはんは豪華ですね」

生徒会室の机には珍しく缶詰が並んでいた。
まさによりどりみどり、といった具合だ。
「ふふ、遠足で胡桃が頑張ってくれたからね」
「ま、代わりに太郎丸もついてきたけどな」
「この世の中でこんなものを食べれるだけ恵まれてますよ。それじゃあ…この煮物で」
その中から一つ、魚の煮物の缶詰を取る。
「そういや、由紀姉達は？」
「二人とも美紀さんのところへ行っているわよ。なんでも、由紀ちゃんが新入部員に迎えたいって」
「珍しく由紀が張り切ってんだよな。相変わらず自分の好きな事になったら行動が早いと言うかエネルギーが大量に生まれると言うか」
「「確かに」」
胡桃さんの言葉に共に頷く。
「ふう、ごちそうさまでした」
「ごっそさーん」
「ごちそうさま」
魚の煮物を食べ終わり缶詰を燃えないゴミの袋に。割り箸は燃えるゴミへ入れる。
「それじゃあ…私は美紀さんのところへ行ってみるわ。何があるか分からないだろうし」
「あ、それなら俺も行きます。めぐねえいるから大丈夫だとは思いますけど…一応、念のため」
「それならあたしも行くよ」
と、結局3人で行く事になった。
ついでに太郎丸も、な。話に出てはいなかったがドックフードを元気に食べていたよ。相変わらず俺が近づくと威嚇するけどなっ！
（泣）

「ん…あれ、開きっぱなしね」

「ほんとだ。めぐねえが付いていながら珍しい」
「おーい、由紀ー。開けっ放しだぞー」
由紀姉達が行ったという教室へ向かうも、そこは廊下からでもわかるほど扉が全開になっていた。
それを咎めようとりーさん達と近づくとそこには

誰もいなかった。
由紀姉も、めぐねえも、直樹美紀も。

もし万が一、直樹美紀があの二人に何かをしたのなら…

と、思ったあたりで肩をポンと叩かれる。
「落ち着いてレイ君」
「これくらいで感情的になるな。由紀だけならともかく、めぐねえもいるんだ。滅多な事は起きねえよ」
「そう…ですね。すいません」
どうやら無意識のうちに手に力を入れていたらしい。
握っていた手をゆっくりと息を吐きながら開く。
「…探しに行きましょう」
「ええそうね。一旦みんなで自己紹介もしないといけないし」
「あとは単純に由紀が危なっかしい」
「確かに」
胡桃さんの言い分は何一つ間違ってなくて、思わずりーさんと共に笑ってしまう。
「近くの教室から探してみましょう」
「イエッサー」
「おう」

「由紀！」
「いた…。はーびっくりした」

「よかったわ。無事で」
　それからというものの、行く先行く先で居た痕跡はあるのに居ないから段々と焦って、しまいには3人で走って探していた。
　そして音楽室にて由紀姉、めぐねえ、直樹美紀を見つけた。
　そこでは由紀姉が何かを説明していたところ、らしい。
「あ、みんなー。どしたの？」
「どしたの？、じゃねえ…。本気で心配した……。あ、あー。由紀姉、時間大丈夫？もうそろそろ授業だよ？」
「あ、ほんとだ！急がなきゃ！いこ、めぐねえ！」
「めぐねえじゃなくて、佐倉先生…。…四人とも、仲良く、ね」
　めぐねえに念を押され、特に俺を心配そうな目で見ながら、俺は大丈夫と同じく目で伝えたらめぐねえは心配そうにしながらも由紀姉を教室へ連れて行った。
「それじゃあここで話すのも疲れるでしょうし、部室へ行きましょうか」
「賛成」
「そうだな」

〜生徒会室〜
「私たちはあの日、屋上にいて、それで助かったの」
「上の階ほど安全ですものね」
「まあ色々あったけどな」
　生徒会室では部員3人による美紀への説明が行われていた。レイのみは必要最低限のことのみしか喋りたがらなかったが。
「それで学園生活部とはなんですか？」
「落ち着いた頃にめぐねえとりーさんが考えたんだよな」
「そうね、毎日ただ暮らすのも気が滅入るから、いっそ部活の合宿ってことにしましょうってね」
「…もう一つ、質問いいですか？」
「何かしら？」

部活の説明が終わり、それでもなお疑問の尽きない美紀は質問を続ける。
「由紀先輩が…まるでみんな生きてるように振舞っているのは…どうして」
それを美紀が聞いた瞬間、3人の顔が険しくなった。
それもわずかな時間のことで、すぐに3人とも戻したが。
「由紀には、他のみんなは見えてるんだ」
「オカルト的な話ですか？」
「いや、そうじゃなくて…」
「部活を始めてからしばらくした頃かしら」
「それまですげー落ち込んでた由紀が元気になってさ。安心してたんだ。そしたら…元気になり過ぎた、っていうか…」
「あの子の中では事件は起きてないの。学校は平和で。先生も生徒もいっぱいいて」
「…そうなんですか」
「最初はたまにそんな風になる感じだったんだけど…。確か、レイ君がこの部活に入った頃だったかしら。その頃から…ずっと」
これはレイも初めて知った情報だった。が…レイ自身由紀の活発さに励まされていたこともあり、状態が良くないことは悟っていたが強く言えなかった。流されていた。が、それの直接的とは言えなくても原因の一つに自分が含まれていると分かり難しい顔をしていた。
「早く治るといいですね…」
「治る…？ふざけたことを。由紀姉の事を、何も知らない癖に…」
美紀の言葉には何も悪気はないだろう。むしろ善意しかない。が、3人、特にレイにとってはそれは侮辱としか聞こえなかった。それに怒ってレイが何かを言いかけた途端に遮るように悠里が言う。
「美紀さん、お願いがあるんだけど…いいかしら？」
「なんですか？」
「ここにいる間、あの子の様子に合わせてくれないかしら？」
「それじゃあ、そう甘やかしてたら、いつまでたっても治らないじゃないですか！」

「治るとか…なおらないとか……そう言うものじゃないのよ」
「まだ、お前には何もわからないだろ。由紀姉と、どれだけ過ごした？たった数時間。それで由紀姉の全てを分かったつもりか？傲慢にもほどがある。お前の感性で、由紀姉を、捻じ曲げようとするんじゃねえ」
「っ、どう違うって言うんですか。丈槍零、貴方こそ、貴方たちこそ、自分の理想がいまの由紀先輩だから、今の由紀先輩と一緒にいて楽だから、ほったらかしにしていたんじゃないの？このままじゃ、ダメなことくらいわかるでしょう？」
　レイの言葉に、美紀はすかさず反論した。
　由紀のことを本気で考えてるからこその言葉なのだろうが…それでも学園生活部として由紀とずっと過ごしてきた3人からしたら看過できないものだった。
「別にダメじゃないだろ」
「由紀ちゃんは学園生活部に欠かせない子よ。楽しいことといっぱい思いついてくれるから私もくるみも、レイ君もめぐねえも助かってる。それじゃダメ？」
「もっかい言うぞ、直樹美紀。お前は由紀姉のことをどれだけ知ってる？お前はまだ、由紀姉の事を全く知らないだろ。由紀姉のおかげで、俺たちがどれだけ助かっているか」
「それを甘やかしてるって言うんですよ」
「…」
　悠里と胡桃はそれに押し黙った。言いたいことはあるが、まだ我慢をしているようだった。
「それにそんなのは…
　ただの共依存じゃないですか」
「っ！お前なぁ…」
　真っ先に動いたのはレイだった。立ち上がり邪魔な椅子を蹴飛ばし、美紀の胸ぐらを掴む。

「落ち着け！レイ！」
「私、何か間違ったこと言ってる？」
　胸ぐらを掴まれても一切怖気付かず、レイをにらみ、レイも睨み返す。慌てて胡桃が止めに入るも一触即発は変わらなかった。なんとか胡桃と悠里がなだめて二人とも再度席についた。
「…直樹美紀、お前はなんだ？自分が絶対的な価値観を持ってるとかそう思ってるやつか？」
「何を…」
「お前は由紀姉に何をどうなってほしいわけだ？別に由紀姉があの状態だからってお前に迷惑をかけるわけじゃねえだろ。ならなんで無理に変えようとする」
「私は、普通に戻ってほしいだけ。あんな幻想に取り憑かれたかのようになっている由紀先輩より、本来の由紀先輩と仲良くなりたい」
「普通ねぇ…。

　なぁ、直樹美紀。普通ってなんだ？」
　それを言われて淀みなく反論していた美紀の口は止まった。
「普通ってのは、お前にとって違和感のないものじゃねえのか？今のお前から見て由紀姉は違和感しかないから、許容できない。だから治したい。違うのか？」
「違う！」
「じゃあどうしてだ？いくら人がどれだけ変わろうとも、その人はその人だ。それ以上でもそれ以下でもない。そもそも、人というものに、性格に、感情に普通という言葉を当てはめる事自体が間違ってる。由紀姉は確かに変わっただろうな。俺が初めてあった頃よりもっと活発になってる。でもそれでもそれは由紀姉だ。その人となりってのは他人が決めつけるものじゃない。その人自身が決めるものだ。お前がやろうとしてるのはお前にとっての違和感のない、自分の理想の型に、由紀姉をねじ込もうとしてるだけだ。
　そんなもの…俺が許さねえ」
「じゃあ、由紀先輩がいつか壊れたとしても、それは由紀先輩のせいだ

と、自分は関係ないと言い張るわけ？断言できる。由紀先輩の症状は、いつか由紀先輩自身を壊す。そうなると取り返しがつかなくなる」
「そうならない為に、俺が、りーさんが、くるみさんが、めぐねえがいるんだよ」
　そして両者は再度睨み合う。
　それが１０秒ほど続いたくらいだ。
「はい、一旦終わり。レイ、落ち着け」
「美紀さんも、レイ君疲れすぎてて気が立ってるから、このことはまた後日話し合いましょう」
「はい。由紀先輩のことをきちんと知ってから。…で、いいんですよね？」
　そうしてこの場での話し合いは一度終わった。以前空気は悪いままではあるが。
「…そういや、なんだっけか、お前の親友だがなんだかは」
「え？」
「確か…圭、って呼んでたっけか？あいつはどうしたよ。いつも一緒にいただろ。お前ら。それでよく圭の方は俺を蔑んだ目で見てたっけな」
　レイが皮肉を交えてそういうと美紀は苦い顔をした。
「やっぱり…覚えてるんだ」
「ああ、生憎記憶力はいい方なんでね。俺を蔑んでたやつらは、一度目があった奴は全員覚えてるよ。よく圭って奴にも気持ち悪いって吐き捨てられてたっけな。お前のいないところだと俺のクラスのやつと一緒になって直接的にやってきたのはよく覚えてるよ」
「圭はそんなことしない！」
「だが事実だ。俺は、やられたことは忘れない。万が一圭がいたら本気で見捨てるつもりまであったが…圭はどしたよ。まさか見捨てたか？」
　嘲笑うようにレイが言う。
　単なる推測ではあったが、それは美紀の心には突き刺さったよう

だ。
「お、図星か？その様子だと、圭が一人で先走って安全な場所から出ていった、って所か。それを止めるわけでもなくついて行くわけでもなくただ傍観してた。そんな所だろ」
「っ！」
それによって今度は美紀が手を挙げた。
レイの胸ぐらをつかみ、いつでも殴れる、といった感じになっていた。
「お前は、親友を、見捨てたんだよ。直樹美紀。俺とは違う。もしかしたら助けれたかもしれない、一緒にずっといられたかもしれない選択肢を、全部捨てて、親友を見捨てたんだ。ろくにあいつらのことを知らない奴が一人であのショッピングモールを出られると思うか？まあ十中八九、圭は死んでるだろうな。
圭は、親友のお前が殺したも同然だ。見殺しにしたんだ。わかるか？お前はな…」

「レイ君！」

さっきからずっと横で悠里たちに叫ばれていたことにようやく気付いたレイがハッとなった。
「…すまねえな、言いすぎた」
そしてばつが悪そうにして小さく言う。
「…ちと、頭冷やしてきます。屋上で…何か作業しておきます」
「あたしも行くよ。りーさん。美紀と一緒にいてくれるか？」
「ええ、わかったわ」
レイと胡桃は屋上へ向かい、悠里と美紀はこの場に残った。
「…ねえ、美紀さん。一つだけ、聞いてもいいかしら？」
「はい…なんでしょうか」
「レイ君は、嫌い？」
悠里の質問に、あまりの直球な質問に、一瞬驚きながらも美紀は口を開く。

「好きか嫌いか…で言えば、今は嫌い、です。でも…それは私が何も知らないから。…先ほど言われたこと、全部彼の言う通りです。私は…親友を、見捨てた。それを認めたくなくて……私が目をそらしていたことを全部言ってきて、それで私が逆上した。…由紀先輩のことはともかく、私のことは、全部彼が正しいのに。それを認めたくなかっただけなんです。だから…

これからは仲良くなれるよう精一杯頑張ります」

「そうね。そうしてもらえると嬉しいわ。

…私もね、美紀さんと同じよ」

「私と？」

「美紀さんのお友達の圭さんと別れた時はどんな風だったのかわからないけれど…。

私は、一度大事な人を、見捨てようとした」

「え？」

悠里の言葉に、美紀は思わず聞き返した。今まで話していた感じでは悠里がそんなことをするとは思わなかったからだ。

「ある雨の日にね。まだアイツラの特徴とか何もわかってない頃だったわ。アイツラが大量に校舎の中に雪崩れ込んできた時があったの。

なんとか頑張って逃げてたのだけれど…途中でどうしても追いつかれそうで…。そんな時に、めぐねえは自身を犠牲にして私たちを助けようとしてくれた。

…あの日、もし私も武器を手に取っていたなら、もっと判断をしっかりできていれば。

…めぐねえに甘えて、自分たちだけ助かろう。なんてそんな考えは思い浮かばなかったと思うわ。

…今でも、その判断をしかけたことを、私は悔やんでる。罪悪感で押しつぶされそうな時があるの。

でも…そんな私たちを助けたのは、レイ君だった。レイ君がいなければ、きっとめぐねえも、私も、胡桃も、由紀ちゃんもいない。もちろん、美紀さんとも出会えなかったかもしれない。レイ君はね、私の、

私たちの命の恩人なの。それに、私だけじゃない。胡桃も、めぐねえも、レイ君も、…もちろん由紀ちゃんも、みんな過去に傷を背負っている。見捨てた、とはまた違うけれど、みんな大事な人を、目の前で失っている。だから…すぐに仲良く、仲直りをしてとは言わないわ。ゆっくりと、時間をかけてみんなと仲良くしてちょうだい」

「…はい。…そうですね。それではまず初めに…レイに謝りに行きます」

「ええ、わかったわ。私も一緒に行くわ。きっとレイ君、過去のことが絡んだらまた見境なしになっちゃうかもしれないし。その時は私も一緒に止めないと」

「…お願い、します」

１０話　弱音

～屋上～

「…ねえ、胡桃さん」

「どうした？」

あれから気まずくなり、屋上へ逃げた。

菜園の整備をチマチマとやっていると途中から胡桃さんがやってきて手伝ってくれた。

その途中に、ふと訪ねてみた。

「…俺たちは、由紀さんに……由紀姉に、依存しすぎていたんでしょうか」

「そーだな。間違ってはない」

「由紀姉は…多分多重人格のような、ものだと思います…。もしくは自分の嫌なものが見えてないだけか。……でも、それでも周りを楽しませてくれる。そんな由紀姉に…俺たちは、みんな、依存していたんですかね。心地が、いいから」

「間違ってはないな。学園生活部の誰もが、あたしも、りーさんも、めぐねえも、由紀に励まされ続けてきた。だから状態が間違っても完全に良いとは言えないことがわかっていてもそれを強く指摘しなかった。でもな、仮にだ。ここにいる全員がみんなドヨーンとして、もうこれから先はもう終わりだ、みたいな気持ちでいたらきっと、もうあたしたちはここにはいない」

「……」

「よく部活の練習や大会でも言われたんだけどな。『自分の辛いことを周りに共感させるな。共感させるなら、前向きなものだけにしろ。感情は思っている以上に伝染するものだ。なら周りが前向きなら自然と周りも前向きになって自然といい方向に進む』ってな。きっとそれをしてくれているのが今の由紀だ」

「でも、それでも由紀姉の症状は…状態は、良いとは言えない」

「悪いとも言えないだろ」

「でも…っ！もし、俺の、俺たちのせいで由紀姉が壊れたら…」

「壊れないかもしれないだろ。むしろしばらくしたら治るかもしれない」
「…俺たちは、専門家じゃないんですよ。もしこれで、由紀姉が…」
「確かにな。あたしの言ってることはただの希望的観測ですごい楽観的な考えだ。でも、それで不確定な要素を、不安な要素を増やすくらいなら、前向きにみといたほうがいい。由紀のことは、それについての専門的な人が生き残ってた時に考えたほうがいいんじゃねえか？それか、あたしらが完全に安全だって言えるまで」
「…」
「な？わかったろ。結局どこまで話しても『たられば』の域を出ない。平行線から脱せない。
あたしらは専門家じゃない。
私たちが余計なことをして由紀が余計に変になったらそれこそ大変だろ？だから、今は現状維持。それでいいんじゃねえか？」
「…はい」
たしかに、胡桃さんの言う通りずっと話は平行線だった。
由紀姉はいい状態に今後なるとも言えるしならないとも言える。
医者でもない俺たちがわかるわけがない。
「…そういえば、図書館にそういう人格系の本があったような…。今度見に行ってみるか…」
「うへぇ、また難しそうな本を読もうとしてんのか。相変わらずだな」
ついでに心理学とかもやってみようかな。なんだかんだ面白そうなんだよな。あの辺の本。

ガチャ

「？」
「レイ君、くるみ。調子はどう？」
「…どうも」
「おう、平気だよ。黙々と作業をしてたくらいだ」
現れたのはりーさんと直樹美紀だった。

「りーさん、先程は取り乱してしまってすいませんでした」
「良いわよ。ケンカしなかっただけ。ただ…次から気をつけてね？」
「はい。…直樹美紀も、すまなかったな」
「いや…私も、ごめん。配慮が、足りなかった。少なくともみなさんは今の由紀先輩に助けられているのに、その全てを否定したかのような言い方だった。先輩方も、すいませんでした」
「別にいーよ。もう気にしてない」
「私も、次このようなことがなければいいわよ」
「…ただ、一つだけ」
「「？」」
　最後に一つだけ、どうしても言いたいことが、あった。

「直樹美紀、まちがっても、めぐねえを…慈さんを、悲しませるな、辛くさせるな。あの人は、ずっと、一人で、独りで、俺たちを、僕たちを助けてくれた。だから…これ以上めぐねえを、辛くさせたり、バカにしたり、貶すな。もし約束を違えたら、俺は…お前を許さない」
「え？」「レイ…？」「レイ…君？」
「っ⁉？俺…今、何を…」

　今、俺は、何を喋った？何を…
人間の言葉じゃないものを喋った？
　思わず自分の口を覆うようにして口がちゃんと動くかどうか確かめてみるが、ちゃんと動く。声も出る。

「レイ君。貴方一旦休みましょう。疲れすぎてるわよ」
「そ、そうだぜレイ。呂律が回ってなさすぎだ」
「…はい」
「ね、ねぇ。待ってレイ。貴方…！」
「ちょっと、先に下行ってます」
　美紀に何かを言われていたがそれを無視して屋上から出る。そし

てそのまま社会科準備室へ、寝室へ向かう。

…クソッ、遠足の日から俺らしくもねえ。何してんだ…。

「な、なぁ。りーさん。レイのあの言葉…。どっかで聞いたことが…いや、絶対に、あるんだけど…」
「ええ、私もよ。むしろ…毎日その声しか、私たち以外には、しないわね」
「待てよ！それって…レイが……レイが感染してるってことかよ⁉？」
胡桃が悲痛な叫びをあげる。
それもそうだ。信じたくない可能性が浮上してきたのだから。
「でも、今のレイ君は…アイツラのようにはなってないわ」
「噛まれてたりは、してないんですか？」
「…」
美紀の疑問は当然だった。
感染している可能性があるならば、噛まれているのを見るのが妥当だ。
だが、それに対して悠里は黙った。
「なあ、りーさん。何か知ってるのか？」
「私は…何も、知らないわ」
「本当ですか？」
「本当よ」
胡桃と美紀が隠し事がないかと問い詰めるも、悠里は何も知らないと突っぱねた。
「なら、レイ君に、聞いてみればいいじゃない。きっと…何かあれば、教えてくれるわ」
「…ああ」
「わかり…ました」
胡桃、悠里、美紀の3人は下に降りていったレイの元へ向かった。

「あ！みんな！……あれ？りーさんも胡桃ちゃんもみーくんもどうしたんだろう？」
「本当ね…何かあったのかしら…？」
　生徒会室の横を通り過ぎた３人を部屋の中から由紀と慈が目撃していた。
　由紀は仲良くなったねーと気楽なことを言っているが慈は３人の顔が険しいのを見て不安を抱いていた。
「ちょっと待っててね、由紀ちゃん。先生、悠里さん達のところに行ってくるわ」
「私もいく！」
「由紀ちゃんは、みんなを楽しませることを思いついたのよね？」
「うん！だからみんなにも…」
「だからね、サプライズで明日の朝ごはんの時に伝えましょう。そのために、由紀ちゃん、今日は普通に過ごしましょう？」
「…うん！わかった！」
　そして慈は生徒会室を出て３人の元へ向かった。

「みんな！」
「佐倉先生？」「めぐねえ？どうしたんだ？」「佐倉慈…先生」
「その…みんなが険しい顔で通って行く姿を見て……どうしたの？」
　３人の元へたどり着くと、どうやら寝室で使っている社会科準備室へ来たようだった。案内をしていた、というわけでもなさそうだった。
「ねえ、めぐねえはレイのこと、何か知らないですか？」
「レイ君のこと…？何かあったの？」
「今日、あいつ…変な声を、出したんです」
「変な声？」
「なんというか…アイツラのような声を」

「え⁉？」
　言われた言葉を理解するのにはそう時間はかからなかった。
　ここで私たち以外で生き物（？）は一種類しかいないから。
「待って…もしかして、レイ君が…？いや、噛まれたなんて…言ってないわ。何かの聞き間違いじゃ…」
「いや、絶対に聞き間違いじゃない」
「本当です。私も聞きました」
　どうか聞き間違いであってほしい、そう思って聞いてみたが胡桃さんと美紀さんに否定された。
　悠里さんだけ、黙ったままだった。
「まずは、レイ君本人に聞いてみて、確かめようって思ったんです。だから…」
「今レイくんは、寝てるの？」
「はい。下へ行くって。それで場所は部室かここくらいしか…」
「…先生も、一緒にいても、いいかしら？」
「はい」「勿論です」「佐倉先生もいてくれた方が、心強いです」
　申し出ると3人とも快く受け入れてくれた。

　その安心感とは裏腹に、ずっと悪い想像が頭から離れなかった。

「レイ君。いる？」
　コンコンと社会科準備室をノックする。
　けど返ってきたのは沈黙だった。
「レイ君？」
　再度声をかけるも返事はなかった。
「レイ君、入るわね？」
　扉に手をかけ、開ける。

「レイ君⁉？何してるの⁉？」「ちょっ、レイ⁉？」「レイ君⁉？」「レイ⁉？」
　そこで見たのは

窓から身を乗り出しているレイ君だった。
慌ててみんなで近寄り、レイ君の体を引っ張った。
「うわっ⁉?ちょっ、待って待って！違うから！違うから！飛び降りようとか自殺しようとかそんなんじゃないから！ちょっとですね！あっ、話を聞いて⁉?あぶっ、逆に危ないから！ちょっと待って⁉?」
何かを言っていたが問答無用で引っ張って部屋まで引きずり込んだ。

「「「はぁ、はぁ…」」」
「いや、なんかすいません」
レイ君はすごいバツが悪そうな顔でその場に座っている。
「な、何をしてたの…レイ君」
「い、いや。だからですね…あの…あちらをご覧ください」
レイ君が指差した方向には、いい具合にガラスの破片や色々なゴミが溜まっていて、その中央にスズメが怯えた状態でいた。
「よっ…」
そして、再度レイ君は窓から身を乗り出し――――気づかなかったがちゃんとロープで腰を縛り、それで命綱にした状態で――――スズメのいる方へ手を伸ばし始めた。
「ギリギリ手が届きそうだから、それなら助けようって思いまして。それで…ほら、大丈夫大丈夫…、…よし。ほら、もう大丈夫」
レイ君は器用に窓の外壁を伝ってスズメのところへたどり着き、救助して空へ放した。
終始、落ちるんじゃ無いかと不安で仕方なかったが戻ってきてようやくその不安は消えてくれた。
「それで、皆さんどうされました？…っても、心当たりしかないんですけどね」
そういうレイ君の表情を見て、私はどうしても、聞きたくなかった。

でも、聞かなきゃならない。
「屋上で、俺が発した声。俺すら驚きました。…もう、あまり、時間がないのかも。なんて俺らしくもない考えに至ってますよ」
耳を塞ぎたい。ここから先のことを、聞きたくない。
「…嘘ですよ。めぐねえ。自分の体は自分が一番わかってます。まだまだ、現役です。全然動けます。だから…そんな顔をしないでください。慈さん。貴女が辛い顔をしていると、僕まで辛くなってしまいます。貴女は…僕の…いや。これ以上はやめておきましょう。単なる惚気になっちゃいそうです」
そう言ってレイ君は微笑む。

…ああ、そうだ。いつもこの子の笑顔に助けられてる。
先生としてやっていけるのか不安になった時も、レイ君にいつも励まされていた。
両親や友達すら先生に向いていないって言われたのに、レイ君だけが、ずっと先生に向いてるって言って励ましてくれていた。

でも、今は…だめだ、この笑顔に甘えて、目の前のことから逃げたら、それこそ教師としてでも、人としてでもダメになってしまう。

「レイ。一つだけ聞かせてくれ。お前の出したあの声は、なんなんだ？」
「まあ、当然の疑問ですね。俺にも詳しいことわかりませんが…一つだけ、心当たりがあります。
…その前に、皆さんに、一つだけ質問です」
「「？」」
「皆さんは、覚悟がありますか。他人を、見捨て、切り捨てる覚悟が」

直感で、理解をしてしまった。
ああ、嫌だ。聞きたくない…。

「どういうことだ?」
「ええ、より具体的に言いますと、不確定要素な俺を、見捨てる覚悟が、もしくは殺す覚悟がありますか、ってことです」
「は? 何言ってんだよ。レイ」
「ええ、単純ですよ。……ただ、その前に……」
そういってレイ君は窓に腰かけた。
まるで今すぐ飛び降りて死ねるように。

「……そういえば、由紀姉は?」
「由紀ちゃんは、部室で待ってもらってるわ。職員会議があるから、って言ってあるからしばらく戻らなくても大丈夫だと思うわ」
「そうですか。……よかった。由紀姉には、余計な心配をかけたくないですから。
さて、ここからは気を確かに、してくださいね」

そしてレイ君は、ゆっくりと、左足の靴と靴下を脱いだ。

「⁉?」「レイ……それ……」「やっぱり……」

左足首(そこ)にあったのは、明らかな咬み傷。
悪い予感は、的中した。

「ええ、俺はアイツラに噛まれています。そして、感染した。まだ俺が学園生活部に入る前にいた、地下での出来事です。話したら長くなっちゃいますが、まあ聞いてくださいね?」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「「……」」
「以上が、俺があの日から地下で過ごし、学園生活部に入るまでの全容です」
レイ君の口から、全てを聞いた。
何があったのかを。それにより何が起きたのかを。
「これ以上、隠していることは、慈さんに誓って、ありません。俺、慈さんと母さんだけには嘘をついたことがないのは、知ってますよね？」
そうだ。だからこそ、今聞いたことは紛れもなく本当なんだと、理解できる。
感染している、というのも。
「俺は、皆さんが俺を追い出す、と結論付けたならば従います。なんなら今決めてもらっても構いません。その時は、ここから俺は飛び降りるだけなので。でも、俺自身もまだ生きる理由があるので。できれば追い出して欲しくはない、ですね」
「理由？」
「とぼけないでくださいよ。りーさん。分かりきっているというのに」
悠里さんとレイ君が話すが、何のことなのかわからない。
理由…？
「まあ、ひとまずそれは置いときましょうか。俺が学園生活部にいる上でのメリットは〇つあります。
一つ目は、労働力として使い捨てれること。ほとんど疲れませんから、いくらでも動けます。
二つ目は、食料の節約になること。俺は空腹感があるだけで、ほとんど飲まず食わずでも生きていけています。一食、乾パン1～2個、水少量あれば数日は何も口にしなくても大丈夫です。
三つ目は、交渉の材料となれること。もし仮に、他に生きている人がいて、その人達と争いになったときに、俺は薬の在り処などとわ

かっていますから、それで争いを止めれる可能性も高いです。さらには、もしこの事件を解決しようとしている組織がいれば、俺は貴重な回復例として、つまりは皆さんの安全性を確保するための交渉源と成り得ます」
「待って、レイ君。それって…
いざという時にはならレイ君を犠牲にして生き延びろ、ってこと？」
私は、レイ君の言ってることを理解してしまった。
だから、それが間違っていてほしいと思い、聞いてしまった。
間違っているわけなんて、ないのに。
「はい。正解です慈さん。いざという時には、ですけどね。俺は、まだ死ぬつもりなんて一切ないです。何も、したいことをできてませんしね。ただ、切り捨てる選択肢もある、ということだけ思ってくれていたらいいです。
…長くなっちゃいましたね。そろそろ部室戻りませんか？由紀姉、きっと待ちくたびれてますし」
レイ君の言葉で、足取りは重くともみんなで部室へ戻った。
あしたから…どうやって、接すればいいんだろう…。

ああ、また、嘘をついた。
慈さんにだけは、嘘はつかない。
そう決めていたのに。
避けられるのが、怖がられるのが、軽蔑されるのが怖くて、嘘をついた。
相変わらず、僕は、俺は、卑怯者だ。
そんな俺に、僕に、学園生活部にいていい資格なんて、あるのだろうか？

最近はネガティブなことばかりを考えている気がする。
…嗚呼、でも…慈さんへの気持ちだけは、ちゃんと伝え切りたいな。

～就寝時間が過ぎた頃～
「…」
思わず、目が覚めてしまった。
夢を、久しぶりに見たから。
いや、悪夢だ。
俺以外のみんなが、いなくなって、血まみれで、倒れている。
そんな冗談ですまないような、夢。
呼吸が荒くなって、汗もすごいかいている。
「…いやいや、そんなことは、ありえねえだろ。てか、絶対にさせねえ。絶対に…だ」
「ん…レー君？どうしたの…？」
頑張って自分の気力を保っていると由紀姉が目を覚ましてしまった。
想像以上にうるさかったらしい。
「…ちょうどよかった。由紀姉。ちょっと外に…夜風に当たりたいんだけどさ、付き合ってくれない？」
「ふぇ…？でも、めぐねえに怒られるんじゃ…」
「大丈夫。すぐに終わるから…。だめ…かな？」
「わかった～ちょっとだけ待ってね～」
由紀姉は寝ぼけながらも承諾してくれた。
そしてノソノソと動き出して、立ち上がった。
俺は椅子を二つ持ち出して外へ出る。

「わぁ…！綺麗だね！」

「…ええ、そうです…ね」
由紀姉と廊下の窓の前に座り、そんなことを言い合う。
…きっと、由紀姉には単なる綺麗な街並みと、綺麗な夜空が見えてるんだろう。
「…夜風が、涼しくて、いい気持ちだな…。久しぶりに、落ち着けてる気がする」
悲惨な光景とは裏腹に、夜風は優しく通り過ぎてくれてすごい涼しい。
「ねぇ…レー君、今日どうしたの？」
「え？」
突然由紀姉にそう聞かれた。
「今日、レー君凄い…疲れてるというか、いつものレー君じゃない感じ？辛そう…？なのかな？」
どうやら…隠し事は、下手らしい。
相変わらず、顔に出やすいのかな。
でも、心のどこかで期待をしていたのかもしれない
由紀さんなら、慰めてくれるんじゃないのかって。
甘えてるのかもしれない。

でも…。

ちょっとくらい、弱音を…吐いても、いいのかな？
俺が、そんなことをしてもいい資格なんて、あるのかな？
「…」
「由紀…姉？」
言っていいのか悩んでいると由紀姉に顔を持たれて由紀姉の方に引き寄せられた。
そしてそのまま由紀姉の足の上に寝る形になった。
「由紀姉？どうしたの？」
「大丈夫だよ。レー君。私だけしか、聞いてないから。今だけなら、いくらでも弱音を吐いてもいいよ。大丈夫。全部、私が受け止めてあげ

るから。いつもレー君は頑張ってくれてるから。ちょっとくらいは弱音を吐いたほうがいいよ。辛いことを我慢し続けたら、辛いもん」
　そう言う由紀姉の声は、すごい優しくて、包み込んでくれそうな、そのような感じがして、それと同時に今までのことを思って、弱音を吐いてもいいのか、と思い急に、涙が溢れそうになった。けど、頑張って堪えた。
「…ねえ、由紀姉」
「うん」
「由紀姉は…僕が、人を傷つけた、取り返しのつかないことをした…って言ったら、どう思う…？軽蔑…する？」
「そんなことしないよ。みんな、きっと何かを心の中に抱えてるもん。だから…大丈夫」
「…僕、今まで隠してたことを、その事をみんなに、伝えたんです。それで…軽蔑されるのは、いいんです。自分の事だから…。
　でも…めぐねえに、慈さんに…嫌われるのが…距離を置かれるのが……怖いんです。嫌われたくない…次からどう向き合えばいいのか、わからない。みんなとも、どうやって会えばいいのか…。1人には、慣れてるけど…独りになるのが、僕の大切な人たちに見放されるのが、凄い…怖い…」
「心配しなくていいよ」
　僕らしくもなく、嗚咽を漏らしながら告白をすると由紀姉は、由紀さんは僕の頭を優しく撫でながらそう言った。
「めぐねえはそんな事しないよ。きっと驚いてるだけだよ。絶対に、レー君を独りになんかしないよ。それにりーさんもくるみちゃんも、もちろん私も、レー君を見放したりなんて、しないよ。みんな、レーくんを大事に想ってる。だから…大丈夫だよ。きっと明日には、またみんな仲良くなれるよ」
　そう言ってくれる由紀姉は、凄い優しくて、慈愛に満ちていて、いつもの由紀姉らしくなくて。
　でも、凄い安心した。

「…すいません、もうしばらく……このまま…」
「うん、いつ迄も、してていいよ。だから…早くいつものレー君に戻ってね」
「はい…」

11話　胡桃さんへのリベンジ

「…何で俺、由紀姉に抱きつかれてんの？」
久しぶりに目覚ましが鳴る前に目が覚めた。時計を確認すると5時半を指していた。
だが由紀姉に抱き枕にされてるのはなぜだ。
「…っと、頼むから目を覚まさないでよ…」
ゆっくり、慎重に由紀姉の腕をどける……だけどさ！由紀姉強く抱きしめないで！何がとは言わないけど色々当たってる！
「…何してるの」
「おー直樹美紀。いいところに。この腕引き剥がしてくんね？」
「…」
おい待て、今何を思った。別に下心あるわけじゃ無いぞ。
つか俺も何でこうなってんのか知らんのだ。昨日の記憶があんまり無い。

つか律儀に外してくれるのな。助かる。

「あー、サンキュ。何がとは言わないが色々助かった」
「…どういう意味よ」
「色々だ。さて…直樹美紀、ちょっと付き合えや」
「え？」
「図書館に行くが、一人で行ったらまたりーさんやめぐねえに怒られるからな。だからだ。それにここの図書館は数は劣るが中身は大学のそれとほぼ同じだ。お前にとっても悪い話じゃねえだろ？」
「でも、外にはアイツラがいるんじゃないの？」
「この時間帯なら居ても数匹程度だよ。ほら、行くぞ」

丈槍零にほぼ無理やり連れていかれた図書館。彼は真っ先に医療関係のところへ向かっていった。

「えーと、これとこれ…あとこいつか…。ほらよ」
「え、わっちょっ！」
梯子を使い、上の方にある本を手に取ったかと思うと一気にこちらへ放り投げてくるから、慌ててキャッチする。
それの表紙には『多重人格とは』『精神病について』『心の医療』『なぜ幻覚を見るのか』など、私が見ようと思っていたものばかりだった。
「お前が知りたいのはその辺だろ。俺も読むからちゃんと持っといてくれよ。あとは…あっちだな」
「ちょっ！待って、重…」
最後に一冊重いものをズドンと乗せられ、彼はまた別のところに向かっていった。
そこは微生物やウイルスといった本がたくさんある場所だった。
「俺が読んだのが…確か…これだこれ。よし、俺の用事は終わりだ。お前の他に読みたいものは？」
「え？えーと…ここ、英語の本とかってある？」
「例えば？」
「外国の人が書いた小説とか、そんなもの」
「ああ、確かあるよ。どんなものがいい？」
「…学校生活が舞台だといいかな」
「なるほど。なら……ちと待ってろ」
即興でのリクエストなのに零は迷うことなく何処かへ行った。離れていいのか、と言ったけど周りにはいない、と言われそのまま待つことにした。
数分経った後、零は二冊の本を持って帰ってきていた。
「ども、そんじゃ帰るぞ。その本よこせ」
「わ、ちょっ！」
そして私の持っていた本を無理やり取った。持ってくれる、ということでいいのだろうか。
かなり重いはずなのに涼しい顔で先頭を歩いていく。
…私の知っている丈槍零は、こんなハキハキしている人じゃなかったから、余計に困惑する。

「なんだよ、俺の顔になんかついてるか？」
「いや、別に」
「ならさっさと帰るぞ。見つかったらまたりーさん達に怒られる」
「また、ってことはちょくちょくやってるの？」
「バレない程度にな。半分くらいバレてるけど」
「それ、バレない程度とは言わないよ」
「それもそうだな」

～2時間後～

「……」
「レイ君、何か言うことは？」
「…怒ってる顔も素敵ですよ、りーさん。……嘘です！嘘ですごめんなさい！」
あれから、案の定見つかった。まあそれもそうだ。悠里さんが起きてきたら見知らぬ本が大量にあったんだから。帰ってきたのが6時頃、そして見つかったのは6時半。
そして私はお咎めなしだが丈槍零はもう常習犯とのことでずっと怒られている。
「で…美樹さんとそう言う風にできた、ってことは仲良くできるのかしら？」
「うーん、まあ、はい。何とか。喧嘩はしません。絶対。…多分」
「レイ君？最後何と言ったの？」
「べ、別になにも？そ、それよりも！由紀姉が何か呼んでるんじゃありませんでしたっけ！」
「…まあいいわ。レイ君のことは信用してるから。でも、信用してるのと規律を守らなくてもいいと言うのは別問題です。次またやったら…」
「わ、わかりました！次はちゃんと報告してから行きます！」
「よろしい」
…きたばかりだけど上下関係もうわかった気がする。
少なくとも丈槍零は悠里先輩に頭が上がらない。

「…なんだよ」
「別に」
ずっと見てたのが丈槍零にバレて半目で見られるがちょっとだけ含みのある笑いで返す。
はぁ？と言う顔をしながら丈槍零は立ち上がり何処かへ向かった。
「…まあ、仲良くしてくれてよかったわ。あの子なりに、昔とは折り合いをつけたのかしらね」
「仲良く、と言うかは向こうから無理やり連れ出されたんですけどね」
「それでもよかったわ。もしまた喧嘩したら…って思ってたから」
「流石にもうしません」

「運動会！しよ！」
「「「はい？」」」
「だ・か・ら！新入部員も入ったことだし！運動会！」
また唐突な…。大事な話があるからと呼ばれたはずなのに。
「だからって…なんで運動会？」
「ほら！みんな最近頭使ってるじゃん！だから思いっきり体を動かしたほうがいいよ！」
「それは由紀姉が頭を使ってないだけなのでは…。あと遊びたいだけでしょ」
「な、なにおぅ！そ、それにほら！学園生活部心得第５条！」
「「「部員は折々の学園の行事を大切にすべし！」」」
ああ、はい。俺は構わなかったけどみんな言うあたりやる気満々なんですね。
「…？」
「まあ、つまりは由紀姉のスケールの大きい遊びに付き合えってことだ直樹美樹」
「そんなことより、他にやることがあるんじゃないの？」
「例えば？」

「例えばって…」
「すぐに出てこないなら運動会実行だ。最近本ばっか読んでるから身体なまってるし、ちょうどいい。全員ギッタンバッコンに倒してやる」
「ふふーん。短距離走で私に勝てると思ってるのか？」
「いいですよ、次こそは勝ちましょう」
　次こそ胡桃さんには勝ってやる。今まで勝てたこと殆ど無いし。
「それじゃあ、色々準備しないとね。私は職員室に報告してくるわ」
「わかりました」
「はーい！」
「あ、俺もついていくよめぐねえ」
「だから…めぐねえじゃなくて…」
　職員室に向かうというめぐねえに一緒についていく。
　昨日とかほんと心配かけちゃったから、少しでも安心させてあげたいし。
「…レイ君、もう大丈夫？」
「はい、御心配をおかけしました」
「なら良かったわ。…体の方も、大丈夫なのよね？」
「もちろんです。昔から病気には縁がない生活でしたしね。風邪も、インフルエンザとかもかかったことありませんし。医者曰く、病原体に異常に強い体質らしいですし。めぐねえも知ってるでしょ？…まあ、今回の原因のウイルス？はインフルとか他の感染症なんか比較にならないぽかったですけどね」
　それを伝えると余計に心配してしまった。余計なこと話しちゃったなぁ…。
「…あ、思い出した。そういえばめぐねえ、ここに配属されたての頃、教頭先生になんか非常時のなんたら、って冊子もらったとか言ってなかった？」
「え⁉？い、いやそんなこと言ったかしら？」
「うん、確か言ってたはずなんだけど…あれ？俺の気のせい？」
「そ、そうじゃないかしら！」

「ふーん…。あ、そうそう、ちょっとめぐねえに相談することがあるんだけどさ…」
「え？」
「実は…」

「それって…」
「今言うべきじゃないのはわかってます。でも…早いうちに、覚悟だけでも決まっていたほうが楽です。…あくまでも、予想、です。外れるかもしれません。もしかしたら完全に的外れかもしれません。ですので、こんな可能性があることを、覚えておいてください」
「他の子達には話したの？」
「いえ、まだ誰にも。ただでさえ絶望の淵にいるのに、更に追い討ちかけるのは酷なので。でも…直樹美紀は頭がいいから、俺が読んでたものを読めば、きっとわかるでしょう。大丈夫です。みんな強いですから。…例え――――――――――」
「レイ君！」
考えを告げると、声を荒げた慈さんに抱きしめられた。その手は、震えていて涙の落ちる音がする。
…ごめんなさい。でも、多分。これは決まりきってる未来だから…。だから、どうか…。

「ほらほら！レー君はやく！準備するよ！」
「へーい」
「元気ですね、由紀先輩は」
「まあ何時ものことだな。レイが絡めば更に倍になる」
「それとめぐねえもいたら完璧ね」
「…私から見たら姉弟というよりは…恋人？にしか見えないんですが…」
「ああ、それは無い。レイはめぐねえにゾッコンだから」

「そうねぇ。けれど由紀ちゃんは手強いし、どうなるかわからないわね」
「…そうなんですか」
なんか四人から見守られてる。なんでだ。
あと早くこっち手伝ってくださいよ。一人で由紀姉の相手をするなんて体力がいくらあっても足りません。
全員に目で訴えると渋々といった感じだがみんな手伝い始めてくれた。
くそぅ、この借りは運動会で返してやる…。

「よーし、準備できたねー！運動会！はーじめーるよー！」
「「おー！」」
「お、おー？」
「怪我しないようにねぇ」
「まずはー、短距離走！出場選手は？」
「俺と」
「あたし」
「それと私ですね」
「おおっ！みーくん二人に実力見せつけちゃってよ！」
「みーくんじゃありません。…ですが、それには賛成です」
ゆっくりと時間をかけで柔軟を終わらせ、見守る。廊下で三人で走ったら事故る自信しかない。
てことで最初は胡桃さんと直樹美紀。
胡桃さんはシャベル背負ったままでいくらしい。本人曰く、『ハンデ』だそう。
結果は胡桃さんの圧勝。
これは気を引き締めなければ。
「おっしゃ、次はレイだな！かかってこーい！」
「休憩はいらないんですか？」
「そんなものいらん！無くても勝てる！」

「言いましたね？」
とまあ、意気込んだはいいものの、俺もボロクソに負けました…。
「美紀は十分休憩できたか？なら次はレイとだな」
「丈槍は休憩いらないの？」
「構わない。てかレイでいいぞ。丈槍だと由紀姉も反応するしな。…にしても…体なまりすぎ…」
「なまってるというより、普通にタイム落ちすぎてね？前までもう少しいい勝負だったろ」
「ですよねぇ…。鍛え直さなきゃ」
あ、直樹美紀との短距離走は俺の勝ちでした。うん、胡桃さんが早すぎるだけな気がしてきたよ。
それ以外といえば借り物競走だったり、障害物競走だったり。
玉入れ、綱引きなんてのもやったりした。
結論だけ言おう。
半分くらいしか勝てませんでした…。
いや言い訳させてくれ。借り物競走とかおかしい。好きな人とか何？仕組んだでしょ胡桃さん？ねえ、玉入れだけ俺のカゴめっちゃ小さくなかったですか？
いや楽しいならいいですけども。

言わなきゃならない。隠し通せるわけがない。それに、コレによると地下には物資もたくさんある。レイ君の話からもそれは確実だ。
でも、それを明かすことはあの事も明かすことになる。
何度も私のせいじゃないと思おうとした。でも、これは私達大人の責任だ。だから…私も責任を取らないといけない。
きっとみんなに軽蔑されてしまう。でも。それでもいい。
みんながこの先、幸せになれるのなら…。私一人の犠牲など、おし

くもない。

私は、みんなの教師なのだから。

１２話　たまには息抜き

「…」
最近、夢を見るのが多くなったと思う。
寝る時間がいつもより多くなったせいか。
自分のそんな状態を冷静に分析している間も
夢を見る原因は……なんだっけ？
まあいいか。

高校…入った理由？決まってる。慈さんと共に在りたかった。

確か、母さんが…どうなったっけ。いなくなったのは覚えてるけど、原因…事故？だっけ？
よく覚えてないや。

最近は記憶を維持するのもできなくなってきた気がする。つい１週間前の出来事を鮮明に思い出せなくなった。
前は十年前とかのも普通に鮮明に思い出せていたはずなのに。
…僕ももう年かな？はは、まさか……

まさか、ね。

「……イ」
「……」
「レイ。丈槍レイ」
「……なんだよ、直樹美紀」
「私のことは美紀でいいって言ったと思うけど」
「癖だ。……んで、何。朝っぱらから。こちとらずっと本読んでたから眠いんですが」

「もう電気がついてたから気になったの。それでこれって、昨日取ってきた本？」
「ああ。バクテリアに細菌に、免疫構造、あとはこの近辺のニュースが纏められた本。なんでこんな物を作ったのか知らんが、原因解明の一歩になる可能性はあるだろ」
「原因？」
　寝起きのあまり回ってない頭でなんとか直樹美紀との会話を成立させる。
「ああ。主にこの現状が起きた原因、そして俺がまだ発症していないこと、あとはお前達だよ直樹美紀。りーさんやくるみさん、由紀姉、めぐねえ達だ」
「？」
　そう伝えるもあまりわかっていなかった。
「物事にはな、原因と結果が必ずあるもんだ。偶発的に起きたようなことでも、必ずそれが起きた原因が何処かにある」
「それは当たり前じゃないの？」
「そうか？じゃあ今の現状を確認した上でその原因をお前なりに考察してみろ」
「今は…謎の感染症が起きて、ゾンビみたいになって、ゾンビが人を噛んで、広がってる」
「それだけじゃねぇ。各交通機関及び各県、日本政府の機能、果ては世界。そのほとんどが機能停止してると言っていい。おそらく主要な人物は生きてるだろうけどな。それこそゾンビ映画みたいにな」
「え？」
「実際に電話とかかけまくったからな。自衛隊も死んでれば海外の有名どころも息をしてない。じゃあそれを踏まえてだ、原因はなんだと思う？」
「原因…それこそ感染が広がったからじゃないの？」
「違う、いや違わないけど俺が聞きたいのはなんで感染が広がった？しかも突然。なんの前触れもなく」
　そこまで言うとよくやく深く考え始めた。

ちなみにこの話はまだ部員の誰にも伝えてない。俺自身もあまり確証を持ってる持論じゃないし。

唯一話してるのはめぐねぇくらいだ。

「…元々あった病気の原因、極端に言えば風邪、他だとインフルエンザなんかのウイルスが突然変異して、広がって。…接触感染をどんどん引き起こして。でも、こんなパンデミックになる前に、すでに感染してる人がいたけど耐性がある人がいて、その人がまだ発症してない間に他の県に行って、そこでも広がって。同じようにして海外にも…って、感じ？」

「おー、流石は優等生。一発でそこまで持っていくか。もしかして生物専門？」

「茶化さないで」

「茶化してはないんだがな。本当にいい線いってると思うよ。俺も似たようなこと思ったしな。

でもな、欠点がその仮説にあるんだよ。接触感染のみ…まあこいつらの場合は咬み傷か。そこから広がっていったにしても感染拡大が速すぎる。詳しい話は省くが、仮に耐性を持つ人間がウイルスを持って、発症までに半日かかったとする。

かかってから半日足らずで行けるところなんざ、新幹線でも使わない限りせいぜい数個となりの都道府県程度…いや場合によってはもっといけるか。でもそれくらいだ。でもだ

このパンデミックが起こって数日で日本はほぼ壊滅だ。流石に速すぎる。だから俺はこう考えた訳だ。

このウイルス、もしくは細菌は空気感染で広がってる」

「な…」

直樹美紀は絶句をした。

めぐねえも同じような反応だったな。俺もその可能性に辿り着いた時は思わず机を蹴り飛ばした。

もしそうなら今は違っても絶望しかない。

耐性のある人間でも、これだけ感染源の中央でさらされてるならいつかは負ける。それにいつこの病原体が突然変異を起こすかもわか

らない。
　そうなればもう打つ手もない。
「じゃあそうなってくると次の疑問が浮かぶ。空気感染で広がると言うならば、なんで俺たち…俺は例外だな。なんでお前や、りーさん、くるみさん、由紀姉、めぐねえは感染してないんだ？」
「それは…」
「俺はそこだけが今だに分からん。だが、今感染は発症してないから本当にただただ接触感染で広がりまくっただけかも知れんけどな。けど、接触感染の線で考えても、空気感染の線で考えても、どうしても辻褄が合わない。空気感染の方が流れはスッキリするけどその後がどう仮説を立てようにも、突拍子が無さすぎて現実味が一切ない。…ふぁぁ。眠…。でももう朝…起きてないと…また…しんぱい……」

「…寝ちゃった？」
　部室と言う名の生徒会室で専門書のように分厚い本を5冊ほど傍にレイはそのまま寝てしまった。もしかして徹夜で読んでいたのだろうか。私が来た時は目を閉じていたからてっきり寝落ちしていたと思っていたけど。
「それにしても…空気感染。考えてすらなかった。だとするなら、どうすれば…」

ガラッ

　これからのことを考えていると扉が開いて2人入ってきた。
「あら、おはよう」
「おはよー」
「おはようございます。先輩」
「…レイくん、またこんな所で寝てる」
「本を持ち帰った日の恒例行事になってきたな」
「そうなんですか？」

それは初耳で、思わず聞き返してしまった。
レイの事は色々と聞いたけど、数日と経たずにまた新しいことが出てくる。
「そうなんだよなぁ。こいつ確か…なんてったっけ？」
「知識は何にも勝る武器になる」
「そうそう。そんなことを言っててな、ここに来た時とか図書館とここ何回も往復してバッカみたいに厚い…ちょうどこんな本だな。これと辞書を使ってずーっと読んでは何かを描いてたんだよ。で、大半が寝ながら書いたのか読めない」
「自分でも何を書いたかわからないからもう一回読む、そしてまた書いてそれが読めなくて、みたいなことをやってたのよね。懐かしいわ。今回のは…まだ読めるわね」
そう言われてレイの胸元を見ると確かにルーズリーフが１０枚くらい、シワになっていたが挟まっていた。
悠里先輩、よくすぐに気がついたな、と思ってしまった。
「…うえ、専門用語の羅列…頭痛くなりそうだ」
「うーん、細菌、ウイルス…感染？免疫…あとはよくわからないわね」
……。話しても、いいのだろうか。勝手に。
レイから口止めされているわけじゃないけど、それでも話していないという事は…どうするべきなんだろう。
「？どうかしたか？」

「……いえ、何でもありません。
レイはさっきまで起きてたんですがとうとう限界が来たみたいで。もう少し寝かせておいてあげた方がいいと思います」
「ほーん…美樹、ほんっとレイとすんなりと接するようになったな」
「いつまでも毛嫌いするのはダメかと思いまして。私はレイのことを何も知らないので。少しずつでも知っていこうと思ってます」

「…あっつい」

「お寝坊さんにはお似合いじゃね？」
「こちとら勉強詰の寝坊ですよ…」
起きたら屋上の貯水槽の前だった。
何で？って思うかもしれんが俺も聞きたい

なんで？

事の詳細を聞くと太郎丸が貯水槽にドボンした事で貯水槽が汚いことが発覚。
だから掃除しよう。
うん、そこまではわかる。
ただ…

「…プールではない気がするんですが」
「細かい事は気にしちゃ負けだ。それにショッピングモールで水着買ったろ？みんな着たいんだよ」
「…俺買ってないですけども」
「由紀が買ってたぞ？」
「へ？」
待って初耳。
てか魚邪魔。
なんで貯水槽に魚入ってんの。ビオトープじゃあるまいし。
「ま、プール開きしたいんだから付き合えってこった」
「話の流れで察してはいましたよ。…まあ別に構いませんけども。俺は泳ぎませんよ？」
「は？なんで？」
「皆さんの水着姿に囲まれて俺の理性が保つとは思えませんので」
「ほーん？嬉しいこと言ってくれるねぇ。このこの」
くるみさんに頬を突かれる。当たり前だ。タダでさえ普段のだらーんとした姿に時々ドキッとしかけてるんだから。
水着なんてそんなものを見た日には理性が壊れる。

あと俺が理性壊れたら割とシャレにならない気がするし。
「後は…個人的に調べたいことがまだまだあるんですよ。昨日やっと手がかり掴めそうなところまで…」
「なんて？」
「…いえ、なんでもありません。早く終わらせましょう。由紀姉、遊び出しちゃってますし」
「あらま」
ブラシをかけてる最中、由紀姉を見るというか綺麗に滑って後頭部を打って悶えていた。
うん、自業自得。
太郎丸は…相変わらず俺が見ると警戒するな。なんでだよコンチクショウ。

結局、俺はその場に拘束された。なんで？
後水ぬるすぎません？俺だけ？

いやそれにしてもめぐねぇの水着の色気ヤバすぎない？やばいんだけど理性崩壊しそうなんだけど。一生忘れない。あの恥じらいの顔も含めて。
写真を撮れなかったことをこれほど後悔した日はなかった（真顔）

「…あ。確か保健室の先生…緊急時のマニュアル持ってるとか言ってたっけ…。今度探索行った時に見てみようか」
「なんだ？それ」
「さあ？俺もそんなのをもらったのよー程度にしか聞いてないので。次保健室行った時に探索します？肝試しの一環とか言って」

「そうだなー。でも職員室に似たようなのあるんじゃね？保健室行くよりそっちの方が安全だと思うんだけど」
「…確かにそうですね」
　地下のこととか買いてあったりするのかな？詳しいことがわかれば優先順位とか決めれるんだけど。
　後はこの近辺の避難場所だとか、もしかしたら生存者がいるかもしれない。
　まあこの前遠足行った時にそんなものはなさそうだったけど。
「それで…くるみさん、なぜに俺は貴女と勉強してるので？」
「いやぁ、りーさんに捕まりそうだったから。つい」
「意味がわからないです」
「ほら、由紀との勉強をやってるところに遭遇しちまってな、それで巻き込まれかけて、つい『レイと勉強する予定がある』って言っちゃって」
「…なるほど。というか、それでいいんですか。俺、曲がりなりにも貴女の後輩ですよ？」
「あたしはレイには運動能力で勝ってるからな！」
「それでいいんですか…」
　つまり、逃げの一手として使ったと。いやまあ、構わないですけど。
　頼られるのは悪い気はしないし、でも俺は俺で他に勉強することがあるから片手間にはなってしまうけど。
「ああ、でも由紀とりーさんに苦い顔されたのはビビったなぁ」
「それこそ何でですか」
「いやまあ…そこは、な？」
「？」
　理由聞いたらはぐらかされた。多分聞かなくてもいいことなんだろうけど、こうなってくると気になってくる。
「あ、これはどうなるんだ？」
「…これは…確か、……」
　えーと？これ積分でしょ？三角関数と…三次関数…？いや、空間？

むっず。

「ちょっと待ってください。俺も個人的に解きます」
「おう」
「終わったらまたやるので、それまでは別のことをお願いします」
「はいよ。なら現国でもやるか」

こうしてルーズリーフおよび参考書と格闘することとなる。

「レイ君。こっちに…あら」
「しー。今レイのやつものすごい集中してるんで」
「そう。…数学？しかもこれ、大学入試の過去問？」
「はい、何となく…やろうと思ったので」
えーと、こっちの関数で、変数を？いやもっと簡単な解き方…いやいや、ひとまずゴリ押しで一回解いてみよう。
「良いことよ。頭の運動にもなるし。でもこれは…ちょっとレベル高いんじゃないかしら？」
「レイならいけるかな？と思いまして」
「ほどほどにね。それじゃあ…終わったら2人で来てちょうだい。もうすぐご飯が出来るらしいから」
「はーい」
あ、ここから起点にしてこっちの定理使って。…おっ、行けそう。
こっからどうやって簡略化しようか。絶対やってやらぁ。

「おーい、レイ」
「待ってください、もう少し、もう少し…」
「…はいはい」
「ここをこうしてこっから……ブツブツ…」
相変わらずのレイのこの集中力はすごいと思う。

これは見習わないと思う。あたしの手持ちにあった過去問の中で特に難しい問題を集めた問題集の中でも一番難しい問題を臆することなく、なんなら『面白そう』の一言でガンガン解き始めた。けどかなりの難問のようで既に計算用紙で１０枚目に突入しそうだ。

「…りーさん達が惚れるのも分かるんだよなぁ」

でもだ、それでもあたしはレイに惚れることは多分ない。理由は…まあ内緒にしとこう。あたしらしくないし。

「……いよっし！おわった！」

「おー、お疲れー」

「でも、解いておいてアレですが、本当に解説聞きます？正直こんな問題やるくらいなら他のことやったほうがいい気がしますが」

「いーんだよ。んじゃ飯食ったら教えてくれ」

「りょーかいしました」